

1. 平安宮跡・聚楽第跡発掘調査報告

1. はじめに

1) 調査に至る経緯・調査体制

今回の調査は京都府警察本部の依頼により実施したもので、西陣待機宿舎の建設に伴う埋蔵文化財調査である(第2図)。調査地は、平安京の条坊復原によると平安宮の北東部、内裏の北東に位置し、「梨本」と記された箇所にあたり、安土桃山時代の聚楽第があった場所である。

梨本院についてはよく分かっていないが、聚楽第は関白豊臣秀吉が京都の公邸として天正14(1586)年に構えた邸宅である(第3図)。今回の調査対象地は、従来の聚楽第研究によると、本丸南辺付近にあたり、中軸線よりやや西側に位置している。敷地の南境界付近には、本丸を囲う濠が位置しているものと推定された(第4図)。

調査は建物建設範囲を全面にわたって実施したが、掘削による排土を場内で処理する関係から、対象地内を5回に分割して調査を実施した。当初、南辺の敷地境から十分な空間を空けて調査トレンチを設定していたが、その後、西南隅の下端を約3m南の調査対象範囲南端まで掘削して調査を行ったところ、地表下3.5mで、一辺1m弱の石材を用いた石垣を東西に7石、最大3段を検出するに至った。石垣は東・西側に続いており、建物建設予定地内の未調査部分にあたる、既調査の南側に隣接して石垣が遺存しているものと想定された。その遺存状況を確認するために、石垣の東側において230㎡の追加調査を実施したところ、調査対象地の東端まで石垣が続いていることを確認した。

現地の公開は、10月7日(日)と12月24日(月)の2回実施し、それぞれ、910名、2,300名の参加者を得た。その後、石垣は土嚢袋で養生した後埋め戻し、12月27日に調査を終了した。

検出した石垣は、関係機関の協議の結果、現状のまま保存されることとなった。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、京都市文化市民局、財団法人京都市埋蔵文化財研究所をはじめ、地元自治会のご協力を得た。また、多くの先生方から専門的なご指導をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、京都府警察本部が全額負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保

同調査第2係調査員 古川 匠

調査場所 京都市上京区上長者町通裏門東入須浜町

現地調査期間 平成24年5月25日～12月27日

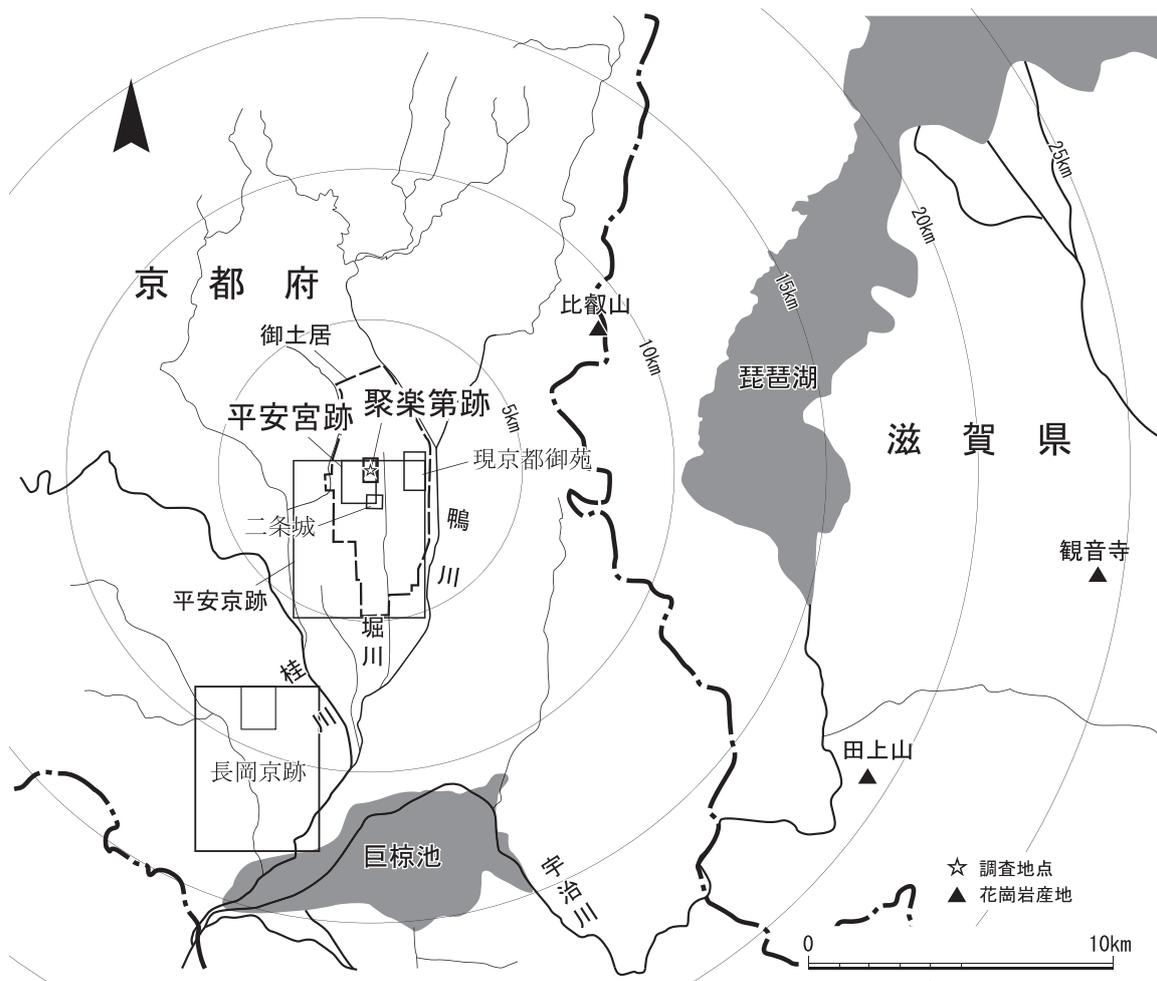
調査面積 1,330㎡

(岩松 保)

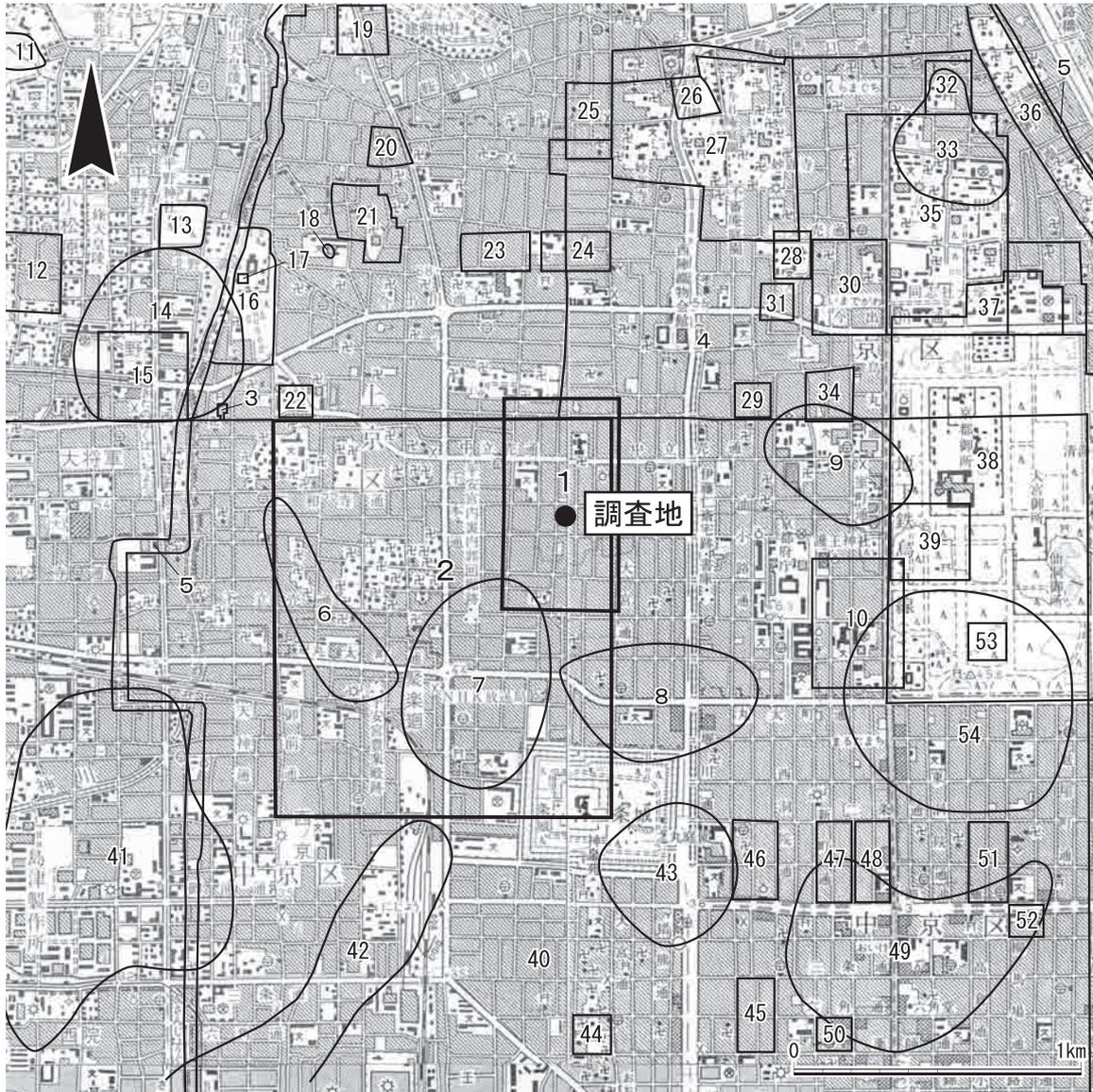
2)位置と環境

平安宮大内裏は平安京中央北部にあり、朝堂院・豊楽院以下二官八省の官衙と皇居たる内裏があった。桓武天皇は、延暦11(792)年9月と11月に葛野郡に遊猟し、翌年の正月15日には大納言藤原小黒麻呂・左大弁紀古佐美を葛野郡宇多村に派遣し、その6日後に天皇は長岡宮の内裏から東院へ移っている。このように十分な時間を掛け、延暦13(794)年10月に桓武天皇は長岡京から平安京に移り、遷都がなされた。調査地の位置は、平安宮内裏東方の「梨本院」(梨下院)に比定される。梨本院は、職御曹司北隣の40丈四方の区画で、『類聚国史』巻28によると、天長9(832)年4月2日内裏修造の際に、淳和天皇がここに移御している。また『文徳実録』では、仁寿3(853)年2月14日条に先代の仁明天皇の別宮であったと記され、当代の文徳天皇は、この日から翌齊衡元(854)年4月まで、梨本院を座所としている。

平安宮内の建物は延暦年間に造営され、以後、焼亡・再建が繰り返されるが、徐々に再建されることが無くなり、平安宮は荒地となっていく。内裏は、天徳4(960)年に初めて焼け、以後、



第1図 平安宮跡・聚楽第跡位置図(S=1/250,000)



第2図 調査地点位置図(S=1/25,000)

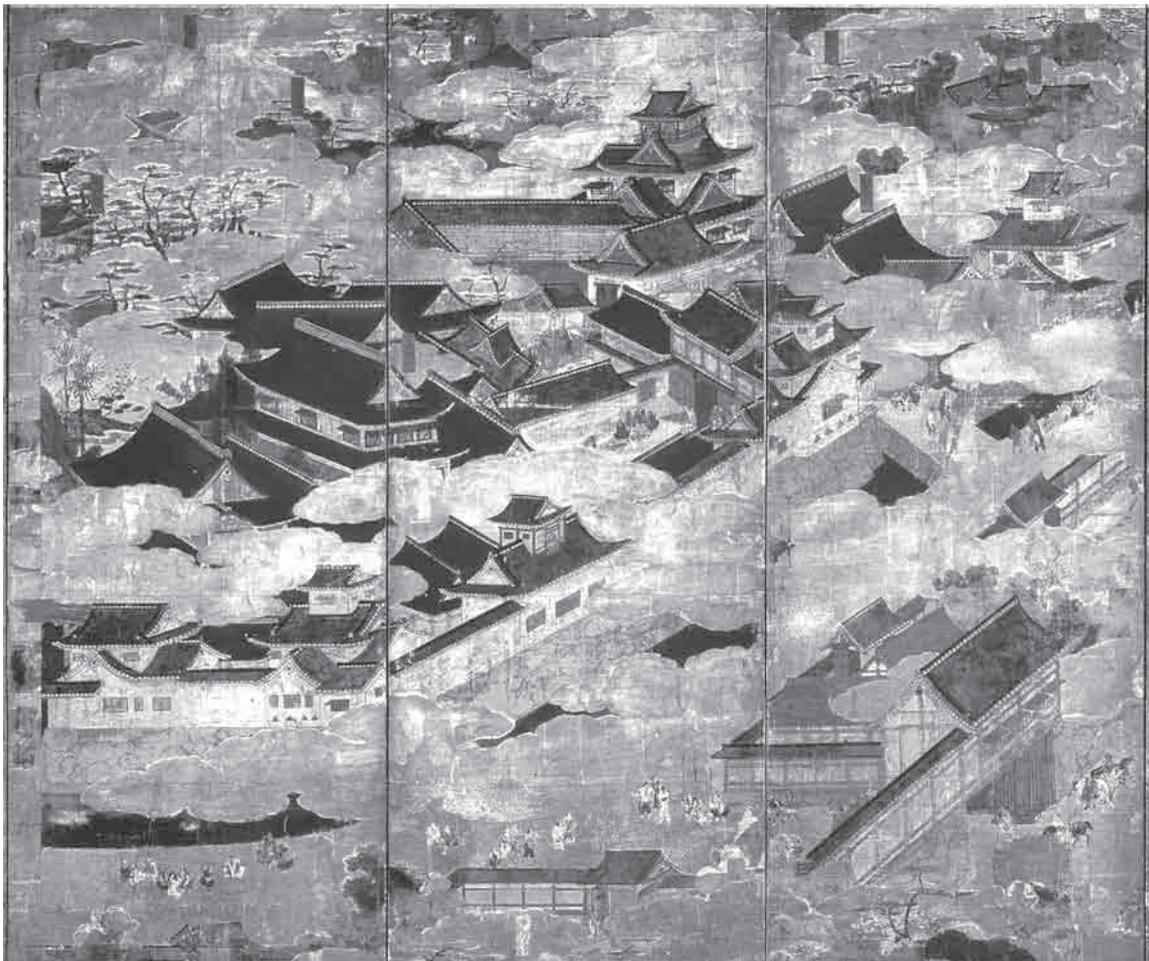
(国土地理院 京都市東北部、京都市西北部、京都市東南部、京都市西南部)

- | | | | |
|-------------|---------------|--------------|---------------------|
| 1. 聚楽第跡 | 15. 北野廃寺 | 29. 草堂跡(行願寺) | 43. 堀川御池遺跡 |
| 2. 平安宮跡 | 16. 北野天満宮境内 | 30. 室町殿跡 | 44. 旧本能寺の構え跡 |
| 3. 大将軍八神社境内 | 17. 北野天満宮境内経塚 | 31. 本満寺の構え跡 | 45. 本能寺城跡 |
| 4. 上京遺跡 | 18. 北野鳥居前町遺跡 | 32. 出雲寺跡 | 46. 妙顕寺城跡 |
| 5. 御土居跡 | 19. 北山蓮台寺境内 | 33. 上御霊遺跡 | 47. 妙覚寺城跡 |
| 6. 鳳瑞遺跡 | 20. 引接寺境内 | 34. 一条室町殿跡 | 48. 二条殿御池城跡 |
| 7. 聚楽遺跡 | 21. 大報恩寺境内 | 35. 相国寺旧境内 | 49. 烏丸御池遺跡 |
| 8. 二条城北遺跡 | 22. 北野右近馬場城跡 | 36. 寺町旧域 | 50. 姥柳町遺跡
(南蛮寺跡) |
| 9. 内膳町遺跡 | 23. 尊重寺跡 | 37. 常盤井殿町遺跡 | 51. 等持寺跡 |
| 10. 旧二条城跡 | 24. 世尊寺跡 | 38. 公家町遺跡 | 52. 三条坊門殿跡 |
| 11. 衣笠山古墳群 | 25. 紫野斎院跡 | 39. 新在家構え跡 | 53. 頂妙寺の構え跡 |
| 12. 香隆寺跡 | 26. 悲田院跡 | 40. 平安京跡 | 54. 烏丸丸太町遺跡 |
| 13. 平野神社境内 | 27. 寺ノ内旧域 | 41. 西ノ京遺跡 | |
| 14. 北野遺跡 | 28. 新町校地遺跡 | 42. 壬生遺跡 | |

15回の火災に遭っている。安貞元(1227)年4月に再建中の殿舎が火災によって焼失し、以後再建されることなく、宮城内の内裏は完全に廃絶し、平安宮の跡地は「内野」と称される荒地として放置された。「内野」は『今昔物語』や『梁塵秘抄』にも載っており、12世紀末までには平安宮の地の大半は荒地となっていたようである。

この後、平安宮の跡地は以下のような記事が散見されるだけで、豊臣秀吉が聚楽第を造営するまで荒地であった。天福元(1233)年に、幕府は御家人が馬場として利用することを禁じている。中世には京都名産の一つとして、内野蕪があげられており、畑地として利用されたようである。南北朝時代にはこの地で合戦が行われている。建武2(1336)年には足利尊氏の兵が名和長年を敗死させており、明德2(1391)年には足利義満が山名氏を討った明德の乱が起こっている。また、室町時代には京都に攻め込んだ土一揆が、内野に集まっている。大内裏跡は全体としては荒廃が進んだが、太政官庁、神祇官庁、真言院は修造・再建に努められ、15世紀中葉には神泉苑とあわせて「大内霊場」「四箇所霊場」と称される施設として門・築垣を備える施設として存続し、儀式・神事が執り行われていた。^(注1)

また、調査地の位置する梨本院北方の大宿直では、大内裏焼亡以前から大内裏衰微にしたがって次第に人家が建つようになり、14世紀までには織手(織物技術者)が集住していた。^(注2) 鎌倉時代以



第3図 聚楽第図屏風(部分・三井記念美術館所蔵)

降は大宿直跡を中心に居住域が拡大し、梨本院跡も「大宿直」都市域に含まれるようになる。織手が集住する大宿直跡一帯は後の西陣の原型となるものであった。また、室町時代には手工業者に留まらず金融業者である酒屋、土倉の存在も確認される繁華な一帯となり、祇園祭に際して「大舎人の笠鷲鉾」を演出した。応仁・文明の乱が始まると、繁栄していた大宿直の地域は一条大宮の戦いによって罹災し、織手達は離散する。応仁・文明の乱後は復興が試みられ複数の寺院が営まれるが、16世紀前半の戦国時代の京都を描いた「歴博甲本 洛中洛外図屏風」等には一帯は田畑として描かれている。絵画資料が実体を表しているとするれば、16世紀の早い段階でこれらの寺院は廃絶したのであろう。

天正10(1582)年に上洛中の織田信長が明智光秀に本能寺で討たれ、毛利氏を攻めていた羽柴秀吉は速やかに和睦を結んで京に戻り、山崎の合戦で明智光秀を倒した。秀吉は、翌年の天正11(1583)年に柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで倒して、信長の後継者の地位を確かなものとしていく。同年に石山本願寺の跡地に大坂城の造営を着手し、京都・大坂への地盤を固めていく。

この段階では、秀吉は京都の居所として妙顕寺(妙顕寺城)を用いていた。妙顕寺城は、日蓮宗の妙顕寺の地に天正11(1583)年に建立した城で、二条西洞院にあった。秀吉は、天正13(1585)年7月に関白に就任したことから、京都での政庁・居城として、内野の地に聚楽第を建造した。聚楽第は、関白・秀吉の権威を広く誇示する豪華絢爛な城郭で、諸侯に建築用材を課し、樹木、庭石を所々から蒐集して造営され、天正15(1587)年に完成した。天正16(1588)年4月には後陽成天皇の聚楽第行幸が催され、総動員された傘下の諸大名、武将に朝廷へ尊崇を尽くすべき旨を諭し、そして秀吉への完全なる臣従を後陽成天皇の前で誓わせた。聚楽第の近隣には大名屋敷街が整備され、天正19(1591)年には御土居の造営が開始され、京都の市街は聚楽第の城下町と化した。

天正19(1591)年に、秀吉は、養子の秀次に関白の地位と聚楽第を譲るが、文禄4(1595)年になると、秀吉と秀次の関係が極度に悪化する。失脚した秀次は聚楽第を退去し、同年7月に高野山で自殺した。翌月の8月に秀吉の命により、「一字も残さず、基礎にいたるまで悉く毀たしめ」(ジアン・クラセ『日本西教史』^(注3))とあるように、聚楽第は徹底的に破壊され、建物の多くは造営中の伏見城(木幡山伏見城)や寺院に移された。

破却後の聚楽第跡は短期間で空き地となり、慶長期から寛永期にかけては芸能興行の場として活用された。寛永年間の後半になると居住が許され民家で埋まるが、聚楽第の濠跡が凹みとして現代まで残るなど、この一帯の都市化は旧地形に制約されたもので、江戸時代の絵地図を参照する限り空き地も多かったようである。

江戸時代末になると幕府の権威がゆらいで情勢が不安定化し、京都は再び政治の表舞台となる。そのため各藩は京屋敷を充実させ兵員を駐留させた。聚楽第跡の一帯は二条城の北、御所の西方に位置する立地条件から、佐賀藩鍋島家、仙台藩伊達家といった雄藩の京屋敷が近隣に立ち並び、調査地には大和郡山藩柳沢家の京屋敷が築かれた。近代に入ってから調査地は京都府警察本部の所有地となり、現在に至っている。

(岩松 保・古川 匠)

3) 周辺の調査

江戸時代には、徳川將軍家が滅ぼした豊臣氏の事績に触れる事は厳しく制限され刑罰の対象となっていたが、江戸幕府の権威が衰えた天保14(1843)年になって、名倉希言が聚楽第の考証研究を行っている。名倉は当時存在した聚楽第関連の絵図を参照し、また現地に残っていた濠の痕跡の位置、聚楽第由来の町名を検討して「豊公築所聚楽城址形勝」と題する絵図にまとめた。同図は明治時代の模写が現存し、聚楽教育会に所蔵されている。

近代に入ってから、本格的な聚楽第跡の現地調査が実施されるようになる。嚆矢となったのは、京都府史蹟勝地調査委員会による調査である^(注4)。この調査では、『駒井日記』、『聚楽行幸記』などの記載内容を紹介し、さらに、聚楽第跡の地表の窪みや段差に注目し、濠や池の跡と推測している。昭和40年代になると、新たに存在が知られるようになった文献・絵画資料を駆使した研究が実施され、内藤昌^(注5)・大野耕嗣^(注6)・中村利則と櫻井成広が聚楽第の平面規模、形態の復原案を提示している。

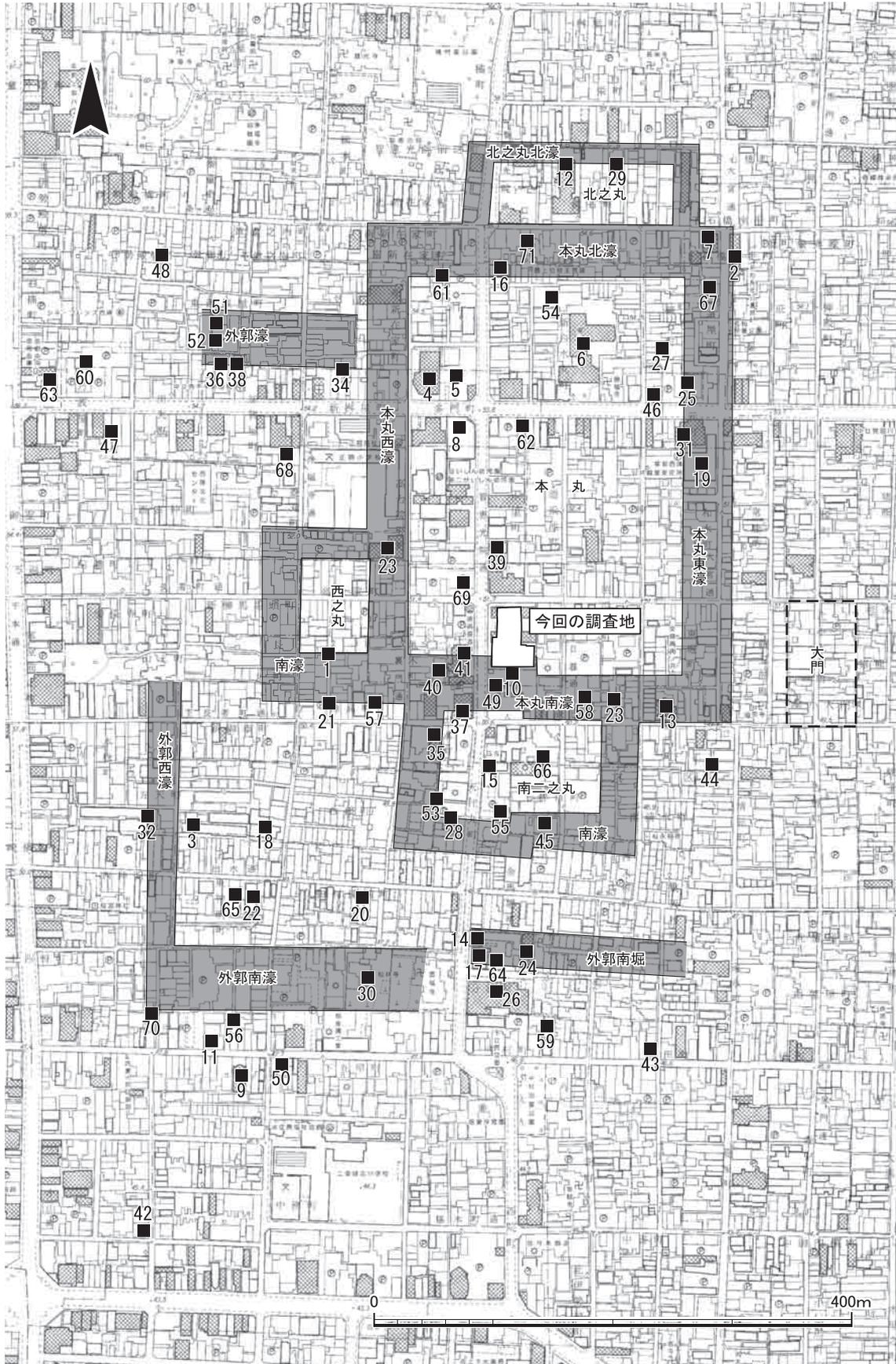
その後、聚楽第の最初の大規模な発掘調査となったのが、当センターによって1991年に実施された聚楽第東濠跡の発掘調査(第4図・付表1第31地点)である。以降、足利健亮^(注7)、百瀬正恒^(注8)、森島康雄^(注9)、梶川敏夫^(注10)、馬瀬智光^(注11)などが、発掘調査の成果を取り入れた復原案を提示している。平安宮跡とも重なる聚楽第跡の発掘調査は、年々確実にデータが蓄積されている。聚楽第跡では現在把握されている限りで、計73回の発掘調査が実施されている(第4図)。本報告では付表1のとおり、各地点に番号を付与した。今回の調査地点の周辺では、南隣の辰巳児童公園内の第10地点、第49地点で発掘調査が実施され、本丸南濠が検出されている。また、智恵光院通をはさんで西に近接する第37・41地点では、本丸南濠の南北肩が検出されており、幅43.5mであることが判明している。

以下、聚楽第跡周辺の室町時代から安土桃山時代にかけての遺跡を概観したい。

室町殿^(注12) 永徳元(1381)年、足利義満より造営された邸宅で、「花の御所」とも呼ばれる。方二町域の広がりを持ち、相国寺に隣接して位置する。6代將軍義教、8代將軍義政、12代將軍義晴の時に、その都度再建された。平成14年度の同志社大学寒梅館地点の調査では、16世紀中頃の石敷き、柱列が検出され、足利義晴が建設した室町殿(花の御所)に関する施設の一部と考えられている。

上京遺跡^(注13) 北は上御霊前通、西は智恵光院通、東はほぼ烏丸通、南は一条通りに囲まれた約1km四方に及ぶ遺跡である。室町時代後半には將軍家や公家の屋敷、寺院などが集まり、市街地「上京」が形成された。「上京」の周囲では、昭和61年度の調査で戦国時代の自然石を積んだ護岸施設をもつ濠跡がみついている。また、平成16年調査では室町幕府の管領細川氏の嫡家にあたる典厩家の邸宅に相当する区域の調査が行われ、柵列や溝とともに、布掘り基礎をもつ塀がみついている。

本國寺跡^(注14) 室町時代の都市集落である「上京」や「下京」にあった法華宗の寺院の一つである。天文5(1536)年7月22日から28日、比叡山延暦寺と法華宗との抗争に端を発した天文法華の乱の



第4図 周辺の聚楽第関連調査地(S=1/5,000 馬瀬智光2010を一部改変)

付表1 聚楽第跡発掘調査一覧

no.	調査地点	調査機関	所在地（上京区）	調査年度	面積（㎡）	備考	文献
1	西之丸南濠	府教委	下長者町通浄福寺東入坤町（坤高町の囀子）	昭和39	-	濠の両側の肩部を確認	1
2	本丸東濠	市文保課	一条通大宮下る下石橋南半町	昭和48	10	花崗岩製の礎石を確認	2
3	外郭西濠東側	平博館	土屋町通出水上る弁天町109、110	昭和49	145	-	3
4	本丸	平宮発団	智恵光院通中立売西入多門町	昭和50	168	金箔瓦が出土	4
5	本丸	市埋文研	智恵光院通中立売西入多門町	昭和52	160		5
6	本丸	市埋文研	中立売通松屋町西入新白水丸町462	昭和54	237		7
7	本丸東濠	市文保課	一条通大宮下る下石橋南半町	昭和54	-		6
8	本丸	花大日研	智恵光院通中立売西入多門町	昭和59	-		29
9	外郭南濠①南側	市埋文研	下立売通千本東入田中町468	昭和59	140		8
10	本丸南濠	市埋文研	智恵光院通下長者町上る西辰巳町（辰巳児童公園）	昭和61	12		11
11	外郭南濠①南側	市埋文研	下立売通千本東入田中町445	昭和62	40		9
12	北之丸北濠	市埋文研	一条智恵光院通東入鏡石町12・14・15	昭和62	-	北側に落ち込む濠の肩部を確認	10
13	本丸南濠	市埋文研	下長者通大宮西入東辰巳町129-2	昭和63	13		12
14	外郭南濠②	市埋文研	智恵光院通出水下る分銅町555-1、557	昭和63	5		12
15	南二之丸	市埋文研	智恵光院通出水下る天秤丸町180	平成元			13
16	本丸北濠	市埋文研	智恵光院通一条下る白水丸町462-17・18	平成2			14
17	外郭南濠②	市埋文七	智恵光院通出水下る分銅町557	平成3	18		15
18	外郭西濠東側	市埋文七	浄福寺通出水上る白銀町260-1	平成3	7		15
19	本丸東濠	府埋文七	大宮通下る和泉町、新元町	平成3	379	濠と大量の金箔瓦を検出	16
20	外郭南濠①北側	市埋文七	出水通智恵光院西入田村備前町231-2	平成3	6	濠状遺構を確認	17
21	西之丸南濠	市埋文七	下長者町通浄福寺東入坤高町79	平成4	15	濠の南肩部を確認	17
22	外郭南濠①北側	市埋文七	出水通土屋町東入東神明町272	平成5	5		18
23	本丸西濠	市埋文七	裏門通中立売下る高台院堅町210	平成5	-	濠状遺構を確認	18
24	外郭南濠②	市埋文七	智恵光院通出水下る分銅町565	平成6	26		19
25	本丸東濠	市埋文七	中立売通松屋町東入新元町216他	平成6	7		19
26	外郭南濠②南側	市埋文研	日暮通下立売上る分銅町556	平成7	1,060	金箔瓦が多量に出土	21
27	本丸	市埋文七	松屋町通一条下る下鏡石町211-3、211-4、211-8	平成7	8		20
28	南二之丸南濠	市埋文七	智恵光院通出水上る天秤丸町191	平成7	7		20
29	北之丸北濠	市埋文七	松屋町通一条下西入下鏡石町23他	平成9	94	濠と石垣基底部の石列を確認	22
30	外郭南濠①	市埋文七	智恵光院通出水下る分銅町575	平成9	17		22
31	本丸東濠	市埋文七	中立売通大宮西入新元町217	平成10	66	東濠の西側肩部を確認	23
32	外郭西濠	市埋文七	出水通千本東入西神明町335-1、弁天町311-1	平成11	28	濠状遺構の西側肩部を確認	24
33	本丸南濠	市埋文七	下長者町通智恵光院東入西辰巳町113、114	平成12	13		38

no.	調査地点	調査機関	所在地（上京区）	調査年度	面積（㎡）	備考	文献
34	外郭濠	市埋文七	中立売町通浄福寺東入西辰巳町 420	平成 12	13		38
35	南二之丸西濠	市埋文七	下長者町通智恵光院西入山本町 94、96	平成 12	26		38
36	外郭濠	市埋文七	中立売町通浄福寺西入加賀屋町 387 他 3 筆	平成 12	26		38
37	本丸南濠	市埋文七	下長者町通智恵光院西入山本町 100 他	平成 12	25	濠の南肩部を確認	26
38	外郭濠	市埋文七	中立売町通浄福寺西入加賀屋町 389-1、391、671	平成 13	16		26
39	本丸	市埋文七	上智恵光院通中立売下る山里町 238-2、238-3	平成 15	15		28
40	本丸南濠	市埋文七	裏門通上長者町下る亀木町 219、220-2	平成 15	19		28
41	本丸	市埋文七	智恵光院通上長者町下る下里山町 243	平成 9	20		22
42	外郭南濠①南側	市埋文七	小山町 908-32	平成 13	23		27
43	外郭南濠②南側	市埋文七	下立売通大宮西入浮田町 605	平成 16	9		30
44	本丸南濠南側	市埋文七	大宮通下長者町下る清元町 722-1	平成 16	10		30
45	南二之丸南濠	市埋文七	日暮通出水上の秤口町 158-14	平成 17	16		31
46	本丸	市埋文七	中立売通日暮東入新白水丸町 459、461 中立売通松屋町東入新元町	平成 17	25		31
47	外郭西側	市埋文七	中立売通千本東入二丁目田丸町 367-2	平成 17	12		31
48	外郭濠北側	市埋文七	浄福寺通一条下る東西俵屋町 655	平成 18	4		33
49	本丸南濠	市文保課	智恵光院通下長者町上る西辰巳町（辰巳児童公園）	平成 18	-		32
50	外郭南濠	市文保課	下立売通智恵光院西入下丸屋町 495	平成 18	8		33
51	外郭濠	市文保課	浄福寺通一条下る東西俵屋町 656、661	平成 18	9		33
52	外郭濠	市文保課	浄福寺通一条下る東西俵屋町 656、661	平成 18	8		33
53	南二之丸西濠	市文保課	智恵光院通出水下る天秤丸町 183	平成 19	75	濠の肩部を検出*報告では 52 次と表記	34
54	本丸	市文保課	中立売通日暮東入新白水丸町 462-82	平成 20	20		34
55	南二之丸	市文保課	智恵光院通出水下る天秤丸町 182-1 の一部	平成 20	15	*報告では 54 次と表記	34
56	外郭南濠	市文保課	下立売通り千本東入る田中町 465、463、461-1	平成 20	10		34
57	西之丸南濠	市文保課	下長者町通裏之門西入坤高町 82、85-2	平成 20	7	濠の肩部を検出*報告では 55 次と表記	34
58	本丸南濠	市文保課	下長者町通智恵光院東入西辰巳町 111	平成 21	9	濠の肩部を検出	35
59	外郭南濠②南側	市文保課	下立売通日暮西入中村町 543、546	平成 21	113		35
60	外郭西側	市文保課	中立売通千本東入丹波屋町 360 他	平成 21	91		35
61	本丸北濠	市文保課	中立売通日暮東入新白水丸町 462-7 の一部、462-51 の一部、462-13 の一部、裏門通一条下る今新在家町 265-5 の一部、206-7、206-18、206-33	平成 21	33	濠の肩部を検出	35
62	本丸	市文保課	中立売通裏門東入多門町 444-1	平成 21	16		35
63	外郭西側	市文保課	千本通中立売上る玉屋町 41	平成 21	14		35
64	外郭南濠②南側	市文保課	分銅町 560 他	平成 21	7	濠の北肩部を検出	35
65	外郭南濠①北側	市文保課	東神明町 278-1	平成 21	17		35
66	南二之丸	市文保課	下長者町通智恵光院東入辰巳町 108 の一部	平成 21	12		35

no.	調査地点	調査機関	所在地（上京区）	調査年度	面積（㎡）	備考	文献
67	本丸東濠	市文保課	中立売通大宮上る糸屋町 198、198-6	平成 21	16		35
68	本丸西濠西側	市文保課	浄福寺通中立売下る菱丸町 179	平成 21	39		35
69	本丸	市文保課	上長者町通裏門東入須浜町 570 の一部	平成 21	17		35
70	外郭南濠南側	市文保課	下立売通り千本東入る田中町 477-8	平成 21	6		36
71	本丸北濠	市文保課	一条通松屋町西入鏡石町 6	平成 22	10		36
72	本丸	市文保課	智恵光院通日暮東入新白水丸町 462-13 の一部、15 の一部	平成 23	14		37
73	南二之丸西側	市文保課	出水通智恵光院西入田村備前町 232、236	平成 23	14		37

以下略号表記

市文保課：京都市文化市民局文化財保護課、市埋文セ：京都市埋蔵文化財センター、市埋文研：財団法人京都市埋蔵文化財研究所、府埋文セ：公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、花大日研：花園大学日本史学研究会、平宮発団：平安宮跡発掘調査団、平博館：平安博物館、府教委：京都府教育委員会

付表 2 調査文献一覧

番号	文 献	発行年
1	「平安宮跡発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報 1965』 京都府教育委員会 昭和 40 年	1965
2	「聚楽第跡立会調査概報」『平安宮跡 1974（京都市埋蔵文化財年次報告 - I）』 京都市文化観光局 昭和 50 年	1975
3	「平安宮推定内裏蘭林坊跡発掘調査の概要」『古代文化』第 27 卷 11 号 昭和 50 年	1975
4	『聚楽第跡発掘調査報告』平安宮跡発掘調査団 昭和 52 年	1977
5	『平安宮主殿寮跡、聚楽第跡 - 長谷川株式会社，社屋新設に伴う発掘調査の概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 昭和 54 年	1979
6	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和 54 年度』 京都市文化観光局 昭和 55 年	1980
7	『平安宮茶園跡 - 乾商事新設予定地の発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 昭和 57 年	1982
8	「平安宮内裏」『平安宮跡発掘調査概報 昭和 60 年度』 京都市文化観光局 昭和 61 年	1986
9	「平安宮内裏 (2)」『平安宮跡発掘調査概報 昭和 62 年度』 京都市文化観光局 昭和 63 年	1988
10	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 62 年度』 京都市文化観光局 昭和 63 年	1988
11	「平安宮梨本」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 平成元年	1989
12	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』 京都市文化観光局 平成元年	1989
13	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 平成 2 年	1990
14	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 2 年度』 京都市文化観光局 平成 3 年	1991
15	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 3 年度』 京都市文化観光局 平成 4 年	1992
16	「平安宮跡（聚楽第跡）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 54 冊 平成 5 年（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	1993
17	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 4 年度』 京都市文化観光局 平成 5 年	1993
18	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 5 年度』 京都市文化観光局 平成 6 年	1994
19	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 6 年度』 京都市文化観光局 平成 7 年	1995
20	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 7 年度』 京都市文化観光局 平成 8 年	1996
21	「平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」『平成 7 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 平成 9 年	1997
22	「平安宮跡・聚楽第跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 9 年度』 京都市文化市民局 平成 10 年	1998
23	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 10 年度』 京都市文化市民局 平成 11 年	1999

番号	文 献	発行年
24	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 11 年度』京都市文化市民局 平成 12 年	2000
25	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 12 年度』京都市文化市民局 平成 13 年	2001
26	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 13 年度』京都市文化市民局 平成 14 年	2002
27	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 14 年度』京都市文化市民局 2003	2003
28	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局 平成 16 年	2004
29	「聚楽第跡の復元 - 考古学的考察」『古代文化 vol.57』財団法人古代学協会 2005	2005
30	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 16 年度』京都市文化市民局 2005	2005
31	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006	2006
32	『京都市内遺跡立会調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局 2007	2007
33	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局 2007	2007
34	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 20 年度』京都市文化市民局 2009	2009
35	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 21 年度』京都市文化市民局 2010	2010
36	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 22 年度』京都市文化市民局 2011	2011
37	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 23 年度』京都市文化市民局 2012	2012

時に、寺院が城塞化したものと考えられている。範囲はほぼ方二町域にわたり、平成6年の発掘調査では、南北34mにわたり堀が検出されている。なお、永禄12(1569)年の三好三人衆と明智光秀との六条合戦の舞台にもなったといわれている。

^(注15)
本能寺城跡 16世紀中頃、天文法華の乱により京都を追放されていた法華宗徒の追放が解除され、日蓮宗の寺院として建立された。その敷地はほぼ南北2町域にまたがる。永禄11(1568)年の信長の入洛以降、京の宿所となり、天正8(1580)年には普請が行われた。天正10(1582)年6月には、「本能寺の変」が起り、建物は焼失した。

平成19年度の発掘調査において、16世紀中頃の石垣を伴うL字型に曲がる溝が検出され、焼土や大量の瓦とともに本能寺の「能」の異体文字を瓦当文様にもつ軒丸瓦が出土した。これは、「本能寺の変」の実態を示す貴重な資料である。

^(注16)
相国寺旧境内 臨济宗相国寺派の大本山で、永徳2(1382)年、室町幕府の三代将軍足利義満により建立された寺院である。開山を夢想疎石とし、至徳3(1386)年7月には、天龍寺に次ぐ五山の第二位に列せられた。応仁の乱では細川勝元の陣所となり、山名方の攻撃を受けるに至り伽藍はほぼ灰燼に帰すなど、これまでたびたび焼失してきた。平成23～24年度の発掘調査では、天文法華の乱の際に防御のために掘削された多数の堀や境内を南北に走る室町時代の石敷き道路が検出され、旧境内の実態が明らかになりつつある。

^(注17)
旧二条城 永禄12(1569)年、織田信長により室町時代後期に形成された「上京」と「下京」という二つの都市集落の間に、将軍足利義昭の居城として建設された。昭和50年代の地下鉄丸線の工事に伴う調査において堀と石垣が検出されたことにより、3町四方域の大きさであったと考えられている。

なお、文献史料などからは、四周を堀と石垣で囲い、南と西に櫓が建てられ、さらに、二重の堀、三方の外郭、三重櫓など、平城型の城郭の発達した構造を読みとることができる。

平成5年の発掘調査では、旧二条城で石材として使用されていたと考えられる石仏が20数体出土した。元龜4(1573)年、義昭が追放されて以降は即時破脚され、その後、堀も埋められたと記録にある。

^(注18)
妙顕寺城 室町時代に法華宗の寺院として創建された妙顕寺は、天文5(1536)年の天文法華の乱により焼失するが、その後再建され、濠が巡らされたと考えられている。天正11(1583)年には、豊臣秀吉がこの寺院を移転させ、堀川沿いの跡地に城の造営を開始する。これが妙顕寺城である。文献資料から天正13(1585)年には、「堀」や「天主」の存在を窺うことができる。なお、天正15(1587)年には聚楽第が完成するため、わずかな期間の居所と考えられている。平成19年度の発掘調査では、堀川側に開く形状から「船入」の可能性のある濠状の遺構が検出された。

^(注19)
史跡御土居 豊臣秀吉が天正19(1591)年に京の町全体を囲むように築いた土塁で、延長約22.5kmに及ぶ。これにより洛中と洛外が隔てられ、要所には出入り口が設けられた。一部確認されたところでは、御土居の基底部及び濠の幅は20mにもなる。平成18年度にこの土塁に付随する濠の一部の調査が行われた。濠の埋土堆積の状況から、明治期に埋められる前の状況が明らかとなった。

^(注20)
史跡方広寺跡 豊臣秀吉により三十三間堂の北側に造営がすすめられた寺院である。その寺域の大部分は現在の京都国立博物館の敷地にあたる。天正16(1588)年に大仏殿の建立が着手されるが、文禄5(1596)年の慶長大地震により大仏が倒壊する。その後、造営が続けられるが、慶長19(1614)年の梵鐘銘文の問題により開眼供養は延期されたままとなる。方広寺の伽藍は、江戸時代の絵図などからその様子を窺うことができるが、これまでの発掘調査により、大仏殿基壇や台座の遺構、回廊・南門・石塁・石垣などが検出されている。

^(注21)
二条城(史跡旧二条離宮) 徳川家康が将軍上洛時の宿所などを目的として、慶長8(1603)年に建造した。その規模は現在の二条城の東側3分の2ほどで、石垣と濠が一重に巡らされた。その後、寛永3(1626)年9月6日から10日間かけて行われた後水尾天皇の行幸に向けて、大規模な改修が行われ、全体が西側へ拡張された。その時、本丸・二の丸が分けられ、伏見城の天守を二条城の天守に移築したとされる。平成21年度に行われた「桜の園」の発掘調査では、江戸時代前期の整地層、建物礎石などが検出され、御水尾天皇の二条城行幸にむけて造営された御殿の遺構であることが明らかとなった。また、平成13年度の調査では、不揃いな自然石を積み上げた創建期の石垣が確認された。

^(注22)
伏見城 「伏見城」と称される安土桃山～江戸時代の城郭として、「指月伏見城」と「木幡山伏見城」がある。文禄元(1592)年に秀吉の隠居屋敷として築き始められた城郭であったが、文禄2(1593)年の秀頼誕生後、秀吉が文禄3(1594)年に自らの本城として改築し、本格的な城郭となった。しかし、文禄5(1596)年7月13日の大地震で倒壊し、新たに木幡山伏見城が造営されることとなる。指月伏見城の実体は不明な点が多いが、北辺に想定される立売通の調査で濠の可能性が

高い落ち込みや石垣が検出され、指月伏見城の遺構と考えられている。

木幡山伏見城は文禄5(1596)年に再建された新たな「伏見城」で、秀吉が晩年を過ごした居城である。慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの前哨戦で西軍の猛攻を受けて落城し、完全に焼失している。関ヶ原の戦いの後に徳川家康が再建にとりかかり、その後は徳川政権の上方における拠点となった。三代家光まで、徳川将軍はこの「伏見城」で将軍宣下式を執行している。木幡山伏見城跡は現在「桃山陵墓地(桃山御料地)」の域内にあり一般の立ち入りは禁じられているが、城郭に伴う地形が良好に遺存していることが判明している。

秀吉の木幡山伏見城と聚楽第の関連を示す史料として、京都市歴史資料館蔵「豊臣氏奉行衆連署奉書」が挙げられる。石田三成ら豊臣氏五奉行が聚楽第の御殿を伏見に移すよう命令した文書である。また、『日本西教史』にも聚楽第(翻訳では「宮殿」と表記)が破却された際に、「関白(※秀次を指す。筆者注)所有の金銀及び家具の貴重なるものは宮殿の遺材と共に皆伏見に運搬せしめたり^(注23)」と記述されている。聚楽第からの移築と伝えられる建造物は西本願寺飛雲閣や大徳寺唐門など各所に現存するが、主要な建造物は伏見に移され、慶長5(1600)年の木幡山伏見城の落城に伴って焼失したようである。

(岸岡貴英・古川 匠)

2. 調査の方法・地形・層序

1) 調査の方法(第5図)

調査対象範囲は、京都府警察本部西陣待機宿舎敷地内の大部分を占める南北に長い「L」字形の範囲である。前述のように、調査は全範囲を5回に分割して実施した。発掘作業にあたっては、調査対象範囲を世界測地系(日本測地系2000)第VI系の座標値を基準に、4m単位の東西・南北列で区分し、そして両者の交差から一辺4mの正方形区割りを設定した。報文でもこの区割りを踏襲し、基本的には東西のアルファベットと南北の数字の組み合わせで地区名を表記することとする。例えば「C5地区」は、東西の「C列」(Y=-23,072~76m)と南北の「5列」(X=-108,332~36m)の交差する、4m四方の範囲を指す。

遺構、地形の平面情報については上記で統一するが、トレンチ壁土層の記録と上空からの写真撮影は上述のとおり5回に分けて記録・撮影しているため、各区毎に図、写真を掲載して報告する。トレンチの区分けについては、調査の着手順に設定した。なお、本稿で用いる「トレンチ」は、断りのない限り今回の調査対象全範囲を指すこととし、上記の分割した範囲を示す場合は、「トレンチ第1~5区」の番号で区別し、表記することとする。

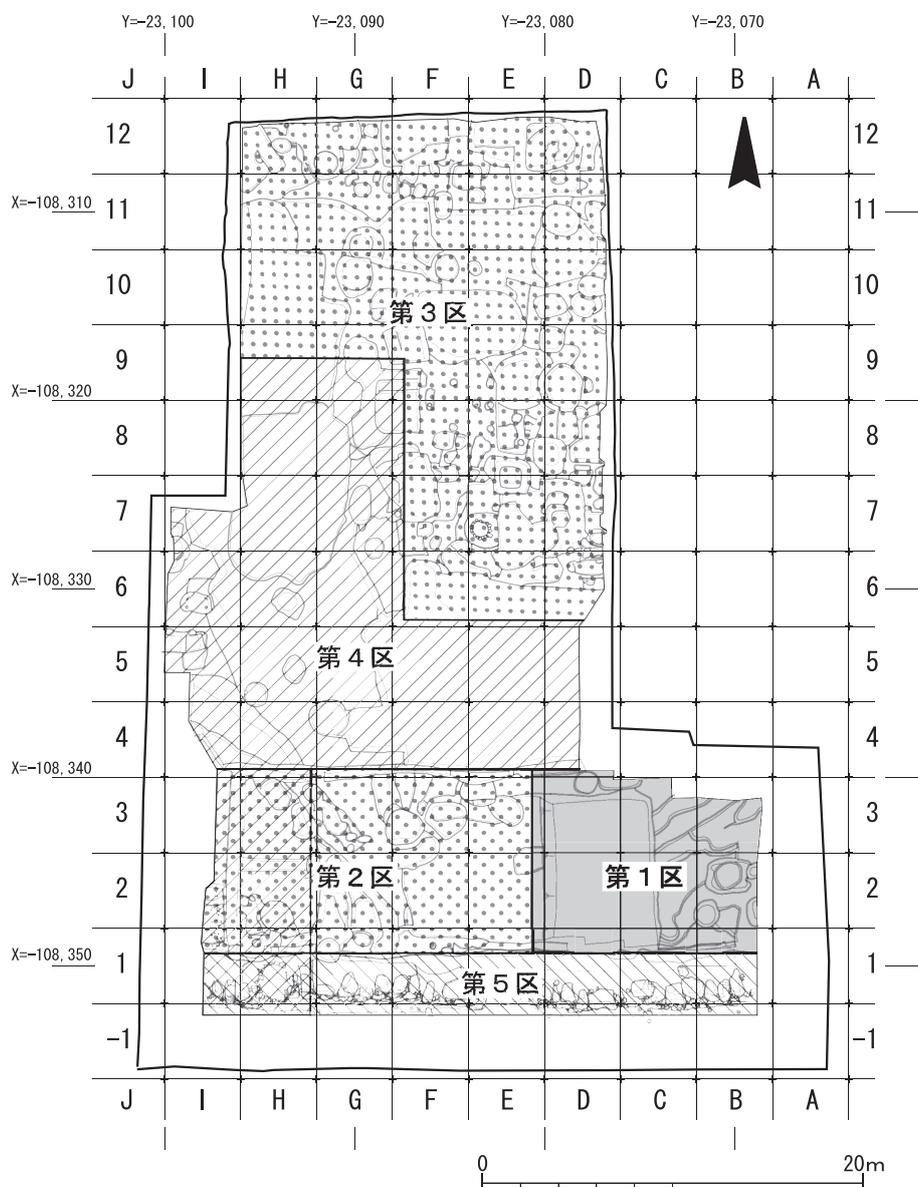
2) 調査地の地形と遺構分布(第6図)

調査対象範囲の現地表面は標高約51mで、敷地内ではほぼ一定であるが、遺構面の標高と堆積状況は地点によって大きな差がある。

調査地点北部では現地表面から約0.5m掘削した時点で、近世の整地層を検出した。整地層上面では少数のピットを検出した。整地層直下では自然堆積の砂礫層を検出し、この自然堆積層上

面で中世の土坑 S K 30・33 および近世の柱穴 S P 22、土坑 S K 25～29・38・40 を含む遺構群を確認した。この範囲以外は攪乱を被り、整地層・遺構の残存が良好なのは E 11～I 11 地区の幅 2.5m の帯状範囲に限られる。ちなみに、近世の整地層は調査地点の大部分を覆った大規模な造成層の一部である可能性が高いが、平面的に検出できたのはこの範囲のみである。なお、この周囲の攪乱はそれほど深くないことから、本来存在した遺構は浅く小規模だったと考えられ、10列以南の遺構群とは様相を異にする。

中央部北よりの 7～10 列では最も多くの遺構が分布し、全て自然堆積の砂礫またはシルト層上面で検出した。東西で様相が異なり、西側の G・H 7～10 地区は大部分が土坑 S K 76・77・96 といった近世の大規模な火災処理土坑・廃棄土坑で埋め尽くされている。東側の E・F 7～10 地区では土坑 S K 47・83、井戸 S E 84 等の近世の廃棄土坑、井戸が数多く分布し、町屋裏手の様相を



※第 1 区～第 5 区の各区の下端範囲を表記。

第 5 図 調査トレンチ地区割図 (S=1/400)

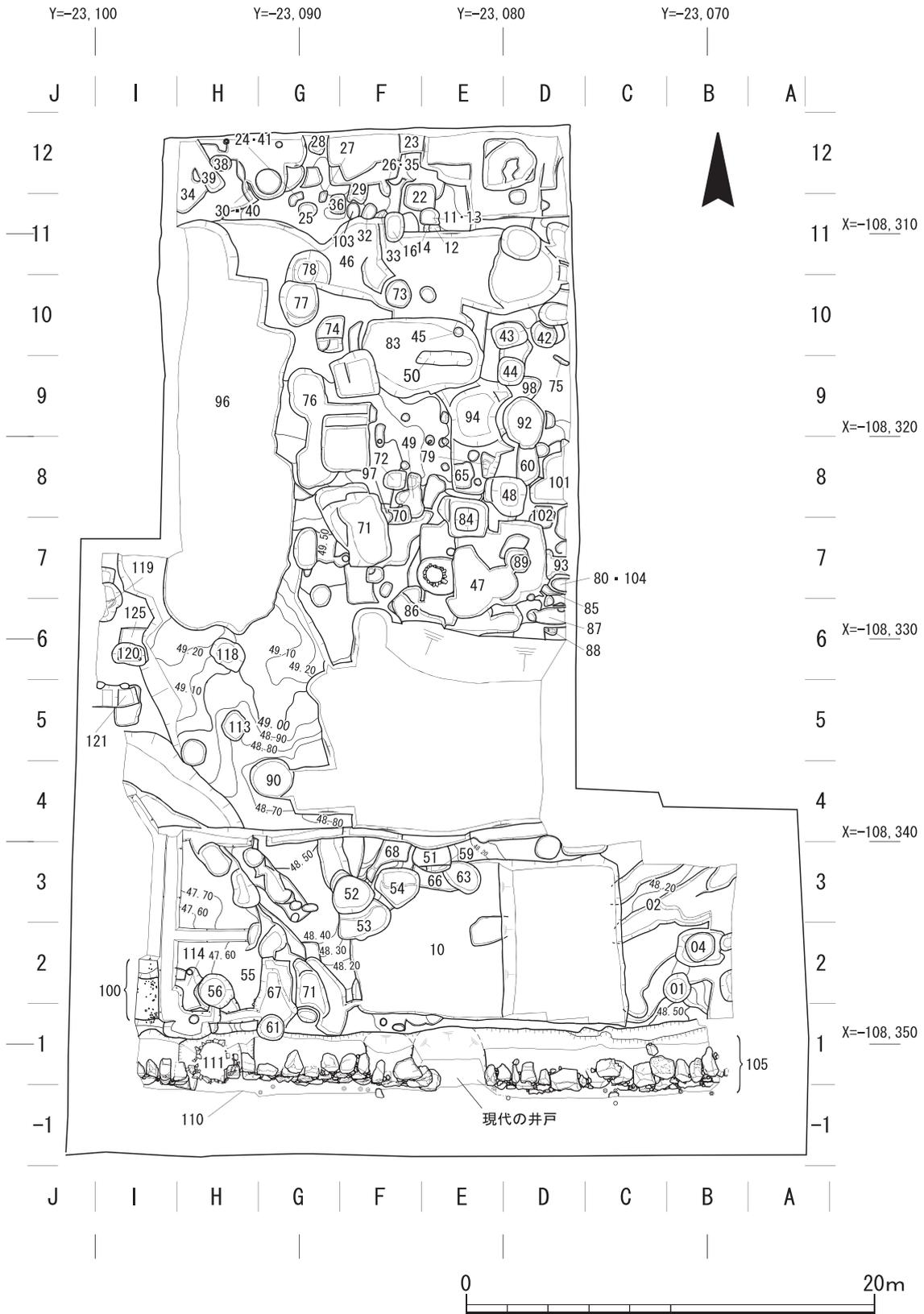
示す。東端のD7～11地区では比較的小規模な土坑が密に重複し、主な遺構では中世の土坑SK60、近世の土坑SK42・44・75・101等を検出した。

中央部南よりの4～6列では、東側のD・E・F4～6地区で地表面からの深さ5m近くの大規模な攪乱が存在し、遺構は確認できなかった。中央部西よりのG4～6、H5～6地区では、自然堆積のシルト層上面で中世の井戸SE90をはじめとする遺構を少数検出した。この範囲は遺構検出面の標高が約48.5～48.8mと以北の遺構検出面より1m以上低い。西側のI5～6地区では近世の土坑SK120等を検出した。この範囲では、遺構検出面の標高が約50mで北側の7～12列と変わらないが、南側では急激に標高が下がり、I5地区からI4地区にかけて、約2m以上の段差が生じる。

南側の2～3列では、遺構検出面の標高が47.5～48.5mとなり、4列以北と比較すると約1.5～2.5mの高低差がある。東西でも傾斜し、遺構検出面である自然堆積層上面の標高がトレンチ東端から西端にむかって徐々に下がり、最大1m以上の高低差がある。遺構を検出した自然堆積層上面は黄褐色の精良な粘土である。壁土や楽焼の陶土として珍重される「聚楽土」は、聚楽第跡で採掘されるこの種の粘土を指す。東側のA・B・C2～3地区では、聚楽第所用の金箔瓦が混入していた近世の井戸SE01を検出したが、この他に、土坑SK02・04等の、径1～2mの平面円形の浅い土坑群を多数検出した。これらの土坑群は、粘土層を掘り抜き、下位の堅固な砂礫層に到達した段階で掘削を終了することから、聚楽土採掘坑と考えられる。中央部のD2・3～F2・3地区にかけては、聚楽土採掘坑群より一段階古い、長方形の大型土坑SK10を検出した。G2・3地区を見ると、G2地区では土坑SK67・71といった聚楽土採掘坑群が点在するが、G3地区では、F3地区の土坑SK52・53等の聚楽土採掘坑群の西側に接して、北側の5列以北の標高の高い平坦面に向かい傾斜が上昇する鞍状の自然堆積層の地形を検出した。H2・3地区では聚楽土採掘坑に切られる人工的な造成層SX55を検出した。I2地区では盛土層SX100を検出し、SX100を破壊して掘られた土坑や井戸が重複して分布していた。

最南端の1・-1列では調査トレンチの東西を横断する中世末期の石垣SW105を検出した。H1・-1地区では、石垣SW105と重複する井戸SE111等の近世の遺構が複数分布し、E1・-1地区でも現代の井戸を検出した。調査地南端部は標高が最も低く、聚楽第本丸南濠の掘削を含め、自然湧水利用のための土地利用がなされたようである。

本調査地での遺構はほぼ全て自然堆積層上面で検出されたが、自然堆積層の層序は、おおまかに上層の砂礫層、中層のシルト・粘土層、下層の礫層から構成され、ほぼ水平に堆積している。上層の砂礫層は細～中粒砂を主体として大型の礫を多量に含む締りの弱い層であるが、下層の礫層は小型の礫を多量に含む堅固な層である。中層はシルト層と粘土層にさらに細分され、シルト層が上位に堆積し、下位になるに従って漸移的に粘土層に移行する。この粘土層が「聚楽土」と考えられるが、中層内でのシルト層と粘土層の堆積は地点によって質、層厚にかなりの変動がある。上層の層厚は約1～1.5m、中層の層厚は約1～1.5m、下層の層厚は3m以上である。トレンチ北部から中央部の6列以北の遺構は上層の上面で検出され、トレンチ中央部から南部の6列



第6図 トレンチ全体遺構分布・地形図(S=1/300)

以南の遺構は中層の上面で検出されている。

3) 層序

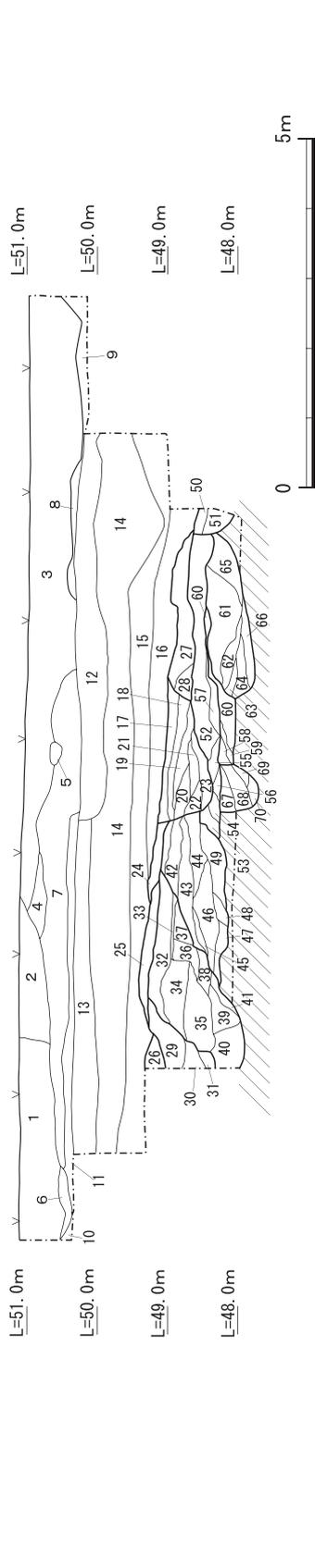
南東部のトレンチ第1区東壁(第7図)では、地表面の標高51～50mまでが広義の表土層で、その直下では北部E11～I11に分布する近世の整地層と似た質の礫層(第14層)を検出した。この層を最上層とする第17層までは、礫やブロック質土を含む黒・灰色土層で短期間に形成された近世の造成層と考えられる。標高50～49mまで1mの層厚を示す。第17層の下面から自然堆積層上面まではさらに1m下がるが、この間の堆積層は複数の土坑が密に切り合った状態を示し、上位の堆積層が基本的に安定した水平堆積であるのと対照的である。東壁付近のB・C2～3地区では聚楽土採掘坑群が密に分布することから、東壁にみられる土坑群の重複も聚楽土採掘坑を示すものであろう。そして、これらの層上面の標高が49m付近であることから、近世前半段階の地表面標高はこの付近と考えられる。

トレンチ第1区南壁(第8図)では現代の攪乱が著しいが、標高48.5～50mまで堆積する第7～14層が東壁の近世造成層に相当する堆積である。下位には東壁と同様に聚楽土採掘坑群を示す第15～23層が堆積する。第24・25層は土坑SK10の埋土である。南壁はSK10の南壁面にはほぼ重複するため、SK10の掘形側面が観察できるが、自然堆積層に約2m間隔で縦1.0～1.5m、奥行0.4～0.5mの垂直の切り込み状の痕跡が3か所刻まれている。詳細な性格は不明であるが、例えば土坑掘削に際しての作業単位を示すものと推測される。

南西部のトレンチ第2区南壁(第9図)では、標高49.5～48.0m付近まで近世の造成土が堆積している。この上面から掘削される第11～12層は位置関係から井戸SE111の埋土及び裏込土層と考えられる。標高48.0mの付近の面から聚楽土採掘坑が掘削され、第55・61～67層が相当する。

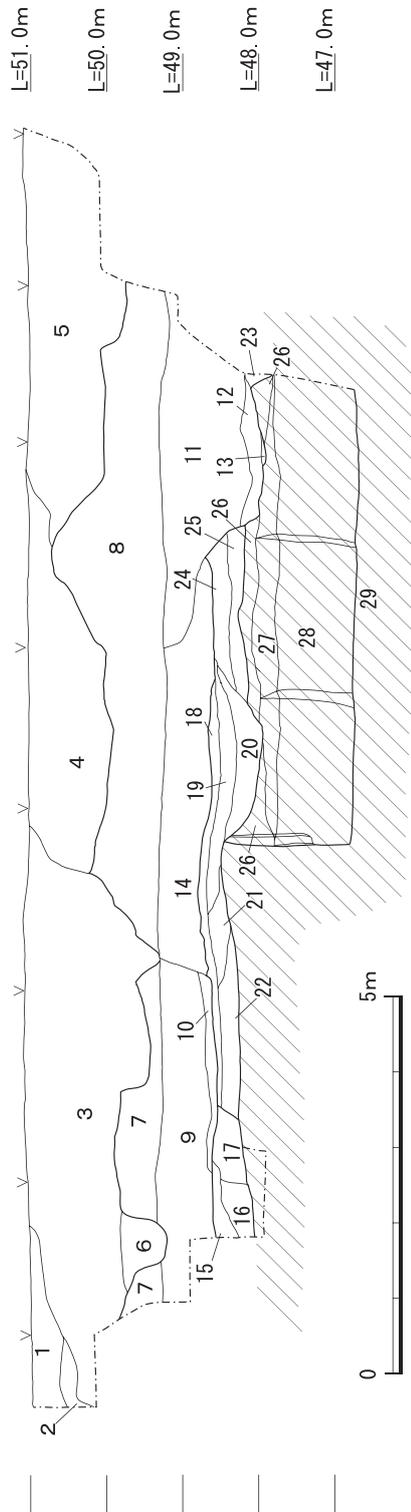
南西部ではトレンチ第2・4区の西壁(第10図)を同一壁として記録した。現代の堆積層第1層の形成によって削平されるが、近世の造成土(第11～36層)が厚く堆積し、特に南端の第11層から第29層までは砂質と粘質の層が細かい単位で互層状に斜めに堆積している。この地点は聚楽第本丸南濠に近く、聚楽第の破却後も凹地であったと推測されるため、特に造成にあたって工法に配慮したことを示す堆積である。第37～60層は、聚楽第破却後から上記の造成が開始されるまでの時期の堆積である。西壁の中央部から北にかけて堆積する第38～49層は、標高の高い北側から南側に向かって土砂が自然に流れ、緩やかな斜面が形成されたことを示している。西壁中央から南にかけての堆積層の色調はやや青味を帯びるが、特に南端部の第54～58層は顕著にグライ化しており、標高が最も低い調査トレンチ南西隅に水が溜り湿地化していたことを示す堆積である。上述の近世造成土の堆積状況とも呼応する環境であろう。第61～63層は聚楽第所用の金箔瓦を含む聚楽第本丸南濠SX110の埋土で、第64・65層はそれぞれ盛土SX100、造成層SX55である。各遺構については後述する。

トレンチ第2区北壁(第11図)では、表土直下の第6～16層が近世の造成土と考えられ、標高49～51m付近まで厚く堆積している。そして、第17～25層は聚楽土採掘坑か井戸と考えられる遺構の埋土である。この地点の土層で特徴的なのが第26～43層で、大量の礫が混じる砂層が複数の単



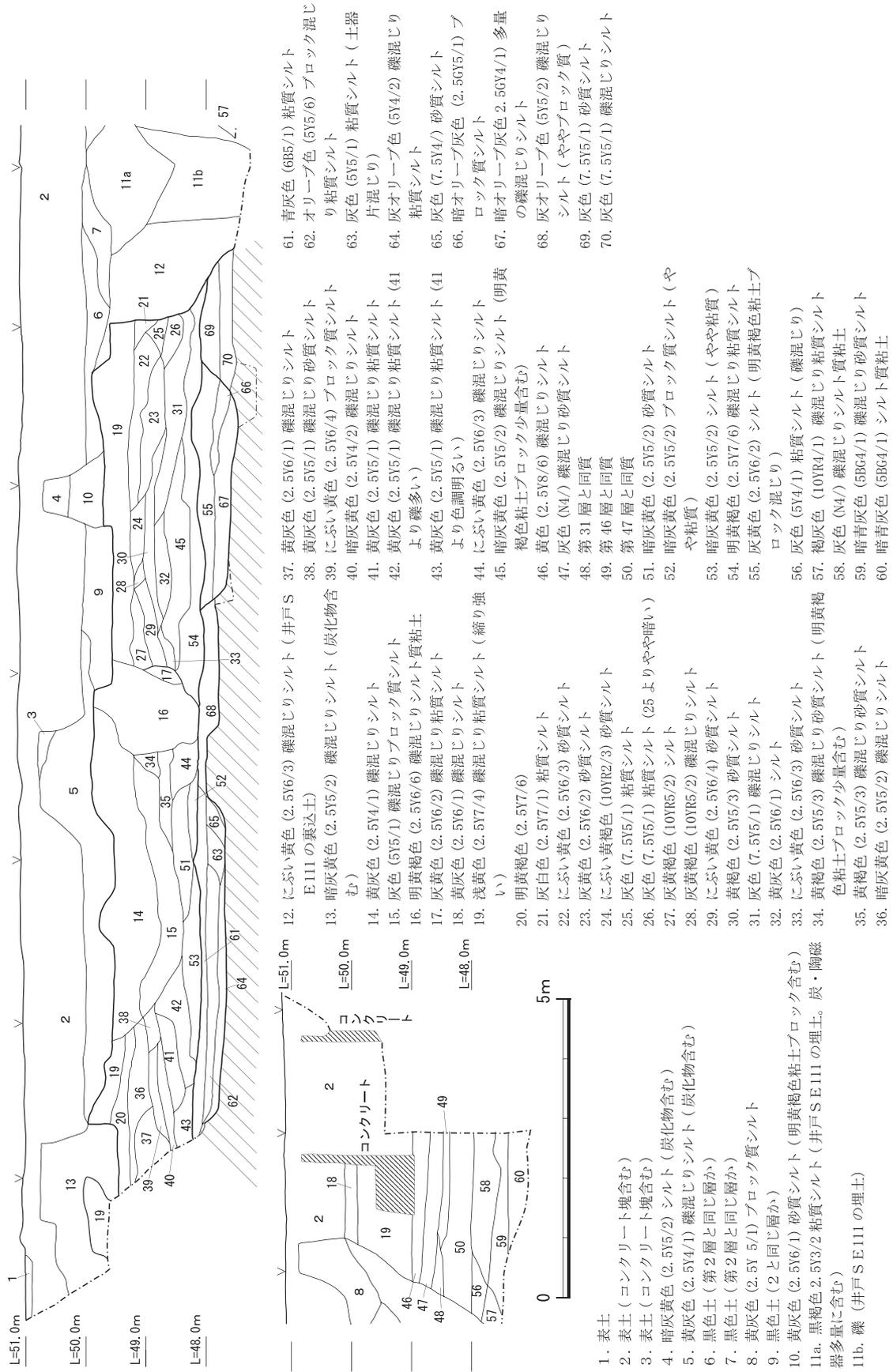
- | | | |
|---|---|---|
| <p>1. 黄色 (7.5Y2/1) 礫混じりシルト (1より礫が多い)</p> <p>2. 黒色 (7.5Y2/1) 礫混じりシルト (現代の瓦礫多量に含む)</p> <p>3. 黒色 (7.5Y2/1) 礫混じりシルト (現代の瓦礫多量に含む)</p> <p>4. 黄色 (5Y7/6) 砂質シルト</p> <p>5. 黄色 (5Y7/6) 砂質シルト</p> <p>6. バラス</p> <p>7. 灰化物・礫土層</p> <p>8. 黒色 (7.5Y2/1) シルト (黄色砂質シルト含む)</p> <p>9. 黒色 (7.5Y2/1) シルト</p> <p>10. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト層 (現代の瓦礫多量に含む)</p> <p>11. 灰色 (5Y4/1) シルト層 (灰化物含む)</p> <p>12. 黒色 (7.5Y2/1) シルト (現代のがれき多量に含む)</p> <p>13. 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト (礫・灰化物含む)</p> <p>14. オリーブ色 (5Y5/4) 礫層 (北部の第一遺構面検出層と似た土質である)</p> <p>15. 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト (礫を少量に含む)</p> <p>16. 青灰色 (5B5/1) 粘土</p> <p>17. 灰色 (5Y5/1) 砂質シルト (5~10mm大の礫含む)</p> <p>18. 灰色 (5Y5/1) 砂質シルト (黄色粘土ブロック)</p> <p>19. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質シルト</p> <p>20. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト</p> <p>21. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) ブロック質粘土</p> <p>22. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質シルト</p> <p>23. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト</p> | <p>24. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト</p> <p>25. 灰色 (5Y5/1) 砂質シルト</p> <p>26. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト (5~20mm大の礫含む)</p> <p>27. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト</p> <p>28. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト</p> <p>29. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト</p> <p>30. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト</p> <p>31. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土ブロック多量に含む</p> <p>32. 灰色 (5Y5/1) 砂質シルト (黄色ブロック多量に含む)</p> <p>33. 灰色 (5Y5/1) シルト</p> <p>34. 褐灰色 (10YR5/1) 砂質シルト</p> <p>35. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト (5~30mm大の礫含む)</p> <p>36. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細砂</p> <p>37. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細砂 (36より絞り強い)</p> <p>38. 灰色 (N5/) 粘質シルト (10~30mm大の礫含む)</p> <p>39. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂</p> <p>40. 明黄褐色 (2.5Y6/6) ブロック質粘土</p> <p>41. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト (5~10mm大の礫少量含む)</p> <p>42. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト (灰化物少量含む)</p> <p>43. 灰色 (5Y5/1) シルト (5~10mm大の礫少量含む)</p> <p>44. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質シルト (5~10mm大の礫多量含む)</p> <p>45. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂</p> <p>46. 灰色 (5Y5/1) 砂質シルト (5~7mm大の礫・黄色粘土含む)</p> <p>47. 明黄褐色 (2.5YR6/6) 粘土</p> | <p>48. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂</p> <p>49. 灰色 (5Y5/1) 砂質シルト (5~20mm大の礫含む)</p> <p>50. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト (5~20mm大の礫を多く含む)</p> <p>51. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト (5~20mm大の礫を多く含む)</p> <p>52. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト (少量 ")</p> <p>53. にぶい黄色 (2.5Y5/1) 粘質シルト</p> <p>54. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト</p> <p>55. オリーブ黄色 (5Y6/4) 極細砂</p> <p>56. オリーブ黄色 (5Y6/4) シルト混じり極細砂</p> <p>57. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質シルト (明黄褐色粘土ブロック含む)</p> <p>58. 灰色 (N5/) シルト (5~15mm大の礫含む)</p> <p>59. にぶい黄色 (7.5Y6/3) 粘質シルト</p> <p>60. 灰色 (N5/) 粘質シルト (5~10mm大の礫少量含む)</p> <p>61. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト質粘土 (5~10mm大の礫少量含む)</p> <p>62. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土</p> <p>63. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質シルト</p> <p>64. 灰色 (5Y5/1) 粘質シルト (5~10mm大の礫をやや少量含む)</p> <p>65. 黄灰色 (2.5Y5/1) ブロック質粘土</p> <p>66. オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘質シルト</p> <p>67. にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト質極細砂</p> <p>68. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質粘土</p> <p>69. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質シルト</p> <p>70. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘土</p> |
|---|---|---|

第7図 第1区 東羅土層図(S=1/100)

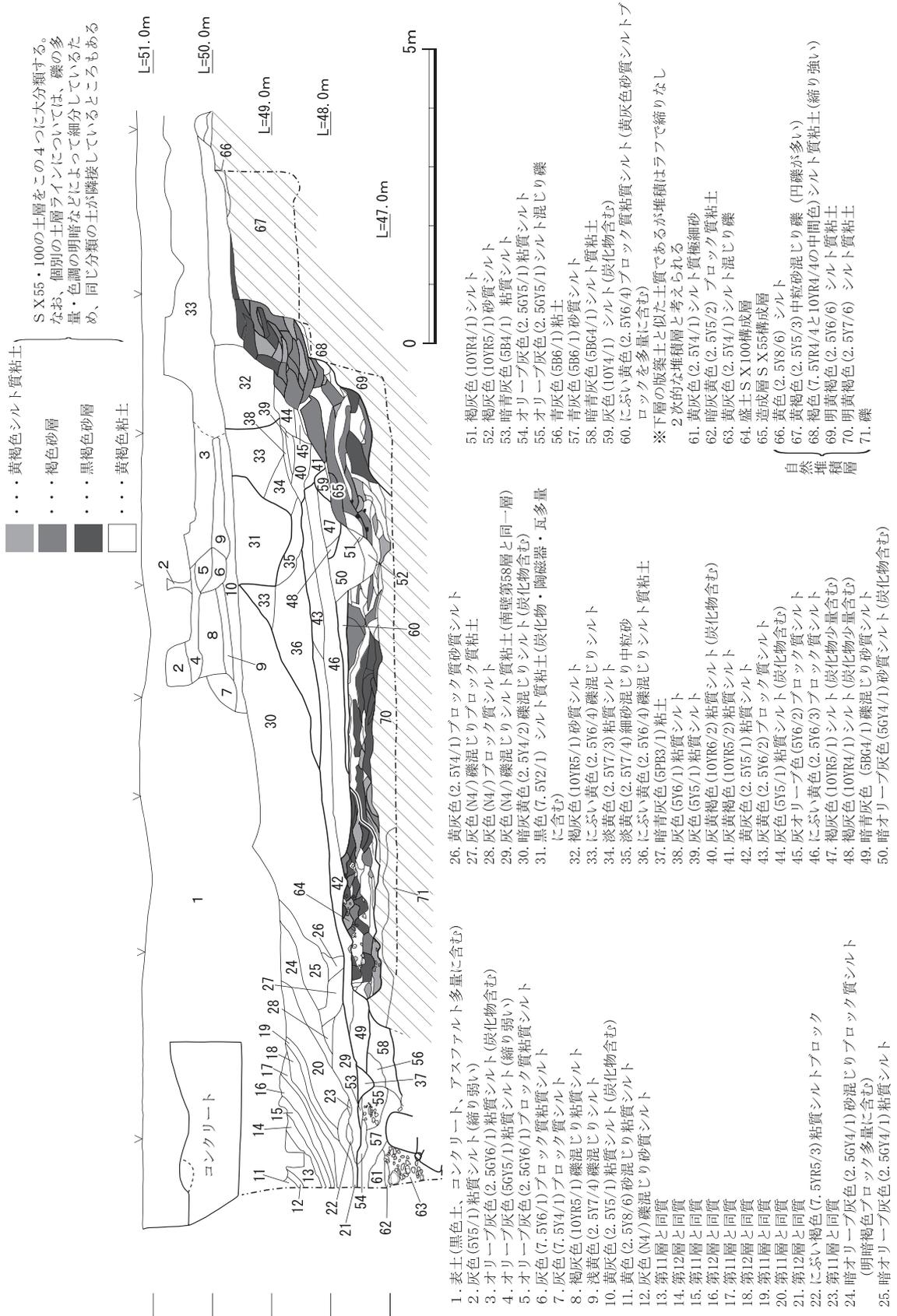


- | | | |
|--|--|--|
| <p>1. 黒色 (7.5Y2/1) 礫混じりシルト (現代の瓦礫多量に含む)</p> <p>2. 黒色 (7.5Y2/1) シルト</p> <p>3. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト (炭化物、礫、灰、陶磁器含む)</p> <p>4. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト混じり細粒砂</p> <p>5. 灰色 (N/4) シルト質粘土</p> <p>6. 暗黄灰色 (2.5Y5/2) シルト (炭化物、陶磁器含む)</p> <p>7. オリーブ色 (5Y5/4) 礫</p> <p>8. オリーブ色 (5Y5/4) 礫</p> <p>9. 灰色 (5Y5/1) ブロック質粘土 (径30～60mmの礫多く含む)</p> | <p>10. オリーブ灰色 (2.5Y6/2) シルト質粘土</p> <p>11. 灰黄色 (2.5Y6/2) ブロック質シルト (径10～60mmの礫を多量に含む)</p> <p>12. 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト (礫混じり)</p> <p>13. にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土</p> <p>14. 浅黄色 (5Y7/5) シルト質粘土 (灰色ブロック少量含む)</p> <p>15. 橙黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト (径5～20mmの礫を多く含む)</p> <p>16. 橙黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト (径5～20mmの礫を多く含む)</p> <p>17. 灰色 (5Y5/2) シルト</p> <p>18. 暗黄灰色 (2.5Y5/2) 粘質シルト</p> | <p>19. 灰白色 (5GY8/1) シルト質粘土</p> <p>20. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト質中粒砂</p> <p>21. 黄灰色 (2.5GY5/1) シルト混じり極細粒砂</p> <p>22. 灰色 (5Y5/1) シルト混じり中粒砂</p> <p>23. 黄褐色 (2.5Y5/3) 礫混じりシルト</p> <p>24. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト (SK10埋土)</p> <p>25. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト (礫混じり、SK10埋土)</p> <p>26. 浅黄色 (2.5Y7/4) シルト質粘土 (自然堆積層)</p> <p>27. 暗黄灰色 (2.5Y5/2) 礫 (自然堆積層)</p> <p>28. 暗黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土 (自然堆積層)</p> <p>29. 暗緑灰色 (5GY7/1) 礫混じり極細砂 (自然堆積層)</p> |
|--|--|--|

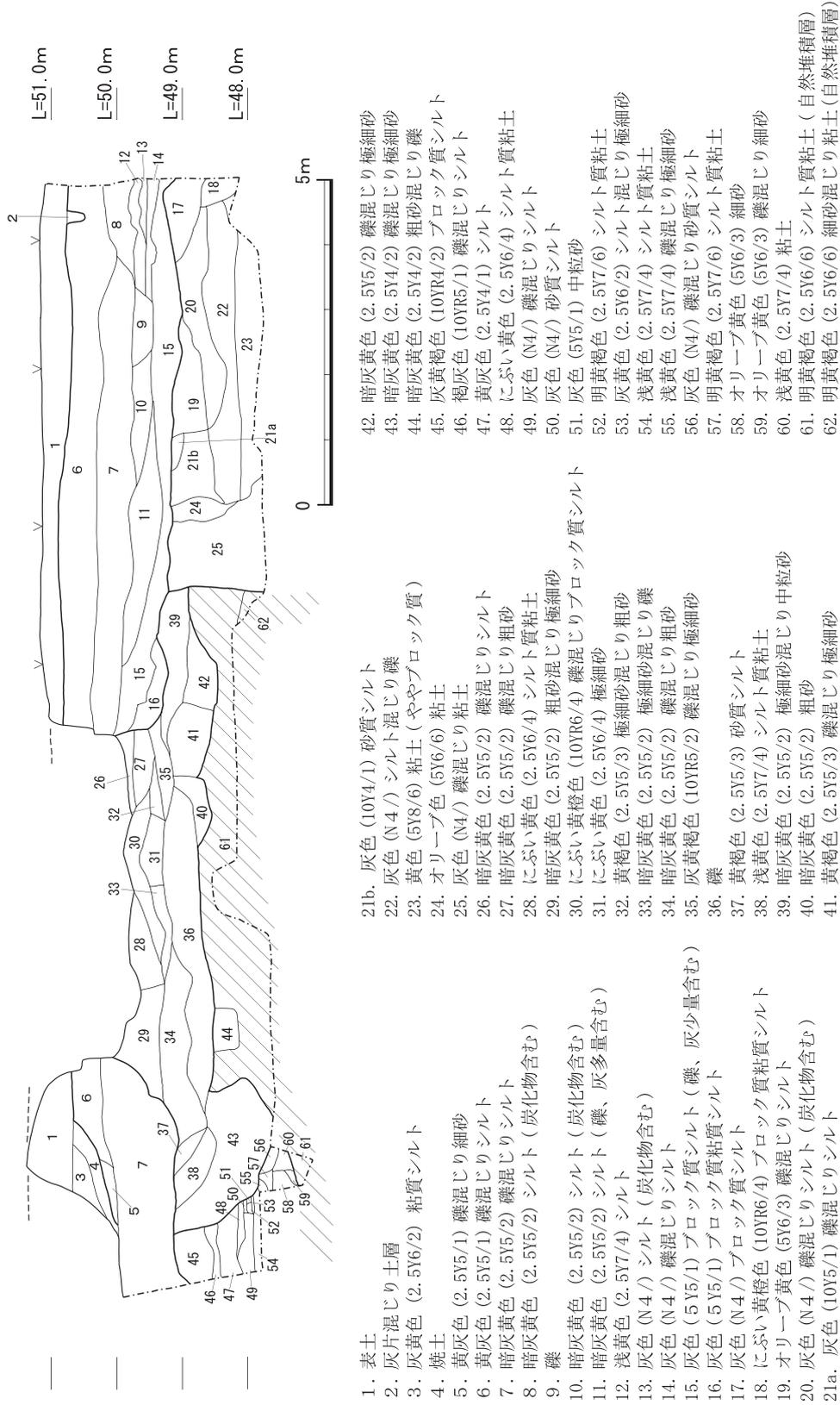
第8図 第1区 南壁土層図(S=1/100)



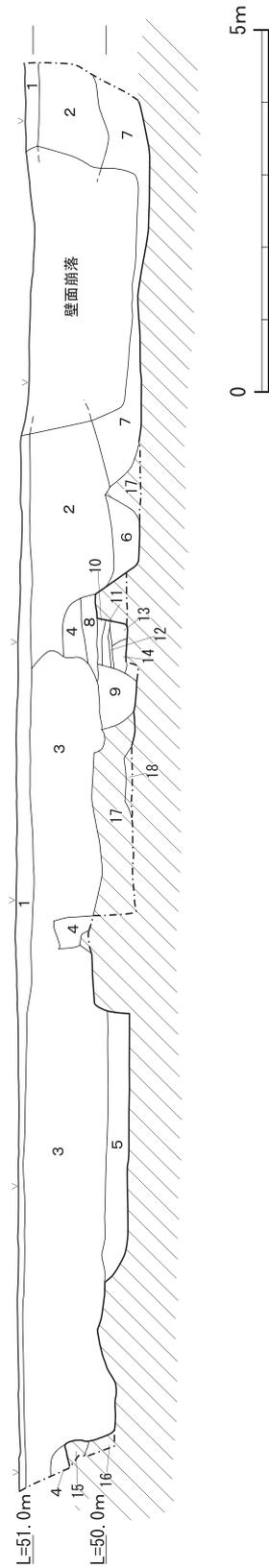
第9図 第2区 南壁土層図(S=1/100)



第10図 第2・4区 西壁土層図(S=1/100)

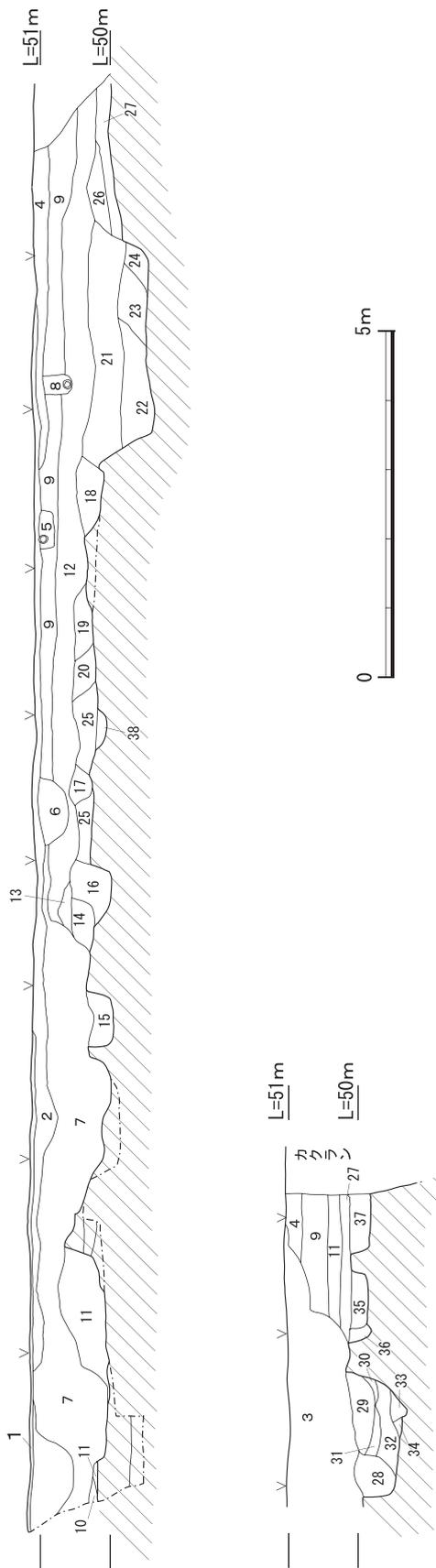


第11図 第2区 北隣土層図 (S=1/100)



- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. パラス 2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質シルト (コンクリート塊・炭化物多量含む) 3. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 礫混じりシルト (コンクリート塊含む・カクラン) 4. 褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト 5. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 礫混じり砂質シルト (炭化物少量含む) 6. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト (炭化物多量に含む) 7. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 砂質シルト (炭化物・礫含む) 8. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 礫混じりシルト 9. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) ブロック質礫 | <ol style="list-style-type: none"> 10. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) ブロック質シルト 11. 灰色 (5Y 5/1) シルト 12. 灰色 (5Y 5/1) ブロック質シルト 13. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) ブロック質礫混じりシルト 14. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) ブロック質シルト 15. 明黄褐色 (2.5Y 6/6) 砂質シルト 16. にぶい黄色 (2.5Y 6/4) 中粒砂混じり礫 17. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 極細砂まじり礫 (自然堆積層) 18. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 礫まじり極細砂 (自然堆積層) |
|---|--|

第12図 第3区 北壁土層図(S=1/100)



- | | | |
|--|---|---|
| <p>1. パラス</p> <p>2. 灰白色 (2.5Y7/1) 礫混じり砂質シルト (固く締まる)</p> <p>3. オリーブ黒色 (5Y3/1) 礫混じり粘質シルト (コンクリート塊多量を含む)</p> <p>4. 暗灰色 (N3/) 粘質シルト (瓦片含む)</p> <p>5. パラス</p> <p>6. 灰色 (7.5Y4/1) 礫混じりシルト</p> <p>7. 黄灰色 (2.5Y4/1) 礫混じりシルト (コンクリート片含む)</p> <p>8. 灰色 (5Y5/1) 礫混じり砂質シルト</p> <p>9. 灰色 (5Y5/1) ブロック質シルト (瓦片少量含む)</p> <p>10. 暗黄灰色 (2.5Y5/2) 砂質シルト (瓦片含む)</p> <p>11. 焼土、瓦、炭化物</p> <p>12. 灰色 (5Y4/1) 礫混じりシルト (焼土を少量に含む)</p> <p>13. 灰色 (5Y4/1) シルト (焼土を多量に含む)</p> <p>14. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質シルト (礫で充填されている)</p> <p>15. 褐灰色 (10YR4/1) 礫混じり粘質シルト</p> <p>16. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質シルト (瓦、焼土塊多量を含む)</p> | <p>17. 灰色 (5Y4/1) 粘質シルト (瓦片含む)</p> <p>18. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト (炭化物少量含む)</p> <p>19. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト</p> <p>20. 灰オリーブ色 (5Y5/2) (5Y4/2) シルト</p> <p>21. 黄灰色 (2.5Y6/2) 礫混じりブロック質粘質シルト (SK101の埋土)</p> <p>22. 黄灰色 (2.5Y6/2) ブロック質粘質シルト (炭化物混じり・SK101の埋土)</p> <p>23. 黄灰色 (2.5Y5/1) ブロック質粘質シルト (炭化物混じり・SK101の埋土)</p> <p>24. 黄灰色 (2.5Y7/2) ブロック質粘土 (SK101の埋土)</p> <p>25. 黄灰色 (2.5Y5/1) ブロック質粘質シルト</p> | <p>26. 黄灰色 (2.5Y5/1) 礫混じり粘質シルト (灰褐色土)</p> <p>27. 浅黄色 (2.5Y7/4) 礫混じり粘質シルト (灰褐色土混じり)</p> <p>28. 黄灰色 (2.5Y4/1) 礫混じり砂質シルト</p> <p>29. 暗灰色 (N3/) 粘質シルト (SK80 上層埋土)</p> <p>30. 灰色 (N4/) 粘質シルト (SK80 下層埋土)</p> <p>31. 暗黄色 (5Y7/4) ブロック質シルト (SK104 埋土)</p> <p>32. 灰色 (5Y5/1) シルト (SK85 埋土)</p> <p>33. 灰色 (N4/) 砂質シルト (SK85 埋土)</p> <p>34. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質シルト (SK85 埋土)</p> <p>35. SK87 の埋土</p> <p>36. SK87 の埋土</p> <p>37. SK88 の埋土</p> <p>38. SK75 の埋土</p> |
|--|---|---|

第13図 第3区 東壁土層図(S=1/100)

位で堆積し、幅6.5m、高さ1.0mにわたり、不自然に台状に盛り上がる。人為的に形成された堆積層のようである。直下の第45～47・49層はトレンチ第2・4区西壁(第10図)の第43・46・50・51層と同一層で、第48層を含め、聚楽第破却後に北側から自然に流れこんだ堆積層と見られる。したがって、第26～43層は聚楽第破却後に一定期間たってから形成されたことが分かる。聚楽土採掘坑群と同時期の可能性がある。また、この範囲のみ自然堆積層の標高が高く、聚楽土が比較的厚く堆積していた。この自然堆積層の高まりは南に向かって舌状に伸びる(第6図G2・3地区)が、その上面に大量の礫が堆積し、南へ向かって緩やかに下降する傾斜面を形成していた。トレンチ南部の1～1列の範囲が上述のように聚楽土採掘、井戸掘削で土地利用されていることを鑑みると、第26～43層は標高の高い北側から降りるため近世段階に形成された鞍状の通路の一部と推定される。

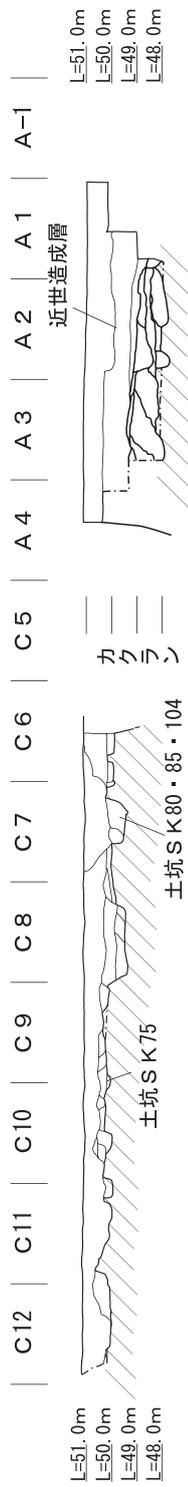
トレンチ第2・4区西壁から北は攪乱が著しいため省略し、トレンチ第3区北壁(第12図)に移る。トレンチ第3区では現代の多層建築物に伴う攪乱が著しく、近世の造成土は土層壁からは確認されなかった。自然堆積層上面の標高は、最も残りの良い地点で50.5mであるが、標高50mより深く掘削された地点では遺構が遺存していない。旧地表面の標高を復原する手がかりとなり得る。

トレンチ第3区東壁は第1～11層までが近現代の堆積である。また、第12・13層が近世の造成土の可能性のある堆積である。第12・13層直下では中世～近世の遺構埋土が堆積している。自然堆積層である砂礫層上面を検出した標高は最も高い地点で標高50.7mであるが、総じて標高50.0mあたりで検出されている。トレンチ第3区南端では遺構面が大規模な攪乱で削平されている。

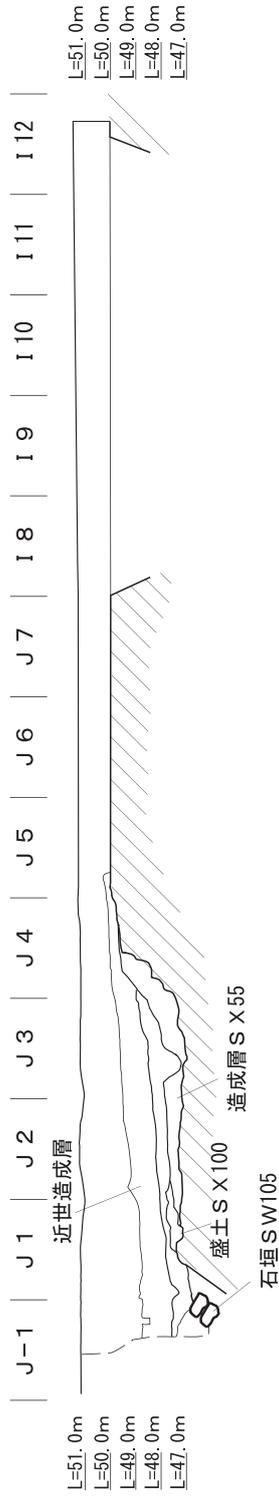
以上の検討からトレンチ全体の堆積状況を模式的に示したのが第14図である。東壁を北端から見ると、C12～6地区までは標高50mの自然堆積層上面で安定的に遺構が検出されるが、攪乱をはさんだA3～1地区では自然堆積層上面の標高は48mに下がっている。標高49mの旧地表面から集中的に掘り込まれる聚楽土採掘坑による地形改変の結果であろうが、本来的に旧地形の標高が低かった可能性がある。この高低差は、聚楽土掘削の影響を受けていないはずの西壁でより顕著である。自然堆積層の落差は2.5m、造成層S X55の上面からでも高低差が2.0m存在し、本調査トレンチの大きな地形的特徴を示している。自然堆積層が安定して水平堆積することから自然地形とは考えがたく、平安宮や聚楽第造営との関連性が注目される。西壁はI8～I12地区にかけて大きな攪乱を被っているが、この間に所在するトレンチ内遺構面の標高から、東壁と同様に標高50m付近が自然堆積層上面と推定される。トレンチ第1～4区では中近世の遺構上面に分厚い造成層の堆積を確認した。この層の性格は、上面の標高が上述の自然堆積層とほぼ同じであることから、上述の旧地形の高低差を解消し整地するのが目的であったと考えられる。南壁ではH・I2地区でこの層を掘り込んで形成される近世の井戸S E111を確認しており、同じ近世でも造成前と後で遺構の性格の差が看取される。なお、トレンチ第5区の南壁は敷地境界に近く、安全確保のため土層の記録は行わなかった。

(古川 匠)

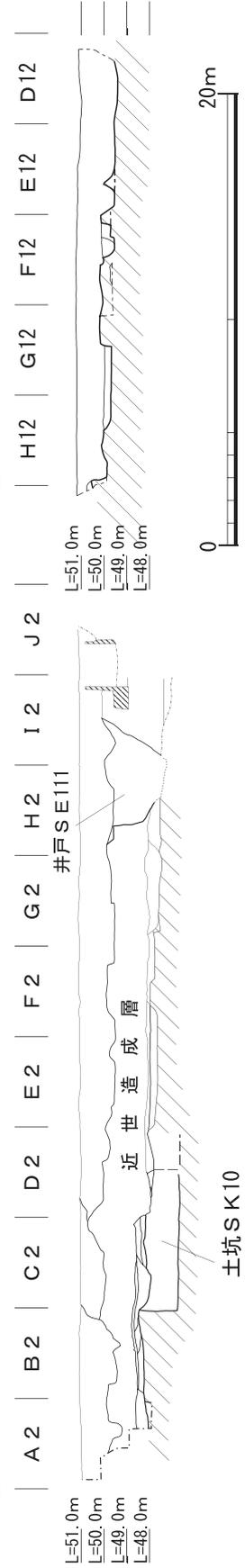
〔東壁土層模式図〕



〔西壁土層模式図〕



〔南壁土層模式図〕



第14図 土層堆積状況模式図(S=1/300)

3. 検出遺構

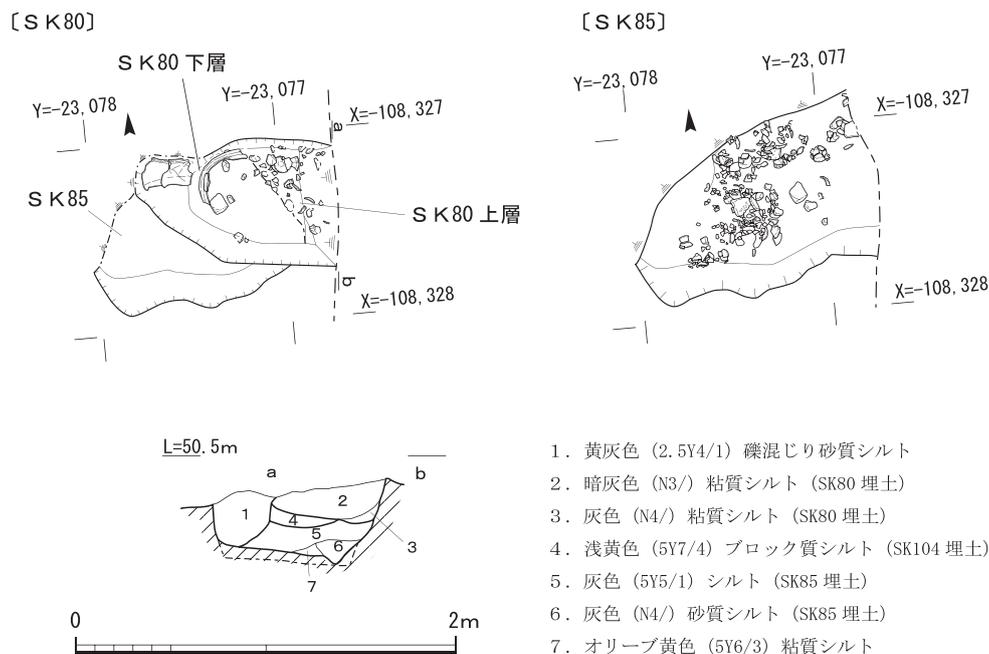
1) 鎌倉～室町時代

土坑 S K 85 (第15図) トレンチ東端部の D 8 地区で検出した土坑である。この地点では S K 80・85・104の土坑が検出され、S K 85は最も古い時期の土坑である。土坑は調査トレンチ内で完結せず、トレンチ以東に延びる。北半分が江戸時代の土坑に切られ、トレンチ内の残存規模は南北1.0m、東西1.3m、遺構面からの深さ0.45mである。ただし重複する土坑 S K 80・104に埋土上層が切られるため埋土残存高は0.2mで、削平のため平面形態は不明である。以上のように遺構の残存状況は悪いが遺物の出土量は多く、主に土師器皿15個体以上、他には瓦器椀、白磁椀、青磁椀、陶器甕、瓦が出土している。埋土には、全長5～15cmの礫も少量含まれていた。S K 85の性格は、遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

なお、S K 85より新しい S K 104は、さらに新しい土坑 S K 80の形成によって大部分が削平され、平面形態・規模は不明である。少量の細片しか遺物が出土していないが、土師器皿の特徴から15世紀代に比定される。

土坑 S K 33 (第6図) トレンチ北部の F 11 地区で検出した。江戸時代の土坑 S K 32と重複し、南部は攪乱によって大規模に削平されている。残存規模は東西0.5m、南北0.4m、遺構面からの深さ0.1mである。平面形態は円形の可能性がある。土師器皿、東播系須恵器鉢がごく少量出土した。土坑 S K 85よりやや古く13世紀後半と考えられる。

今回の調査では平安宮梨本院の時期の遺物が少量出土しているが、平安時代の遺構は検出されていない。したがって、13世紀後半～14世紀代に比定される土坑 S K 33・85が最も古い時期の遺構である。



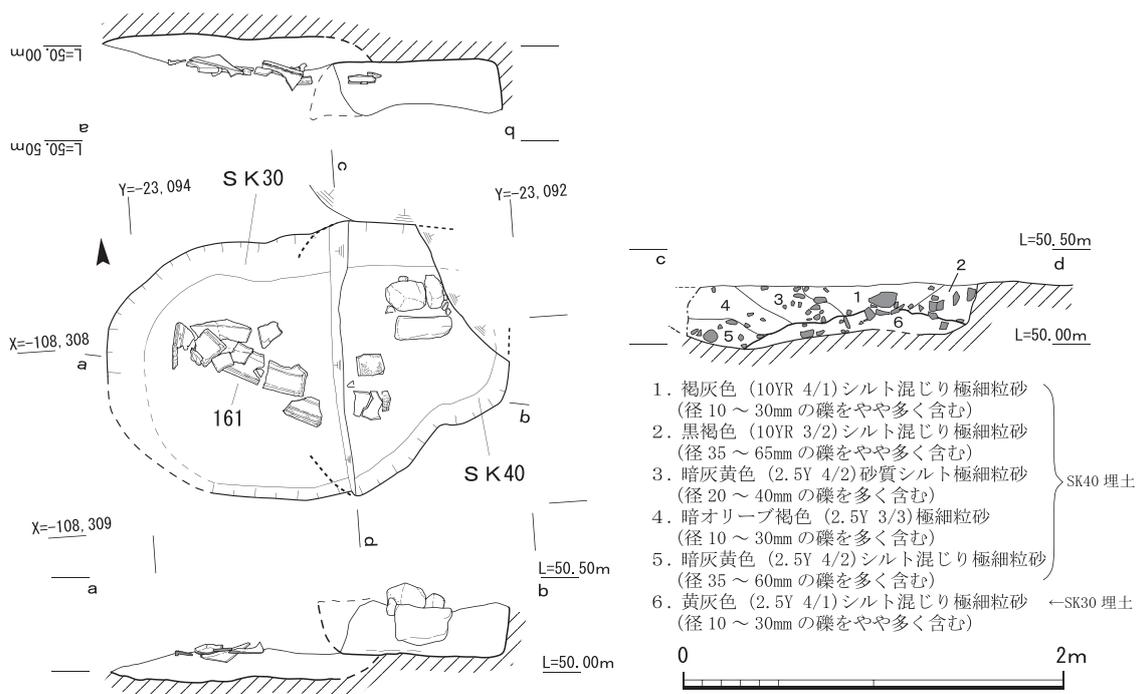
第15図 土坑 S K 80・85・104平・断面図(S=1/40)

2) 戦国時代

土坑 S K 80 (第15図) トレンチ東端の D 7 地区で検出した土坑である。上述の土坑 S K 85・S K 104と重複して検出した。S K 80はこの中では最も新しい戦国時代の土坑である。土坑は調査トレンチ内で完結せず、トレンチ以東に延びる。北端および西端が江戸時代の土坑に切られるが全体的に残りは良好で、トレンチ内の残存規模は南北0.65m、東西1.2mを測る。遺構検出面からの深さは0.5mで、平面形態は楕円形の可能性が高い。埋土の上層からは土師器皿が8個体以上出土した。土師器皿は大部分が小片化しており計測できない破片も多く出土したことから、土師器の数量はかなり多かったと推測される。上層の遺物出土範囲はトレンチ壁側に集中していることから、土坑の本体はトレンチ以東と考えられる。また、下層からは、上層の遺物出土範囲の西側に隣接する地点で瓦質鍋の上半部が出土した。遺物の出土範囲が上層と下層で異なることから、別の遺構である可能性も考慮したが、埋土の堆積状況からは同一遺構埋土の上・下層と推定されるため、この遺物も S K 80に伴うものとする。瓦質鍋は片方の破片が伏せられた状態で出土したが、もう片方の破片が内面を上に向けた横位で出土したことから廃棄したようである。

土坑 S K 30 (第16図) 調査区北西端付近の H 11・12地区で検出した土坑である。東部が江戸時代の土坑 S K 40と重複している。また、土坑の中央部から西部にかけて攪乱を被って著しい削平を受けており、遺構の底部付近しか残っていない。残存長は南北1.4m、東西1.3m、遺構検出面からの深さは0.15mを測る。平面形態は不明である。土坑中央部で大型の瓦質火鉢が出土した(第38図161)。削平の影響を受けている可能性があるが、遺構の底部から若干浮いて検出されたことから廃棄された遺物と考えられる。

土坑 S K 60 (第17図) 東部北寄りの D 8 地区で検出した土坑である。北端部と南西部が上層

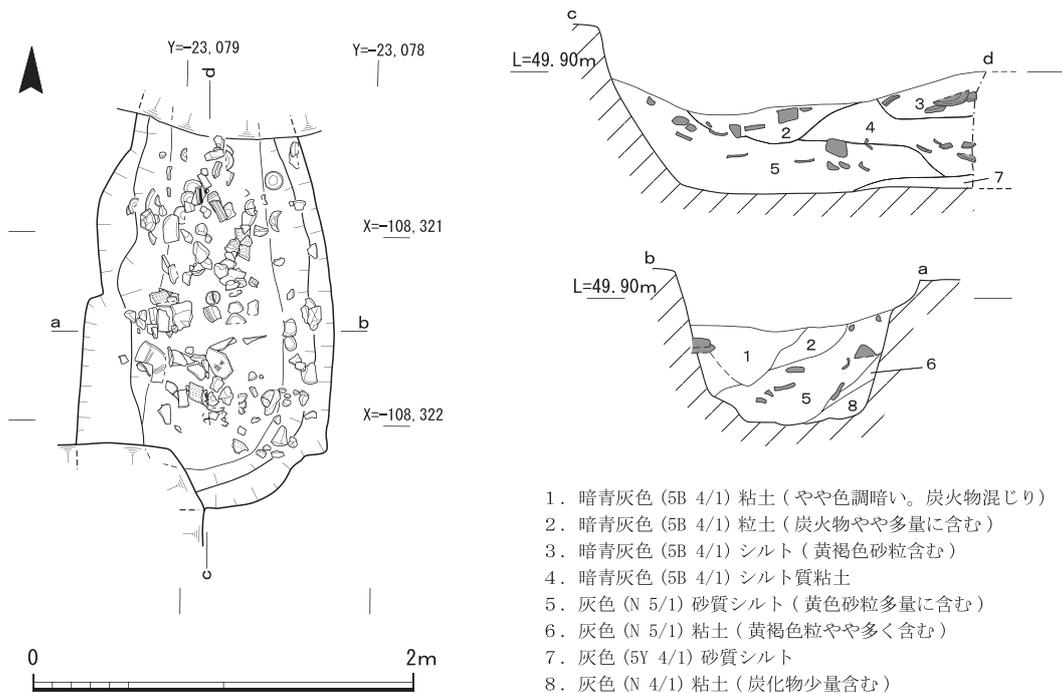


第16図 土坑 S K 30・40平・断面図(S=1/40)

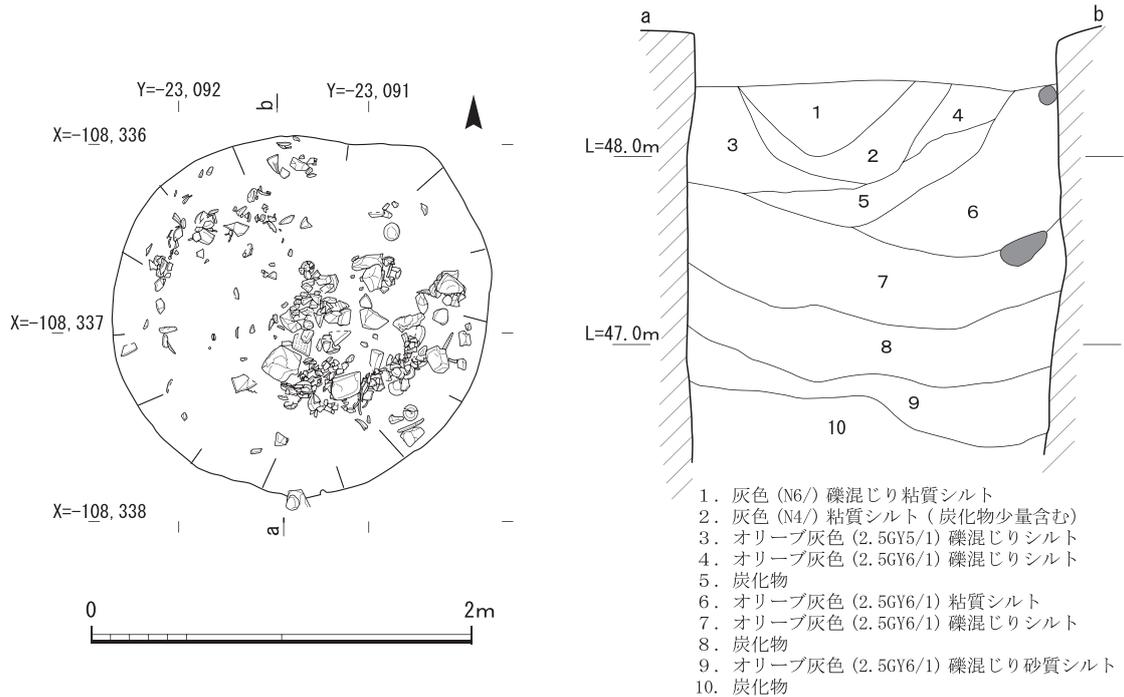
の江戸時代の遺構によって破壊されているが、全体的な遺存状況は良好である。南北の残存長2.0m、東西の長さ1.3m、遺構検出面からの深さ0.8mを測る。平面形態は楕円形か隅丸方形と考えられる。検出面から土坑底部まで、全長5～20cmの礫と主に中世の遺物が出土した。遺物の内訳は土師器皿75個体以上、瓦質鍋・釜・鉢、陶器すり鉢、青磁椀、白磁椀・壺、鉄釘等である。土坑の平面形態が定形的であるため調査当初は土壙墓等の可能性も考慮したが、遺物の出土状況には特に規則性が認められず出土量も大量であることから、遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。特徴的な遺物として、土坑S K 30からの出土資料とよく似る大型の瓦質火鉢(第36図91)が埋土下層から出土した。なお、軒瓦を含む瓦も一定量出土したが、S K 60より古い平安時代に遡る時期のもので(第34図27)、平安宮梨本院に付属する瓦葺建物が調査地の近隣に存在した可能性を示している。

S K 60の堆積土には炭化物が多量に含まれ、埋土の色は総じて黒色系を呈し黄褐色砂粒を含む層もあることから、短期間で人為的に埋められたと考えられる。なお、S K 60の記録にあたって、遺構内の南北軸、東西軸を基に4区画を設定し、出土位置の抑えられる遺物はこの区画毎に取り上げた。

井戸S E 90(第18図) トレンチ中央部南よりのG・H4地区で検出した井戸である。S E 90の周辺は自然堆積層上面の標高が北側、西側と比べて1m以上低く、削平を受けているものと推定される。井戸の東端部は大規模な攪乱に隣接するが、削平等の影響は被っていない。平面規模は東西2.0m、南北1.95mを測る円形の井戸で、埋土を約2.3m掘削した段階で多量の湧水が生じたため掘削を終了した。埋土は炭化物を大量に含む層とシルト層が互層状に堆積するが、炭化物層をはさんで上下に堆積するシルト層は色調・土質がほとんど同一である。したがって、S E 90は



第17図 土坑S K 60平・断面図(S=1/40)



第18図 井戸 S E 90 平・断面図 (S=1/40)

シルトと炭化物を交互に井戸内に投入する行為により短期間に埋め戻されて廃絶されたようである。遺物の出土状況には明瞭な傾向が認められず、埋土内の上下の層を問わず大量に出土した。井戸の廃絶に伴い廃棄されたものであろう。特に土師器皿が多く出土し、690個体以上を確認した。この他には青磁碗・皿・鉢、白磁碗、青花碗、大型の瓦質火鉢、釘などの鉄製品が出土している。瓦質火鉢は上述の土坑 S K 30・60 出土資料との関連性が想定される。なお、S E 90 の記録にあたって、遺構内の南北軸を基に東西の2区画を設定し、出土位置の抑えられる遺物はこの区画毎に取り上げた。

S E 90 の周辺には江戸時代の井戸が点在し、戦国時代、江戸時代で同様の土地利用がなされたことが窺える。位置が旧地形平坦面の南端部にあたるのが影響しているであろう。また S E 90 の掘削により、遺構面から約2.0mの深度で自然堆積層が黄褐色粘土から堅固な礫に変化することが判明した。この時点で湧水が生じ、さらに掘削すると湧水がより顕著になったことから、この礫層が地下水の透水層と考えられる。礫層上面の標高は46.5mで、トレンチ南部の石垣 S W 105 土層観察地点 (1)～(3) で検出した同層上面の標高とほとんど変わらない。

土坑 S K 70 (第6図) トレンチ中央部東よりの F 7 地区で検出した。江戸時代の土坑 S K 49・97 によって東西端が削平されている。残存規模は東西0.9m、南北0.45m、遺構面からの深さ0.5mである。平面形態は隅丸方形の可能性がある。土師器皿が数点出土した。土坑 S K 30・60・80、S E 90 と同じく、戦国時代の遺構と考えられる。

3) 安土桃山時代

造成層 S X 55 (第19・20図) トレンチ南西部の H・I 2～4 地区にかけて検出した造成層である。本調査地点の自然堆積層は主に明黄褐色粘土層 (聚楽土)、砂礫層で構成されるが、自然堆積層上

面の検出標高をみるとトレンチの南部と北部で約2mの高低差があり、造成層S X55北部のX=-108.340m付近で急激な段差が形成されている。造成層S X55は、この段差の急斜面と下段の平坦面にまたがって検出した。トレンチ内での検出範囲は南北約10.0m、東西5.5mである。

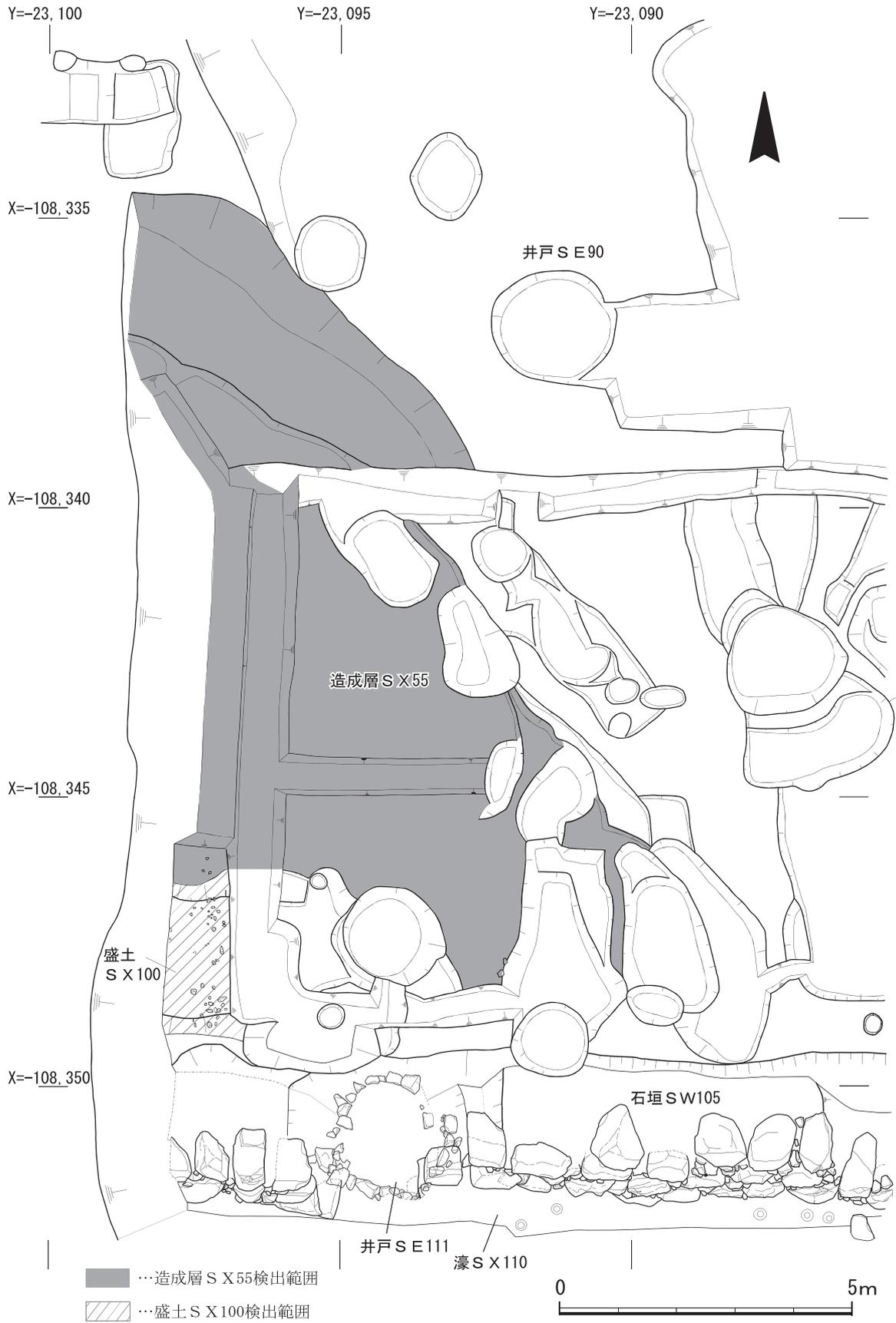
造成層S X55は黄褐色粘土層、黄褐色シルト質粘土層、黒褐色砂層、褐色砂層から構成される。黄褐色系の堆積土は、自然堆積層の明黄褐色粘土層(聚楽土)を起源とし、黒褐色・褐色砂層は自然堆積の砂礫層と旧表土から構成されると考えられる。造成層S X55は、上記の土質の堆積層が細かい単位で互層状に突き固めて形成された堅固な堆積層である。下段部平坦面における造成層S X55の分布範囲は、自然堆積層上面の標高が東側のG2・3地区以东に比べて最大で約1m低い位置である。トレンチ南西部(トレンチ第2・4区)西壁(第20図)では、自然堆積層上段部から下段部にかけての斜面部にも造成層S X55の堆積を確認した。細かい単位で積まれた土層が安定した状態で堆積しているため、上部から崩れて流入した土層とは想定しがたく、原位置を保っているようである。

造成層S X55の形成には必要な土量の多さと突き固めに要する多大な労力から、相当量の人員が動員された、と考えるのが自然であろう。造成層S X55からは遺物が数点出土しており、聚楽第築城直前の時期の土師器が含まれている。後述する盛土S X100、石垣SW105との位置関係から一連の遺構と判断され、聚楽第築城に伴う造成層と考えられる。

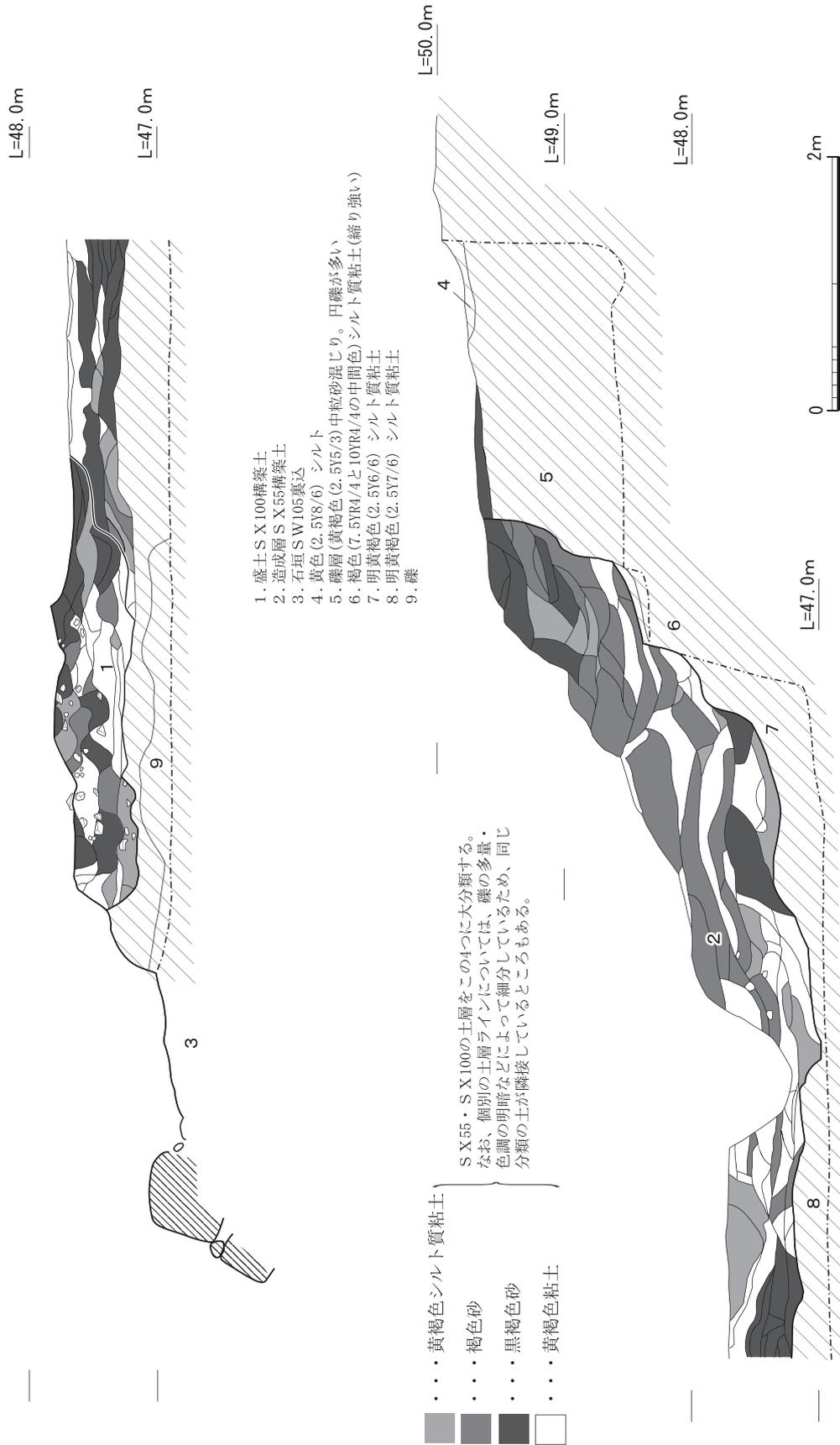
造成層S X55の性格として第一に想定されるのは、I2・3地区における旧地形の微細な高低差を解消し、そしてI4地区の急斜面の凹凸を平面的に整え壁状に形成した可能性である。そして第二に高低差2m以上の急激な段差を埋めて平坦面を南に設けた可能性、第三に第二の工程に加えさらに高く土を積み上げた可能性が挙げられる。なお、第二、三の場合は当然H地区以东にもS X55が堆積していたはずであるが、旧地形が凹んでいたトレンチ西端部以外の造成層は、聚楽第破却等によって完全に除去されている、との解釈が可能である。

盛土S X100(第19・20図) トレンチ南西端付近のI1・2地区で検出した堆積層で、造成層S X55を構築した後の盛土である。トレンチ内での検出範囲は南北約3.6m、東西約0.9~1.2mである。造成層S X55を一旦掘り込んでからその上部に形成された堆積層で、上面がS X55より約0.1m高く隆起していたため、盛土と表記した。造成層S X55と同様に、粘質・砂質の土層が細かい単位で互層状に叩き締められて構成されるが、造成層S X55と比べて礫を多く含み、堆積単位も異なるため区別が可能である。包含される礫は丸みを帯びている。盛土S X100は南端部で地山面を掘り込んでいることを確認しており、相当な重量に耐えることを主眼に形成された堆積層と考えられる。

盛土S X100の東隣りには江戸時代の井戸、粘土採掘坑が重複するため、本来の分布範囲は不明であるが、盛土S X100に含まれるものと近似した形態の礫が隣接する江戸時代の土坑SK114・井戸SE56の埋土内に含まれていた。盛土S X100は、土質が造成層S X55と近似すること、トレンチ南西部(トレンチ第2・4地区)西壁の堆積状況(第20図)から盛土S X100と造成層S X55の下端がほぼ同じ標高であることから、造成層S X55と一連の堆積層と判断される。また、盛



第19図 造成層 S X55・盛土 S X100・石垣 S W105平面図(S=1/100)



第20図 造成層 S X 55・盛土 S X 100・石垣 S W 105 南北土層図 (S=1/50)



第21図 石垣SW105 平・立面図(S=1/150)

土 S X 100の南端部は石垣 S W 105裏込の掘削地点とほぼ接することから、石垣の構築との関連性を想定できる。隣接する造成層 S X 55を含め、聚楽第本丸南辺石垣を構成する堆積層の可能性が高い。

石垣 S W 105・濠 S X 110 (第21図) 石垣 S W 105は聚楽第本丸南辺の石垣で、B 1・- 1地区から I 1・- 1地区にわたって約32m検出した。ただし、安全を確保するために東端部は石積み^{いしづみ}の延長を確認した直後に埋め戻しており、図示できた範囲は長さ約30m分である(第21図)。検出面の標高が現地表面より約3.0~3.5m深く、検出地点が多層階建物の直下であったにもかかわらず良好な状況で遺存していた。従って、調査地点以東・以西でも石垣は遺存している可能性が高い。濠 S X 110は石垣 S W 105に面する聚楽第本丸南濠である。今回の調査成果と敷地南隣の辰巳公園内の第10、49地点の発掘調査成果から(第4図)、幅約40mの濠と推定される。本トレンチでは、濠の北辺部を検出した。

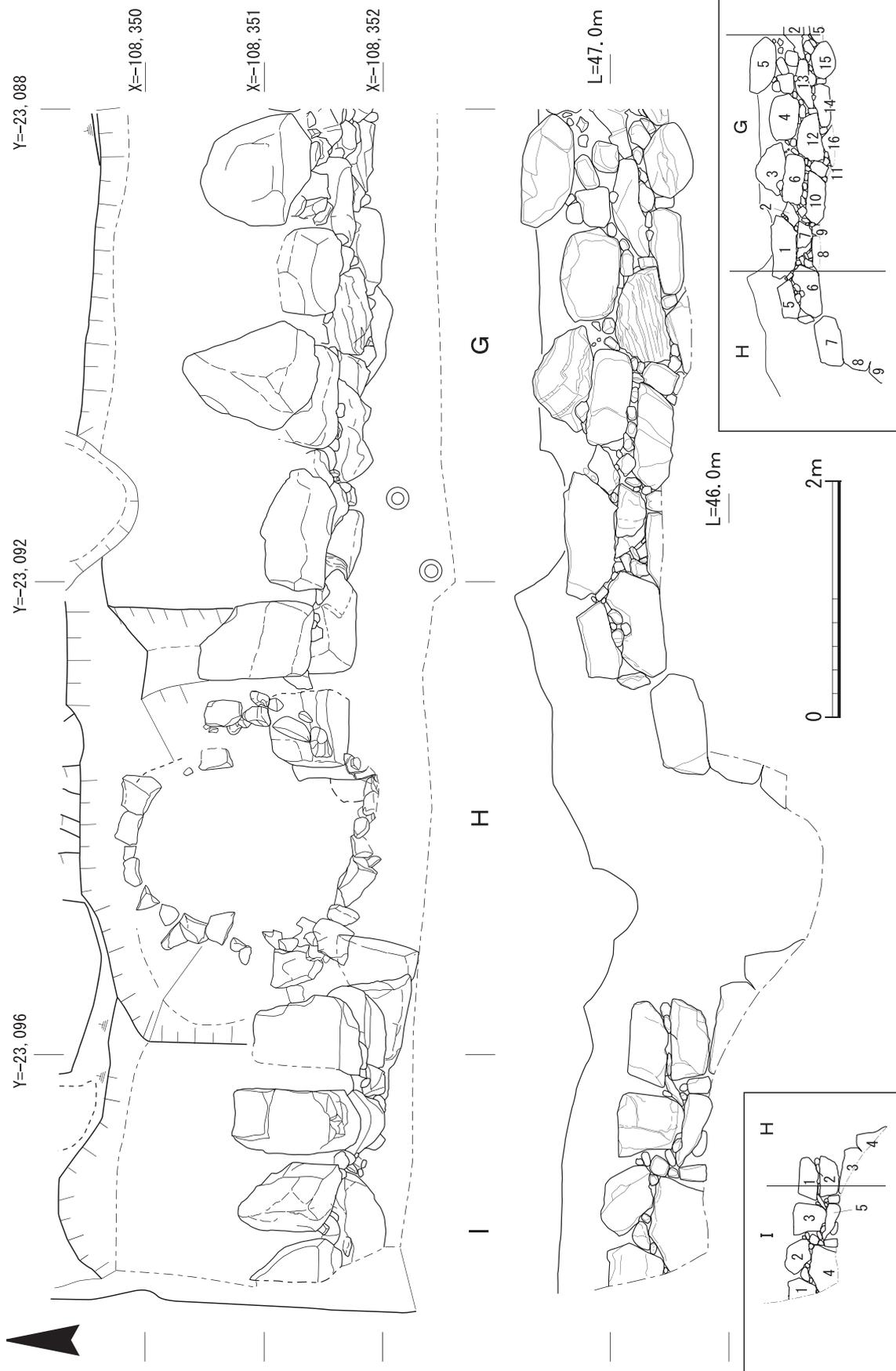
石垣 S W 105・濠 S X 110の報告については、本調査トレンチの地区割を用いる。ただし、南北列の数字は表記せず、東西列のアルファベットのみを用いる。各地区ごとに主要な石材に番号をつけ、区割りのアルファベットと石材番号の組み合わせで報告するが、アルファベットを小文字で表記する。なお、石垣 S W 105の構造と検出状況より、西から東に向かってアルファベットの逆順に I 地区から報告することとする。

石垣の石材には、一般に石垣本体を構築する「築石」^{つきいし}、石垣最下段の「根石」^{ねいし}、築石間の空隙を埋める「間詰石」^{まづめいし}「詰石」^{つめいし}、より大きな隙間を埋める「間石」^{あいし}、「築石」を安定させ雨水等を排水するために裏込を充填する「栗石」^{うらこめ}、据わりを調整するために「築石」の脇に据える「胴介石」^{どうかいし}、「築石」の石尻に据えられる「尻介石」^{いしじり}「りかいし」^{しりかいし}等が存在する。なお、この石材の区分は織豊系城郭の組織的な築造が全国的に展開して以降の概念であり、初源期の平城である聚楽第に適合しないものもあるが、便宜的に用いることとする。また報文で触れる石材の種類は、断りの無い限り「築石」とする。

G・H・I地区(第22図)

I地区では2段の築石列を確認した。西端部北側には盛土 S X 100が隣接している。上段にならぶ石材 i 1~3は大きさがほぼ揃っている。下段は、石材 i 4がやや大きく正面形態も整っているのに対し、石材 i 5は不定形で、両隣の i 4と h 2の間には間石を用いている。裏込めの厚さ(築石の石尻から自然堆積層までの距離を指す。以下同)は、石材 i 2・3の背面で約1.0mである。築石 i 2は緑灰色を呈し、他の石材とは異なる特徴を有する。最も可能性が高い岩石種は文象斑岩^{もんしょうはんがん}であるが、流紋岩の可能性もわずかにある。遺構を検出した自然堆積層上面の標高は47.2~47.4mである。

H地区では最大4段の築石列を確認した。石材 h 1~4と h 5~9の間は築石が現存せず、江戸時代の井戸 S E 111の掘削に伴い除去されている。井戸 S E 111は石組井戸であるが、石垣 S W 105から抜き取った石材を一辺0.15m~0.3mまで砕き、井戸の石組の一部としている。また、石材 h 1・4、h 5~9は井戸 S E 111の石組の一部としてそのまま再利用され、石材 h 1・3は



第22図 石垣 SW105 G・H・I区平・立面図(S=1/50)

東側面が井戸S E111の曲線に沿って割られている。井戸S E111からの湧水が著しいため石垣底部までの掘削は断念したが、最深部の標高45.2mまでで、石材h 1～4の計4段を確認した。井戸S E111によって石材h 1は本来の位置よりやや東に下って傾斜し、石材h 7は現代建築物の基礎杭打設に伴ってやや北に移動しているが、当初の構築状況をおよそ保った状態で検出した。H地区では井戸S E111以外にも江戸時代の井戸、土坑が石垣S W105に隣接するため、自然堆積層上面の標高は最高地点が47.8m、最低地点が46.75mと差がある。裏込めの厚さは石材h 5の背面で0.7mを測る。

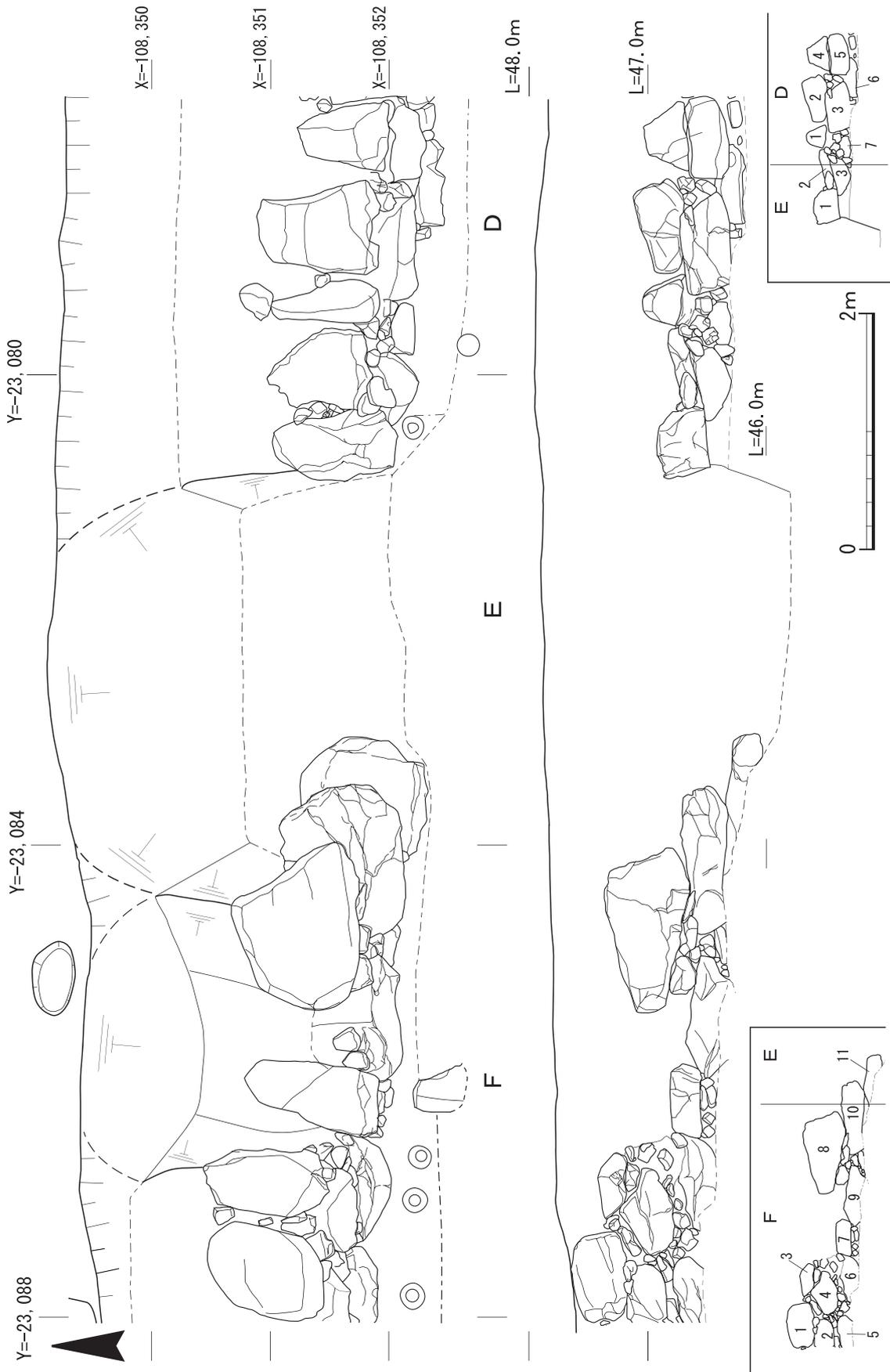
G地区では4段の築石列を確認した。石材の構築状況が最も良好に遺存する地区である。各築石の前面の形態が自然石でありながら長方形に近く、前面下辺がほぼ水平に据えられている。また、最上段の石材g 3・5の上面の標高が自然堆積層上面よりやや高く、トレンチ内では最も残存状況が良好である。築石はI・H地区と比較すると大ぶりである。築石同士は、前面端部ではなく胴部で接するため前面の間隙が大きくなり、各築石間には間詰石、詰石を配する。またg 1とg 6の中間に配されるg 2は、間石の可能性もある。築石前面の傾斜は石毎にまちまちであるが、全体では傾斜が安定し築石の横目地が各段でそろっている。石垣S W105の築石は、観察しうる限り基本的に幅に比して奥行きが長くなるように積まれるが、石材g 1のみ奥行きが短い。積み方のもう一つの特徴として築石の前面と上面が平らになるように向きを調整する傾向があり、g 1はこの条件に沿うように配置した結果、奥行きが短くなったものと推定される。裏込めの厚さは石材g 1の背面で1.35m、g 3の背面で0.6mを測る。

D・E・F地区(第23・24図)

F地区では、3～4段の築石列を確認した。西部はG地区の延長で良好に遺存しているが、地区中央部で攪乱を被っており、石材f 7・9の上段石材が除去されている。f 7より南側の濠S X110埋土内からやや小ぶりの花崗岩が出土しているが、崩落した石垣石材と考えられる。また、石材f 4とf 7の間には礫混じりシルトが堆積しており、この層からは江戸時代の遺物が出土した。東に隣接する石材f 8は石垣S W105を構成する石材では最大である。下に積まれる石材f 10・f 11も大型で、石材f 8上端部からf 11下端部までの高低差は約1.6mである。石材f 11より下位には石材が確認されないことから、石材f 11は石垣S W105の最下段すなわち根石と考えられる。同地点では井戸内からの湧水のため、石材f 11下端から約0.2m下の標高45.8mの深度で調査に伴う掘削を中断した。裏込めの厚さは石材f 8の背面で0.65m、f 11の背面で0.2mを測る。石材f 11から石材e 1までは幅2.1mに渡って築石が存在しないが、現代の井戸の掘削で除去されたようである。

E地区では2段の築石列を確認した。E地区では石材e 1からd 1までが小ぶりで、特に石材e 2は厚さが0.2mと非常に薄い。e 2・3とd 7の間には間詰石、詰石と考えられる小型石材が複数配される。築石が全体的に小ぶりであるにも関わらず石材の隙間が大きく、この地点の石積みはやや粗さを感じる。裏込めの厚さは石材e 2の背面で0.75mを測る。

D地区の東部から、全般に石材が大型化する。D地区西部の石材d 1～6はE地区以西の石材



第23図 石垣 SW105 D・E・F区平・立面図(S=1/50)

と大きさが変わらないが、東部の石材 d 8 は幅1.65mを測り、石材 f 8 について2番めに大きい。石材 d 8 の前面東辺には縦方向にはつった痕跡が確認できる。各段の築石前面をそろえるため、玄能等の工具を用いて突出部を除去したものと考えられる。なお、石材 d 8 の上面には細かい凹凸があり、上面を平坦に整形した痕跡の可能性はある。石材 d 8 の東の石材 d 9 は間石で、東に隣接する石材 e 2 の石尻が西に突出して d 8 に接するため、前面に生じた大きな隙間を d 9 が詰める役割を担っている。d 9 は両隣の築石より奥行き(控え)が短く、機能の差が明らかである。石材 d 9 以外の石垣 S W105 に使用される間石も同様に配置されているようである。裏込めの厚さは石材 d 2 背面で0.65m、石材 d 8 背面で0.9mを測る。

D～F地区の石垣 S W105 を検出した自然堆積層上面の標高は、F地区西端で47.6m、D地区東端で48.0mを測る。E地区から東では、西側のF・G地区と比較すると石積みが一段低くなるが、対照的に遺構検出面の標高は東ほど高くなるため、築石上端部からの高低差が次第に拡大する。

B・C地区(第24図)

C地区では1～3段の築石列を検出した。使用石材は総じて大型である。築石間の前面の隙間も大きくなるため、石材 c 6・b 2 等の間石や間詰石が配置される。また、C地区以東では築石の石材にチャートが混じるようになる。石材 c 1 は大型のチャートであるが、前面に褶曲構造が認められ、熱変性を受けていることが分かる。c 1 は、右側面および裏面が破壊されている。また、他の築石と位置を比較するとかなり北よりに位置し、原位置から移動している可能性が高い。石材 c 7・8 は大型の花崗岩であるが上面が平滑で、さらに上段に築石を据えやすくする配慮が看取できる。石材 c 1 の南側と c 7 の北側にはやや小ぶりの花崗岩が転落している。裏込めの厚さは石材 c 1 の背面で0.5m、c 8 背面で0.75mを測る。

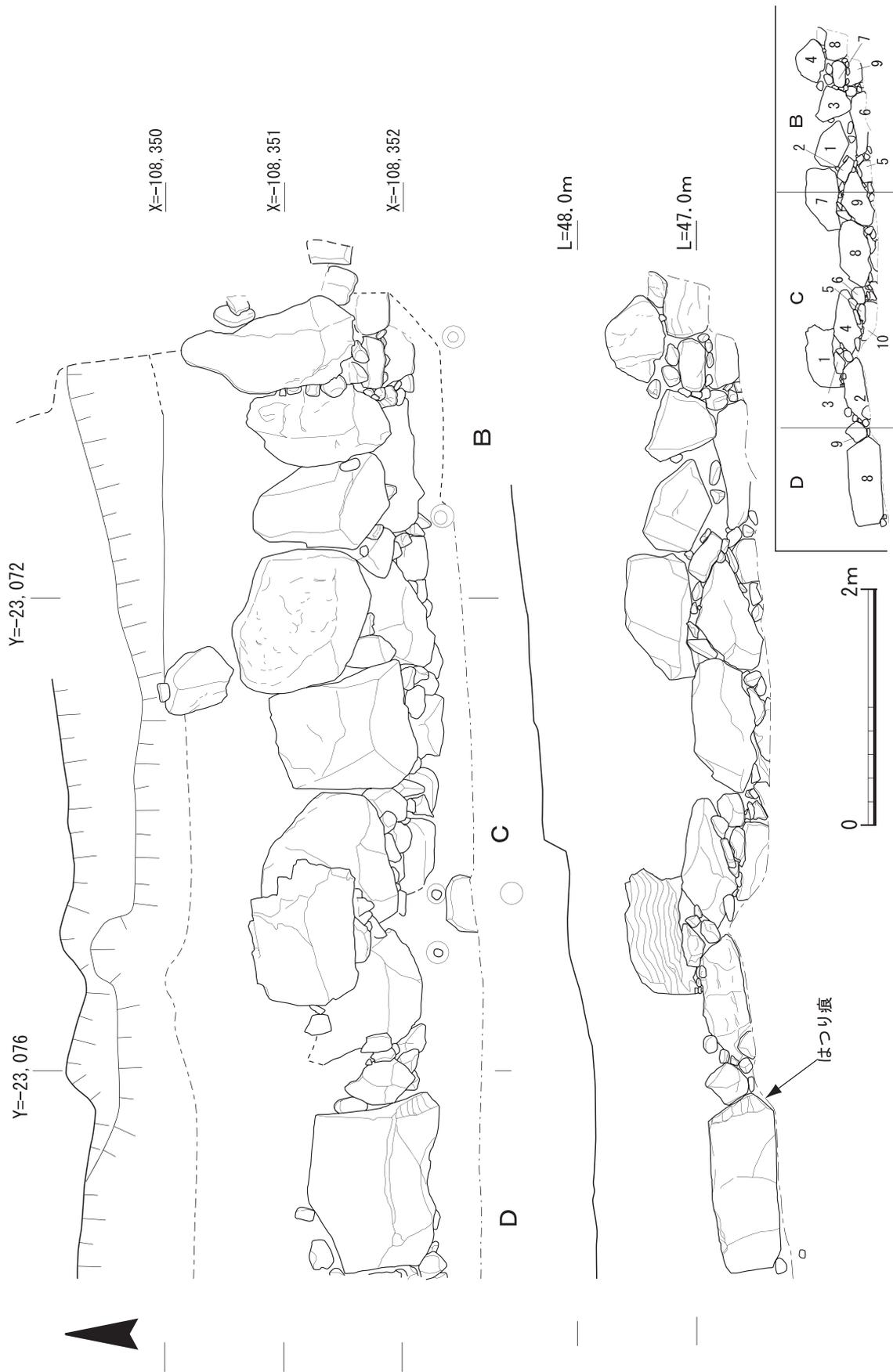
B地区では2～3段の築石列を検出した。C地区と比べると築石が小型になるが、それでも石垣 S W105 西端部のH・I区の築石と比較すると大型である。石材 b 4 は奥行きが長く、b 4 背面の裏込めの厚さは0.2mのみである。b 4 は全体に強い風化を受けているために形態が丸みを帯び、安定して据えるために西側下面には胴介石が複数詰められている。

C地区からB地区にかけて、自然堆積層上面の標高はさらに高くなり、東端では標高48.5mに達する。

なお、図示した石垣 S W105 の東端は石材 b 8 であるが、b 8 の東約2mの地点まで掘削を実施し石積みの延長を確認している。

土層観察地点(1)～(3)(第21・25図)

土層観察地点(以下、「地点」と表記)(1)はI地区の調査トレンチ西端部に設定した。石材 i 1、i 4 の南側の堆積層は濠 X 110 埋土である。埋土最上層の第1層は黄灰色のシルト質極細砂、第2層は暗灰黄色ブロック質粘土層で、石垣 S W105 の北に隣接する造成層 S X 55 および遺構面を形成する自然堆積層と似た土質である。第3層は埋土の大部分を構成するが、第1層と似た黄灰色シルトを少量含む礫層である。この礫は第7層の自然堆積層と同じ組成であるが、第3層の礫はより大きく、形態がより円磨を受けている。第4層は石垣 S W105 裏込である。第3層、第



第24図 石垣 SW105 B・C・D区平・立面図(S=1/50)

4層に含まれる礫は、岩石組成、大きさ、形態が近似している。

地点(2)はH地区の井戸SE111による攪乱の西側の、石材h1～h4の構築状況が観察できる地点である。石材h1の東面とh2の南面が井戸SE111の掘削に伴い打ち欠かれ、石材h1がわずかに東に傾いているが、全体的には石材の位置関係はほぼ原位置を保っている。石材h4は調査トレンチ南壁に接するため底を確認できなかったが、検出した範囲では石材h1の上端からh4最下部までの高低差は1.15mを測る。築石h1～4と自然堆積層第3・4層の間に堆積する第1・2層は石垣SW105の裏込栗石層である。上端から下端まで丸みを帯びた礫が、栗石として充填されているのを観察できたが、絶え間ない湧水により礫が原位置を移動したため、栗石層の下部にあたる第2層は礫を図示していない。礫のサイズは大部分が5～10cmの範囲に収まり、礫の特徴は地点(1)と変わらない。礫の配置を見ると、築石の石尻付近の栗石と介石に用いられる礫は大ぶりで、それ以外の地点の礫は小ぶりの傾向がある。

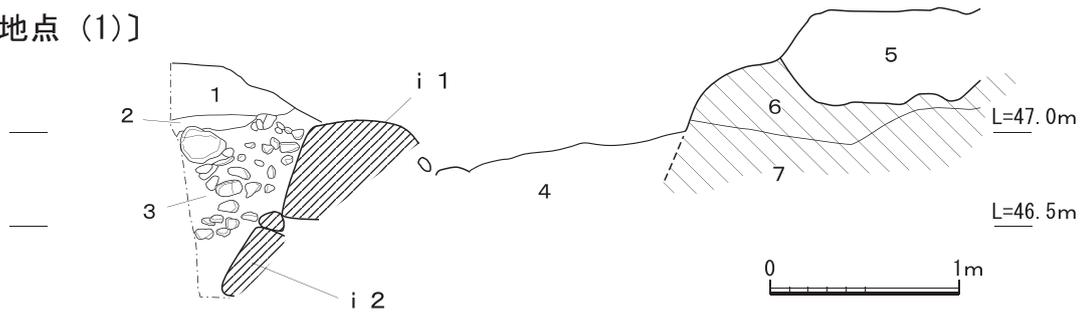
地点(3)は、F地区の現代の井戸による攪乱西側に設定した。石材f8、10、11の3段の構築状況および埋没状況が観察できる地点である。第1～4層は濠SX110の埋土である。第1層は褐灰色粘質シルトに大量の丸みを帯びた礫が包含されている。第2～4層の堆積層は黄橙色、黄灰色の礫まじり粘土・粘質シルト層で、包含する粘土の質は自然堆積層の第10層の土質と良く似る。濠SX110埋土の特徴は地点(1)と同様である。石材f11の下部が井戸掘削に伴い打ち欠かれ、わずかに移動している可能性があるが、全体的には石材の位置はほぼ原位置をたもっている。第5層から第8層は、裏込の栗石層である。このうち、第7層は栗石の礫の直径が大きくなる傾向がある。第7層を挟んで積まれるf8・10は接する点以外のすき間が大きく、石材を安定させるために大ぶりの礫が充填されるようである。第5～8層の礫は密に詰まっているが、礫の間隙には粘質のシルト土が包含されている。第10・11層は自然堆積層である。第10層は粘土層(聚楽土)で、第11層は堅固な砂礫層である。

石材との位置関係を見ると、石材f11の石尻がほとんど第11層の傾斜面に接しており0.2mしか離れておらず、また石材f11の下位に接する築石が存在しない。したがって石材f11は石垣SW105の最下段、すなわち根石と考えられる。石材f11の下位に堆積する第9層は、礫を多く含む粘土層で、石材f11を安定して据えるために自然堆積層を掘り込んだ層と考えられる。この地点で観察する限り、同層内には石材f11を支える胴木や杭、捨石の類は確認されなかった。第9層を検出した標高45.8mから下は湧水により掘削が不可能であったため、第9層の下に存在する自然堆積層上面は検出できなかったが、おそらく第11層が堆積し、石垣SW105の重量を支えているのであろう。

ボーリング調査(第26図)

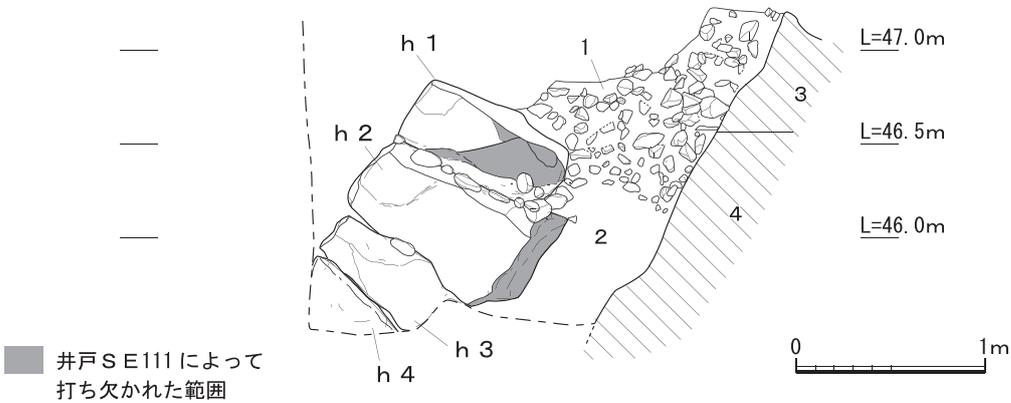
発掘調査の着手前に、調査予定地の敷地南西隅地点で新築建物基礎の設計のため、ボーリング調査が実施された。このデータをボーリング調査地点から東に4m離れた地点(1)と照合、合成すると第26図のようになる。土層の特徴と検出標高から、第1・2層は遺構面上層の江戸時代の堆積層、第3、4層は濠SX110の埋土と考えられる。そして、第5層は標高44mから下位に数

〔地点 (1)〕



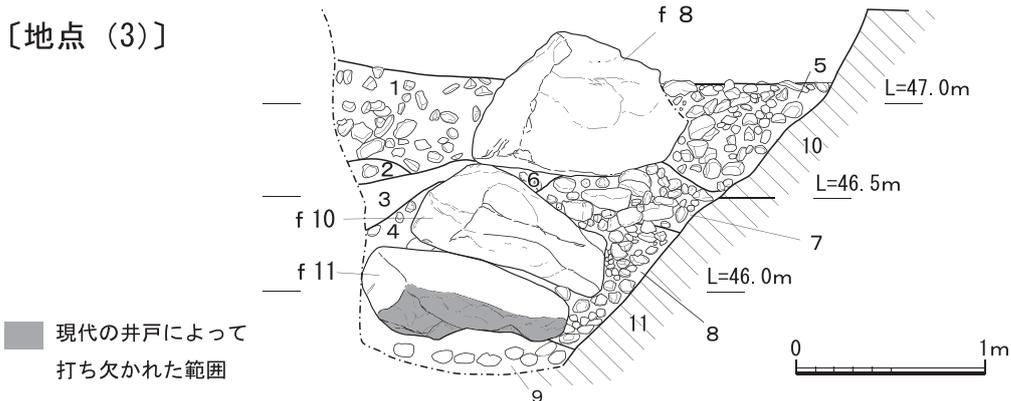
- | | |
|---|--------------------------|
| 1. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質極細砂 | 5. 盛土 S X100 構築層 |
| 2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) ブロック質粘土 | 6. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト質粘土 |
| 3. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト混じり礫 | 7. 礫 |
| 4. 灰色 (5Y4/1) やや粘質のシルトを含む礫
(5~15cm 大の礫を多く含む) | |

〔地点 (2)〕



- | | |
|---|--------------------------|
| 1. 灰色 (5Y4/1) やや粘質のシルトを含む礫
(5~15cm 大の礫を多く含む) | 3. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト質粘土 |
| 2. 第1層と同一層であるが、湧水で礫が移動 | 4. 礫 |

〔地点 (3)〕



- | | |
|---|---|
| 1. 褐灰色 (10YR4/1) 粘質シルト (礫を多量に含む) | 7. オリーブ灰色 (5Y4/2) 粘質シルトを含む礫
(10~15cm 大の礫を多く含む) |
| 2. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 礫混じり粘土 | 8. オリーブ灰色 (5Y4/2) 粘質シルトを含む礫
(5~12, 3cm 大の礫を多く含む) |
| 3. 黄灰色 (2.5Y6/1) 礫混じり粘質シルト | 9. 黄灰色 (2.5Y6/1) 礫混じり粘土 |
| 4. 黄灰色 (2.5Y5/1) 礫混じり粘質シルト | 10. 明黄褐色 (2.5Y6/6) シルト質粘土 |
| 5. 灰色 (5Y4/1) やや粘質のシルトを含む礫
(5~15cm 大の礫を多く含む) | 11. 礫 |
| 6. オリーブ灰色 (5Y4/2) 粘質シルト (礫を含む) | |

第25図 石垣 S W105 D・E・F区断面図(S=1/40)

mにわたって堆積する堅固な礫層で、自然堆積層と推定される。すなわち第5層上面が石垣S W105の底と考えられるのである。地点(1)の掘削は、安全確保のため築石を2段検出した標高46.1m付近で終了しているが、さらに約2m下が濠の底面となるため、残存する石積みは計5～6段と推測される。

地点(1)から2.5m東の地点(2)では、上述のとおり4段の築石を検出している。ボーリング調査地点の結果を直接投影すれば、あと1～2段下が根石となる。ただし、さらに11.5m東の地点(3)で確認した石垣の根石である石材f11の底面標高は、ボーリング調査地点より1.5m以上も高い。石垣S W105を検出した自然堆積層上面の標高が西側ほど低くなることと合わせて考慮すると、石垣S W105下面の自然堆積層の東西の高低差は聚楽第造営以前の旧地形の傾斜を反映している可能性がある。ただし、石垣構築にあたっては根石列の標高をほぼ一定にそろえるはずなので、おそらく旧地形の斜面を切土し、ボーリング地点と地点(3)の中間地点で濠底に段差を設けている、と考えられる。

石垣S W105使用石材の産地同定

石材の産地については、神戸大学名誉教授田結庄良昭氏^(注24)にご協力いただいて、現地での肉眼観察による岩石種の同定と、蛍光X線分析結果の検討から原産地を同定していただいた。蛍光X線分析については、奈良教育大学教育学部青木智史氏および京都市産業技術研究所横山直範氏、田口肇氏にご協力を賜った(付表4・5)。

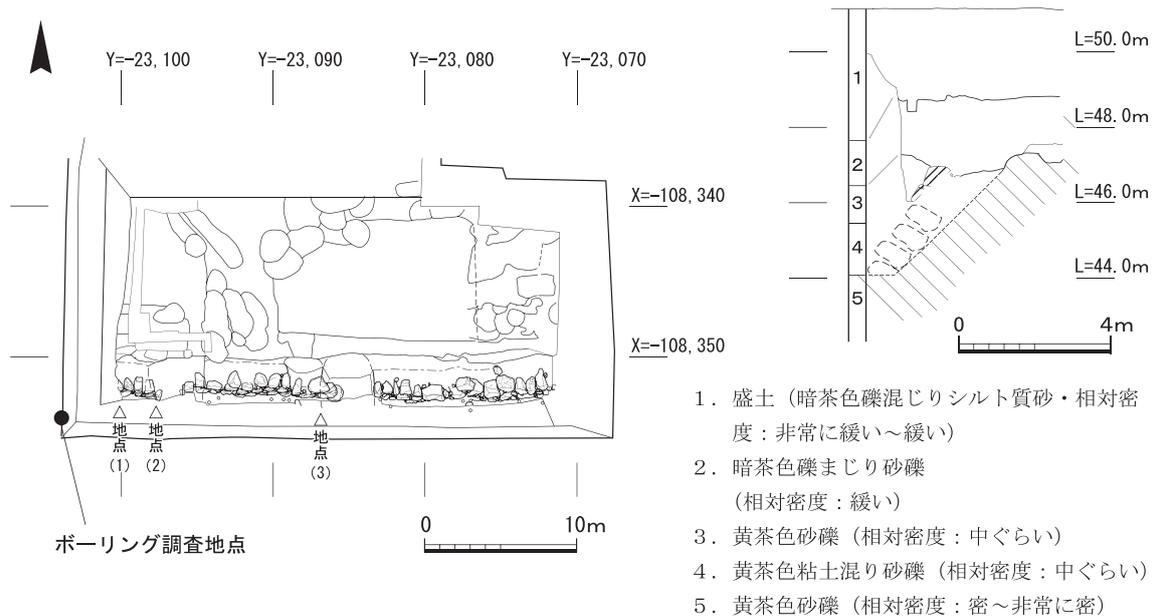
田結庄氏による現地での石垣S W105石材の肉眼観察より、以下の特徴が看取された。

第一に、石材の大部分は花崗岩を中心とする火成岩であるが、チャート、砂岩も少量含まれる。チャートは層状となり、砂岩はホルンフェルス化し、いずれも熱変成を受けている。第二に、花崗岩は、カリ長石が斑状をなし、石英の独立性が強い。中～粗粒の斑状花崗岩はカリ長石がピンク色を呈す。第三に、花崗岩以外の火成岩として、石英斑岩(花崗斑岩)、ヒン岩(火砕岩脈系)を少量有する。

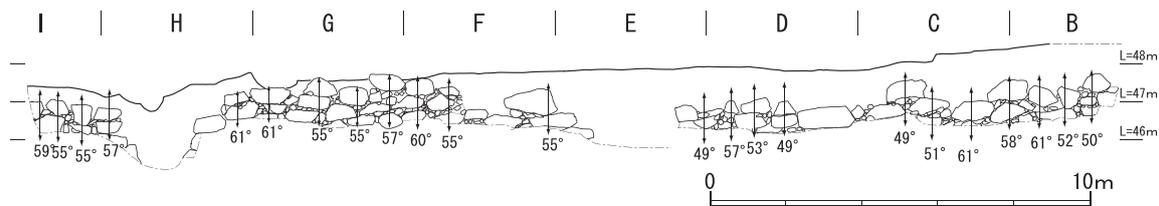
第一の特徴から、石垣S W105の築石に用いられる大型の堆積岩は全て熱変成を受けており、花崗岩を主体とする火成岩の岩脈と堆積岩の岩脈が隣接する単一の地点から採取されたと推定される。第二の特徴である花崗岩の肉眼観察から想定される産地は、滋賀県南部の田上山周辺と推定される。第三の特徴である石英斑岩、ヒン岩は、田上山周辺と、京都盆地東山の比叡山麓周辺の花崗岩産地でも採集が可能である。

また、蛍光X線分析の結果と各産地の花崗岩の組成を比較することにより、以下の傾向が指摘できる。

試料の組成は、田上山や比叡山花崗岩より塩基性で、FeやCa等に富み、Siに乏しい。この特徴と似た化学組成を持つのは田上山花崗岩体の周辺に分布する観音寺花崗閃緑岩である。主に栗東市に分布する。築石には花崗岩のほか、火砕流の溶結凝灰岩、石英斑岩脈、丹波帯の中・古生層、さらに火災岩脈が産しており、これら岩石の組み合わせは観音寺周辺に見られる。



第26図 事前ボーリング調査位置図・土層模式図(S=1/500・1/200)



第27図 石垣 S W105 石材傾斜角度測定図(S=1/200)

石垣 S W105の全体的な特徴(第27図・付表3～5)

石垣 S W105の検出地点は、森島康雄、馬瀬智光の提示した聚楽第復原案の本丸南辺推定位置からわずかに南の、敷地境界線上に位置する。また、石垣 S W105の方位は正東西を指向する。聚楽第跡の現行地割は南二之丸以南と北之丸北西部の方位が乱れるが、本丸周辺の地割は方位に即している。特に本丸周辺の現行地割は、聚楽第の旧地形をある程度踏襲している可能性がある。

石垣 S W105の勾配について、2段以上築石が積まれる23か所をクリノメーターによって計測した。各地点の平均傾斜は55.4°で、聚楽第の造営・存続時期である天正年間～文禄年間の城郭によく見られる勾配である。

築石の石材は西から東へ徐々に大型化する。最も多い石材は幅0.5～1.0m、奥行1.0m前後で、重量0.4～0.6 tの範囲に収まるが、東部の石材には、幅1.0～1.5m、奥行1 m以上で、重量が1.0 tを越えるものが多く含まれ、この時期の城郭としては突出して大型の築石を用いている。築石の奥行と高さを比較すると、重量0.4～1.0 tの築石の奥行は高さの1.4～2.5倍にはほぼ収まり、この範囲を逸脱する数値は重量0.3 t以下と1.5 t以上の石材に集中する。そして、大部分の築石は上面と正面が平坦面をなしている。こうした傾向から、石積み工法に見合った規格的な形状の石材調達が見込まれる。なお、築石及び間詰石、詰石には、表面が黒色化したものが見られるが、前面が顕著に黒色化したものはなく、側面や背面、特に後世の井戸に接する面に著しい。湧水が著し

いことから、地下水に含まれるマンガンや鉄分によって着色されたものと推定される。

石垣 S W105のすべての使用石材は表面が風化し、形状が丸みを帯びる。石切り場から切り出した石材ではなく、山中か河原の転石を採取したものと考えられる。また、使用石材の表面には矢穴や刻印、墨書が存在せず、石材 d 8 端部のはつり痕以外には明瞭な加工痕跡を確認していない。間詰石、詰石や裏込の栗石に築石石材の破片がごく少量しか含まれないことも、石材がほとんど加工されていないことを示す。上・下・左・右の築石は胴の部分で接しており、接する箇所前面には隙間が生じる。大きな隙間には間石、小さな隙間には間詰石をむらなく丁寧にかませている。以上の特徴から、石垣 S W105は基本的に自然石を用いた野面積みに分類される。そして、石積みの工法は、横目地の通りが部分的にそろそろ箇所があるものの全体的には乱積みに分類される。

ここで各地点の自然堆積層を比較すると、標高46.5mより上位が江戸時代以降に「聚楽土」と称される精良な粘土層で、下位が堅固な礫層である。ボーリング調査の結果から、この堅固な礫層は石垣 S W105の直下まで続くことが分かる。地点(2)では最下段の根石 f 11の下に胴木等が確認されなかったが、その理由は石垣 S W105の基盤面が堅固な安定した礫層であるため、石垣の不等沈下を予防する工夫が不必要であったことと推定される。

石垣 S W105では、裏込の栗石として径5～15cm大の礫を用いている。通常の城郭石垣に用いられる裏込の栗石と比較すると非常に小ぶりである。裏込石の配置にはそれほど高い規則性が見出だせないが、築石の石尻付近にやや大ぶりの栗石を配し、北側の自然堆積層側には小ぶりの栗石を配する傾向がある。築石の据わりを安定させるための工夫を示すのであろう。栗石の隙間には粘質シルトが入っているが、全てが上層からの流れ込みとは考えがたい堆積状況であることから、構築の当初から栗石層には土が混じていたようである。栗石の礫はほぼ全てが丹波山地から供給される堆積岩で、外形はかなり円磨を受けている。京都盆地内の河床から採取された礫と推定される。前田玄以黒印状(名古屋市博物館所蔵)には「当所河原にて、くり石三十荷即在所之人足にて今明日中に聚楽に至て可被相届候也、三月十三日玄以(黒印) 下鴨 役者中」と記され、京都所司代の前田玄以が聚楽第築造に際し、下鴨社に栗石の調達を命じたものとされる。石垣 S W105裏込栗石の様相は、この記載内容と整合的である。



石垣 S W105の使用石材に共通する最大の特徴は、種別を問わず一切転用石材が確認されて

第28図 石材 h 5・7 埋没状況(南西から)

いないことである。栗石は上述のように京都盆地内から調達したものが含まれるが、築石は自然石でありながらも、上述のように大まかな規格に則した石材を選別して用いている。石材の原産地については、花崗岩の分析から比叡山、田上山、田上山東方に位置する観音寺の3候補が挙げられている。岩石の特徴は観音寺に最も近似するが、観音寺は他の2候補と比べて京都から遠く離れた山中にあり(第1図)、運搬は極めて困難と思われる。現段階での判断は留保し、今後の調査・研究に委ねたい。ただし、聚楽第の石垣石材が田上山・観音寺のような遠隔地から運搬された可能性は十分にある。

比叡山は聚楽第直近の花崗岩産地であるが、聚楽第と比叡山は京都市街地をはさんで東西に位置する。比叡山から石材を聚楽第に運搬する場合、京都の都市機能維持との両立に配慮する必要があり、単なる運搬とは別の困難が生じたはずである。ところで、聚楽第の東側を南北に流れる堀川(第1図)では、秀吉が聚楽第以前に京都での邸宅とした妙顕寺城跡で舟入の可能性のある遺構が近年に検出されている^(注25)。この結果を受け、堀川水運と聚楽第造営の関連性が指摘されている^(注26)。聚楽第築城に際し、堀川、鴨川をはじめとする当時の水上交通網を駆使したとすると、遠隔地からの石材調達も不可能ではなかったであろう。以上は推論の域を出ないが、文献史料に記載される事実として聚楽第は着工からわずか半年で完成しており^(注27)、短期間の築城に際して要した労力、財力、資源が極めて膨大なものであったことは確実である。

石垣S W105の立地は本丸南濠に面することから、単なる防衛機能だけでなく公武の頂点に立つ関白秀吉の威信を示す視覚的効果が求められたはずである。調査で直接検出した石垣S W105の高さは約2.3m、ボーリング調査を考慮すると最大残存高約4mであるが、実際には更に高かったことは歴然としている。文禄4(1595)年の聚楽第破却によって上部の構造物は破壊されているが濠S X110はこの時にほとんど埋まったようである。今回の調査で検出したのは北端部の幅1m程度であるが、金箔瓦を含む多量の砂礫の堆積を確認した。土層観察地点(1)、(3)の濠S X110埋土がこの堆積に相当する。土砂は石垣S W105の上部にも堆積しており、石垣S W105の築石と裏込栗石層は、濠S X110埋土と同じ質の礫混じりシルト層に直接覆われた状態で検出した(第28図)。この層に含まれる礫は、大きさ、形状の特徴から、本来は石垣S W105の裏込栗石と推定される。聚楽第破却によって、現存高より高く積まれていた石垣を支持し、構築した裏込層・盛土層が濠S X110に向かって崩され、そして石垣S W105の残存部の上位にも堆積したと推定されるのである。

4)江戸時代

柱穴S P22(第29図) E・F11・12地区で検出した隅丸方形の柱穴である。東西1.65m、南北1.4mを測り、検出面からの深さは1.0mである。埋土最上層は他の埋土と異なり、花崗岩の破片を包含していた。遺構の形態・規模と花崗岩破片の存在から、礎石の抜取痕の可能性がある。ただし、埋土下層は炭化物を含む特徴的なシルト層から構成され、根固めの礫はほとんど含まれていない。建物の柱穴とすれば、恒常的な使用を目的としない性格の建物と推測される。

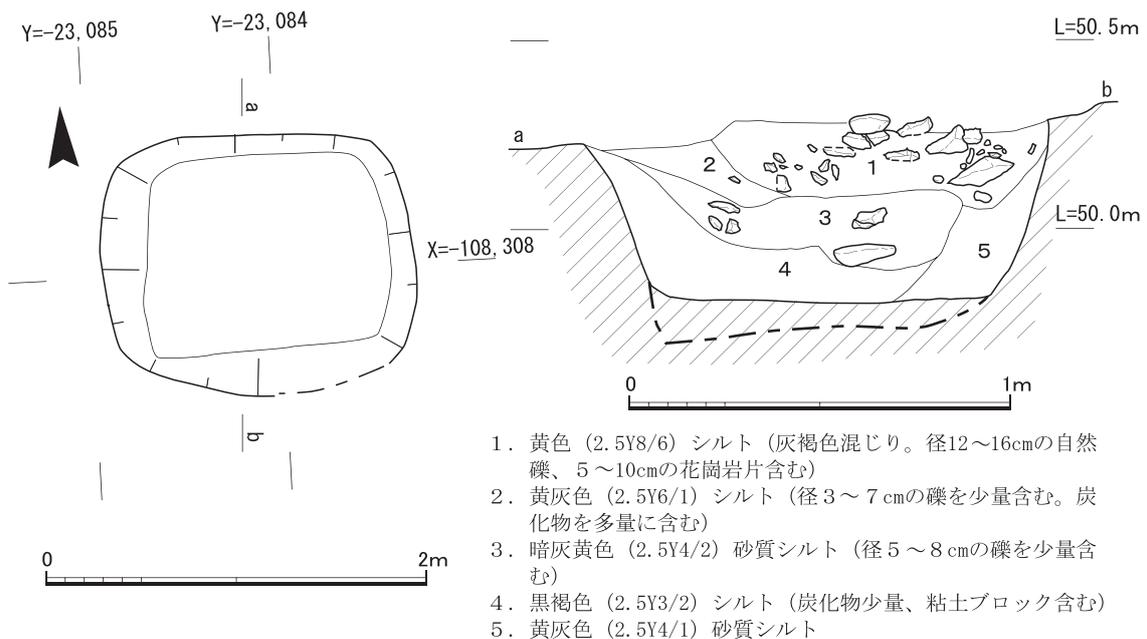
土坑S K25(第30図) G11で検出した円形の土坑で、東西0.85m、南北0.75mを測り、検出面

からの深さは0.35mである。埋土最上層には0.35×0.2m、0.2×0.15mの礫が土坑中央部に置かれている。礫の直下から最下層までは、土師器皿30点以上を中心に、肥前陶器(唐津)皿、鉄釘等が少量出土した。最上層の礫は土師器、陶器の廃棄と一連の儀礼に伴って据えられた可能性が高い。埋土の第2・3層は黄色系の粘質シルトで、第4層以下には炭化物が一定量含まれている。

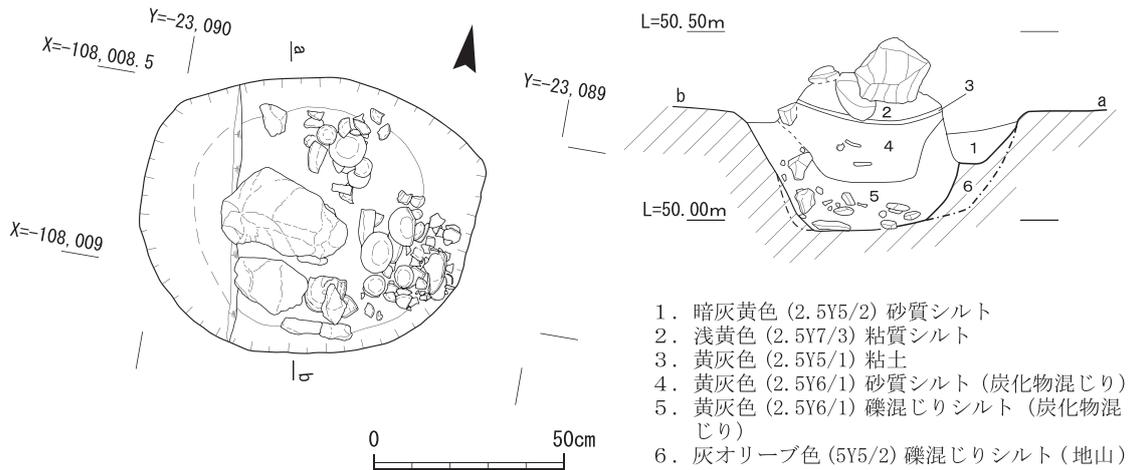
なお、柱穴S P22と土坑S K25は埋土が黄色系シルト、炭化物を含有する点で、近辺で検出した他の遺構とは際立って異質な共通性を持つ。この点から、両遺構の性格も近似したものと推測される。S K25出土遺物の時期から、調査地周辺が町屋域と化す寛永年間以前と推定される。

土坑S K75(第31図) D9地区で検出した。東西0.95m、南北0.6mの土坑で、検出面からの深さは0.15mである。上面が削平を受けているために平面形態は安定しない。土坑内からは土師器皿が計16点以上、廃棄された状態で出土した。埋土はシルトで、全長10~30cmの大型の垂角礫が含まれる。この付近の自然堆積層に含まれる礫のようである。

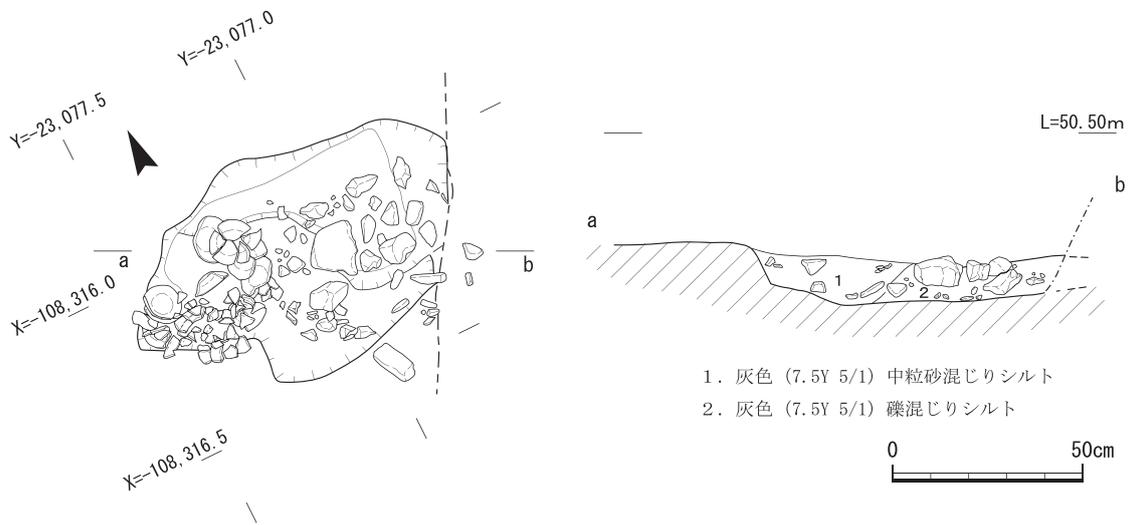
土坑S K10(第32図) 南北9.3m、東西13.3m、検出面から土坑底までの深さが2mの、長方形大型土坑である。なお、当初はS K05・10を別遺構としたが、その後同一遺構と判明したので、報文ではS K10に統一する。S K10の東辺と西辺は直線状に伸びるが、南辺は2mの一定間隔をおいて小さく折れ曲がりながら東西に伸びている。土坑内部から南壁面を観察すると、折れ曲がる部分が、垂直方向に土坑壁に切り込まれたように見える(第8図)。S K10がこのような特異な構造の土坑であり、そして遺構の位置が聚楽第本丸南濠の想定地点と近いことを考慮し、当初は濠本体か、聚楽第関連施設の可能性を想定した。しかし、S K10を半裁して土層を観察すると(第30図)、埋土はブロック質で締りが弱く短期間で埋没したと推定される。出土遺物の多くは安土桃山時代とそれ以前に帰属するものであるが、江戸時代前期の遺物も一定量含まれていた。また、S K10の南に隣接して聚楽第本丸の石垣S W105が構築されており、石垣の強度を弱体化させる



第29図 柱穴S P22平・断面図(S=1/20・1/40)



第30図 土坑 S K 25平・断面図(S=1/20)



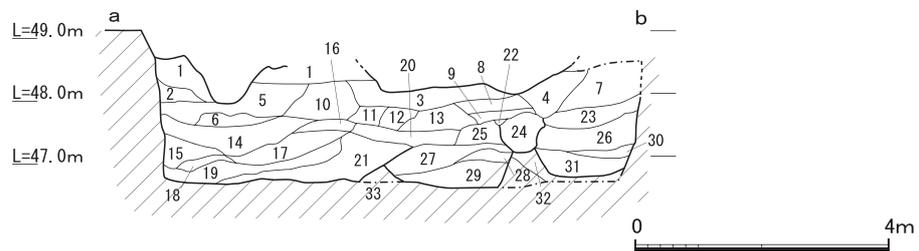
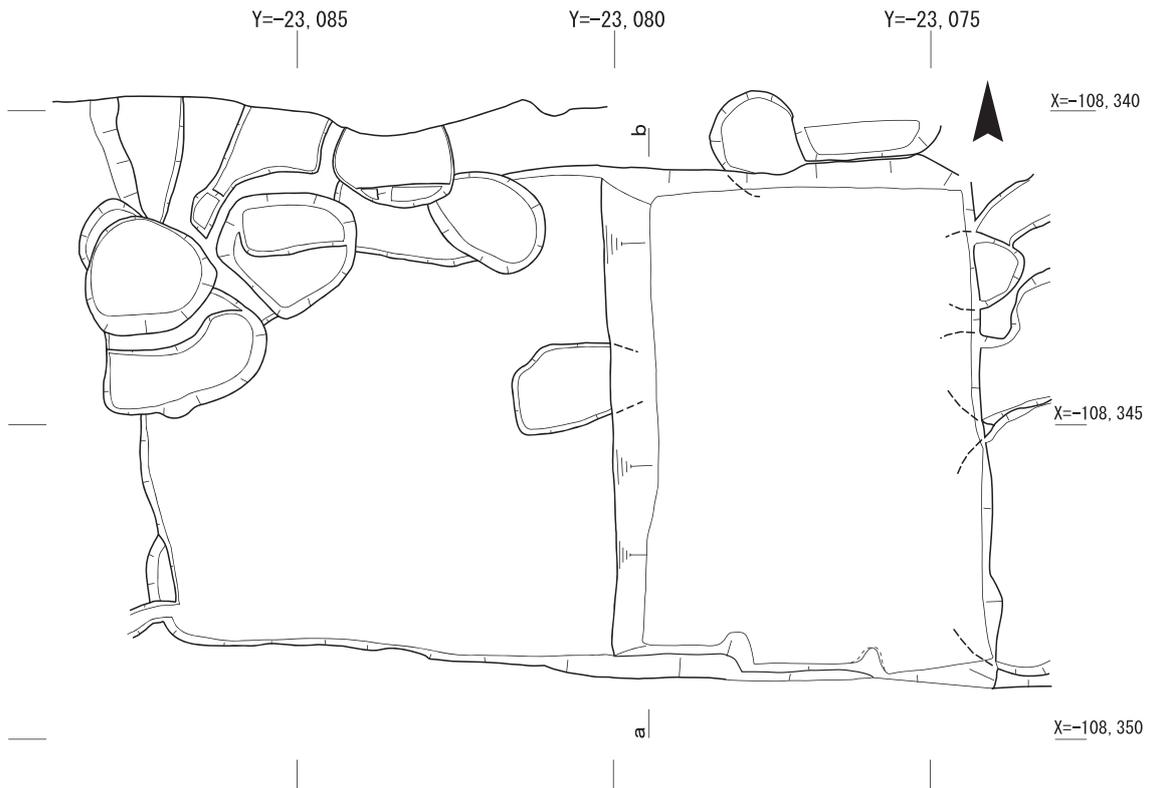
第31図 土坑 S K 75平・断面図(S=1/20)

ような深い土坑を、石垣の裏側に隣接して掘削するとは想定しがたい。従って、聚楽第とは無関係の江戸時代前期の遺構と考えられる。

S K 10の土坑壁面は、地点によってほぼ直立するか、土坑上端が下端よりも土坑内側へせり出しており、長期間の開口には不向きな形状である。S K 10の埋土中に含まれる遺物の数量は、土坑の規模のわりには少なく、埋土中に有機物がほとんど含まれていないことから、廃棄土坑とは想定しがたい。また、S K 10の掘削は地山の黄褐色粘土層、いわゆる「聚楽土」の堆積層の最下面まで掘り抜いた深度で止まっている。以上の状況から、S K 10は聚楽土の採掘土坑と考えられる。

当調査地点では、この他にも聚楽土採掘坑と考えられる遺構がS K 10の東西に複数重複して分布する。これらの聚楽土採掘坑は直径1～2mの円形の土坑群で、S K 10とは形態、規模が大きく異なる。検出状況からはS K 10が最も古い。

この他に、下記の江戸時代前期の遺構を検出した。



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰黄色 (2.5Y6/2) ブロック質シルト(径10~60mmの礫を多量に含む) 2. 黄褐色 (2.5Y5/3) 礫混じりシルト 3. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト(礫混じり) 4. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト(礫混じり) 5. 黄褐色 (7.5Y5/3) ブロック質粘土質シルト 6. 灰色 (7.5Y5/1) 砂質シルト 7. 灰色 (7.5Y5/1) シルト(礫を少量含む) 8. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト質粘土(炭化物含む) 9. 灰色 (N5/) 粘土(黄褐色ブロック含む) 10. 灰黄色 (2.5Y6/2) 礫混じりブロック質粘土(固くしまる) 11. 黄褐色 (2.5Y5/3) ブロック質粘土 12. 黄灰色 (2.5Y5/1) ブロック質粘土 13. 灰色 (N5/) 礫混じりシルト 14. 灰色 (5Y5/1) 礫混じり砂質シルト 15. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 礫混じり砂質シルト 16. 灰色 (7.5Y5/1) ブロック質シルト | <ol style="list-style-type: none"> 17. 灰色 (7.5Y5/1) ブロック質粘土(黄褐色粘土ブロック多量2/3) 18. 青灰色 (5BG6/1) ブロック質粘土 19. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 礫混じりシルト 20. 灰色 (7.5Y5/1) 礫混じりブロック質シルト 21. 灰色 (N4/) 礫混じりブロック質粘土 22. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘土 23. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 礫混じりシルト 24. 灰色 (N4/) 粘質シルト(礫・黄褐色ブロック含む) 25. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 礫混じりブロック質シルト 26. にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト質粘土(礫混じり) 27. 灰色 (7.5Y4/2) 礫混じりブロック質シルト(黄褐色ブロック多量に含む) 28. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト質粘土 29. 灰色 (N4/) シルト質粘土(ややブロック質) 30. 明黄褐色 (2.5Y6/6) シルト質粘土 31. 灰色 (10Y5/1) 粘土(径5~2mmの礫をやや多く含む) 32. オリーブ黄色 (5Y6/4) シルト質粘土 33. 緑灰色 (10GY6/1) シルト |
|--|---|

第32図 土坑 S K10平・断面図(S=1/120)

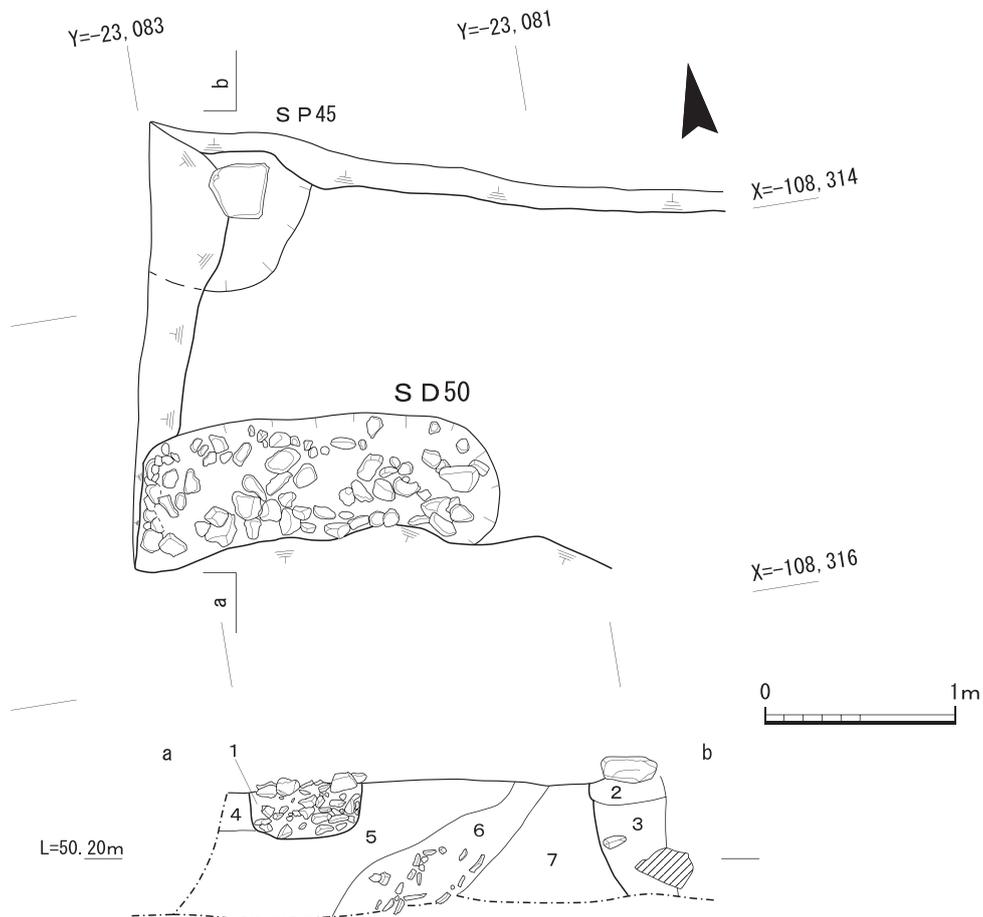
井戸 S E 01 トレンチの南東端付近のB・C1地区に位置する江戸時代前期の井戸である。南北1.5m、東西1.35mを測る。検出面から2m掘り下げた段階で大量の湧水に見舞われたために、安全を考慮して掘削を中断した。S E 01からは大量の遺物が出土しているが、一点のみ聚楽第所用の金箔押の軒平瓦が混入品として出土した。

土坑 S K 42 D10地区の東西1.3m、南北1.4mの円形土坑で、遺構面からの深さは0.6mである。

土坑 S K 44 D9・10地区の東西1.5m、南北の残存長1.0mの円形土坑で、遺構面からの深さは0.45mである。

土坑 S K 88 D6地区で検出した。トレンチ内での検出範囲は一部であるが、方形土坑と推測される。トレンチ内の規模は東西1.0m、南北0.7mで、遺構面からの深さは0.35mである。平面形態・規模から柱穴の可能性もある。

土坑 S K 101 D8地区の東西2.0m以上、南北3.3mの不定形土坑で、遺構面からの深さは0.45mである。廃棄土坑の可能性はある。



1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト (礫を多量に含む。S D 50 埋土)
2. 淡黄色 (2.5Y8/3) 粘土 (固く締まる S P 45 埋土)
3. 黄灰色 (2.5Y 5/1) 礫混じり砂質シルト (瓦片含む。S P 45 埋土)
4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト (炭化物混じり。S K 83 埋土)
5. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト (炭化物・礫混じり。S K 83 埋土)
6. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質シルト (礫・炭化物・陶磁器・瓦多量に含む。S K 83 埋土)
7. 灰白色 (2.5Y7/1) 礫 (粘土混じり。S K 83 埋土)

第33図 礎石 S P 45、溝 S D 50平・断面図(S=1/40)

土坑 S K 120・125 I6 地区の重複する土坑 2 基である。時期の新しい S K 120は東西1.6m、南北1.1mの隅丸方形の土坑で、遺構面からの深さは0.8mである。遺構下端の四隅に径0.1mの小ピットを有する。S K 125は方形の土坑と考えられ、残存規模は東西1.3m、南北0.8m、遺構面からの深さは0.35mである。

今回の調査では、江戸時代前期から中期にかけての遺構が最も多く検出された。今回の報告では詳細は省略するが、町屋域に伴う廃棄土坑、井戸が主で、当時の生活に伴う活発な土地利用が窺える。しかし、江戸時代後期になるとこの様相は一変し、出土遺構は希薄となる。

礎石 S P 45・溝 S D 50 E 10地区の礎石および溝である。現代建築物に伴う攪乱が著しく特に S D 50はごく一部しか残っていないが、東西2.0m以上、南北0.7m、深さ0.3mで、埋土内には径5～10cmの礫が底部まで充填されている。S P 45は東西0.5m以上、南北0.7m以上の礎石据え付け跡で、一辺0.3m、厚さ0.15mの花崗岩製礎石が据えられている。礎石直下の第2層は固く締まっている。S P 45・S D 50の下層には多量の瓦、陶磁器を含む廃棄土坑 S K 83が検出されており、廃棄空間から雨落溝の附属する礎石建ち建物へ景観が一変したことを示している。

(古川 匠)

4 . 出 土 遺 物

出土遺物は、平安・鎌倉時代、戦国時代、安土桃山時代(聚楽第前後)、江戸時代前期、江戸時代中期以降の5期に大別される。以下、時代順に遺構ごとに主要な遺物を記述する。

1) 平安・鎌倉時代(第34図)

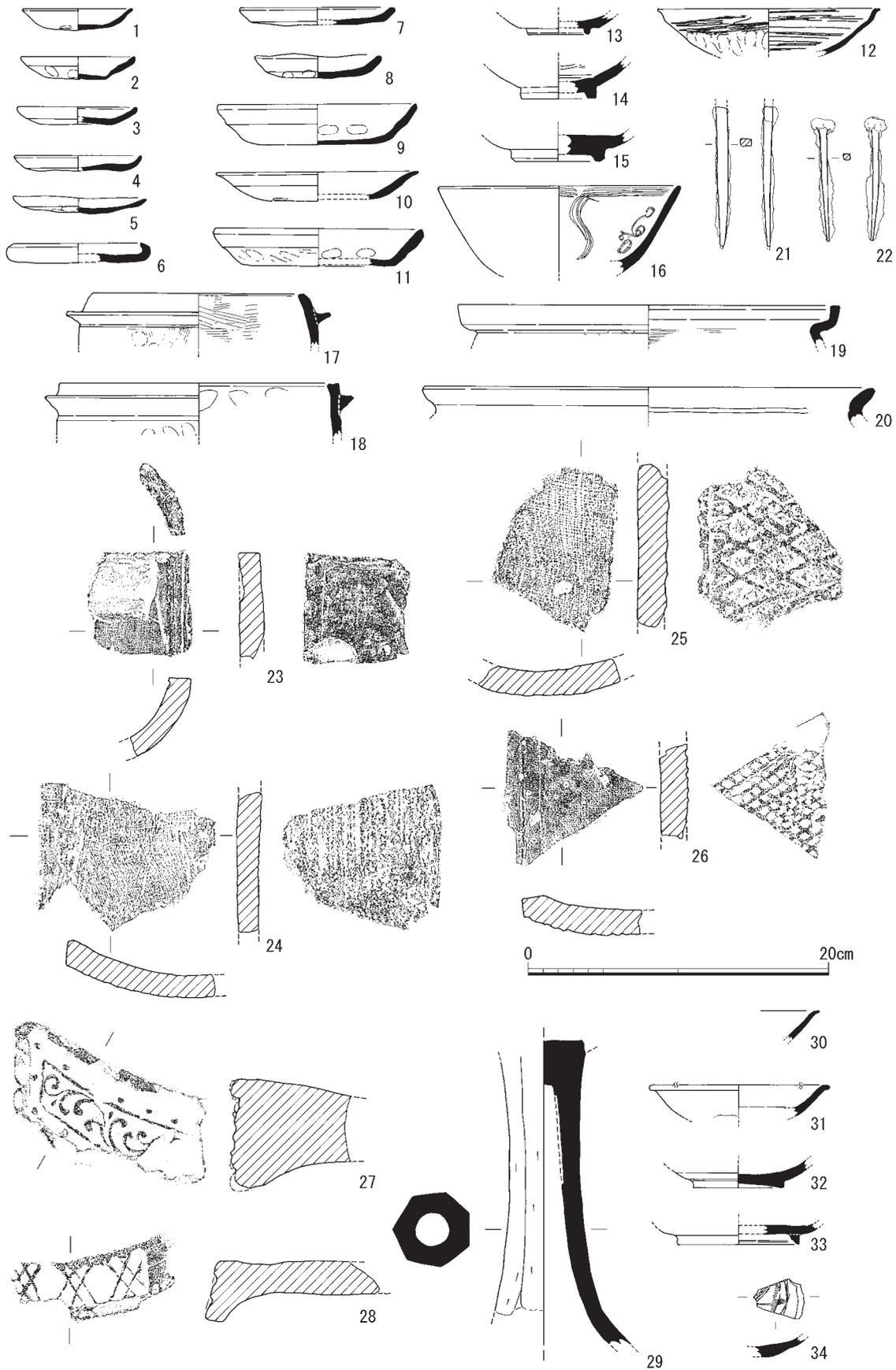
平安時代の遺構はないが、包含層や後世の遺構から、若干の遺物が出土した。27は平安時代前期の軒平瓦である。土師器高杯(29)や緑釉陶器片(30～33)とともにこの地が平安宮跡であることを物語る資料である。また、28は平安時代後期の軒平瓦である。

鎌倉時代の遺構として、わずかに S K 33(13世紀後半)と S K 85(14世紀)が挙げられるが、良好な資料は少ない。ここでは土師器皿・須恵器鉢など数点のみ示した。

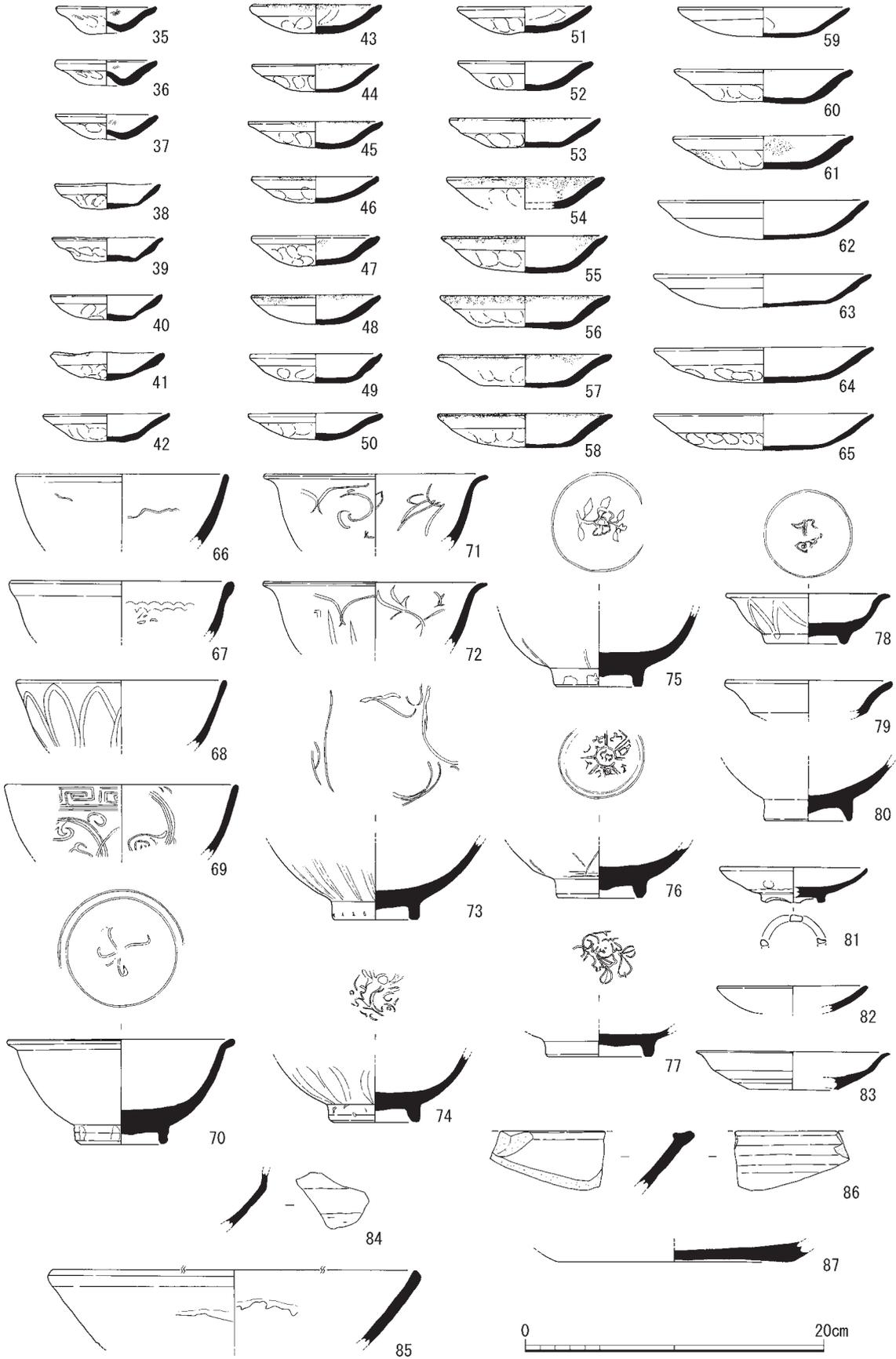
2) 戦国時代(第35～38図)

多くの遺物が出土した重要な遺構として S K 60と S E 90がある。また、同時期の遺物が S K 30・80から出土した。大量の土師器皿、瓦質土器各種(羽釜・鍋・火鉢)、備前の播鉢があり、これに中国製青磁(椀・皿・盤)や白磁(椀・皿)および青花椀などが加わる。

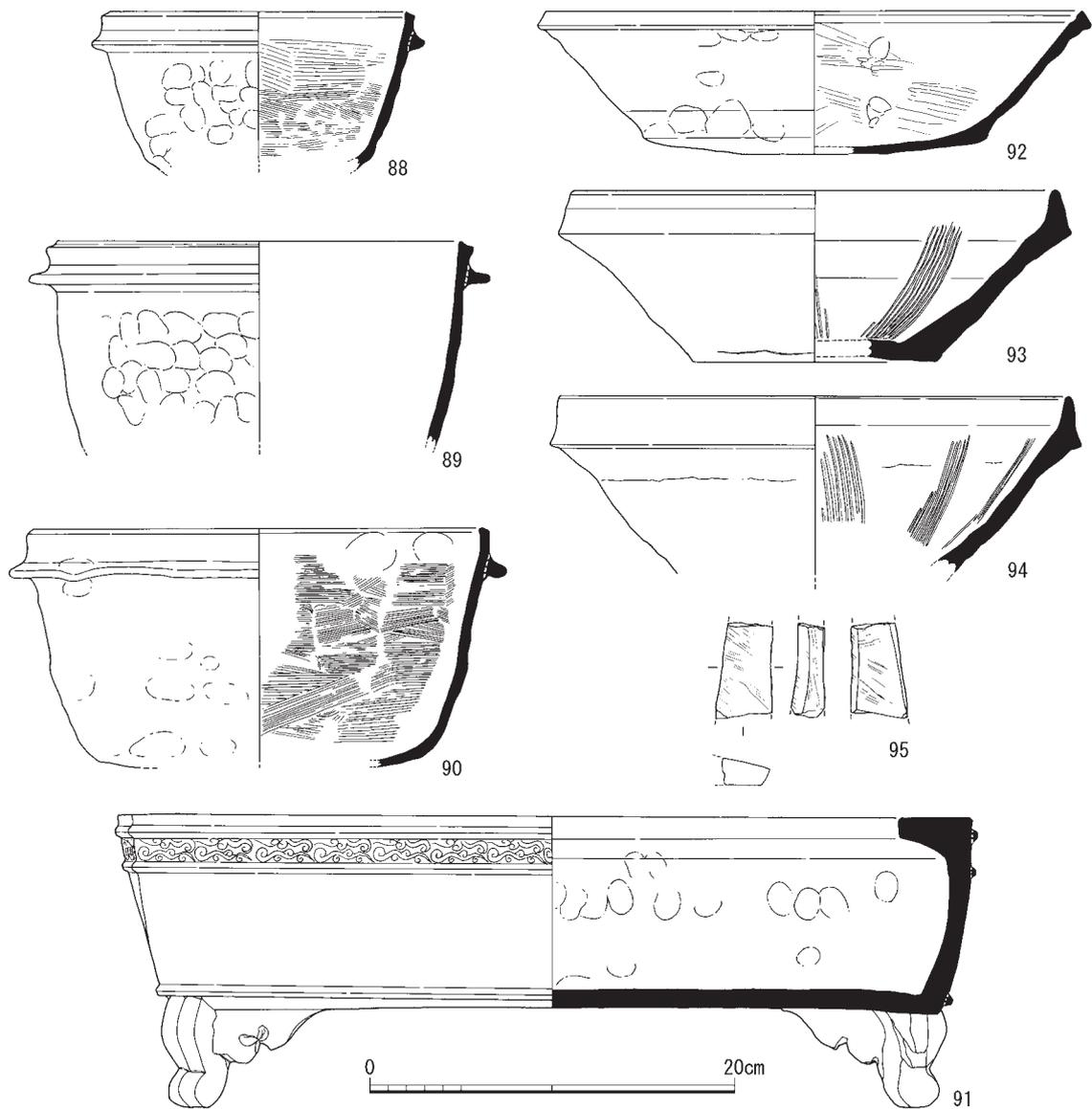
土坑 S K 60 35～65は土師器皿である。直径で小・中・大に分けられるが、伊野分類 I タイプ(注28)の小が大多数を占める。退化したへそ皿(Gタイプ)も一定量ある。色調には白色・赤色がわずかにあり、不整形の褐色系が一定量が見られるほかは、大半が淡い赤色を呈する。土師器皿から見る埋没年代は15世紀末から16世紀初頭である。66～77は青磁椀である。68・75・76は外面に輪郭線のみで幅広の蓮弁文を施す。77は76と同様に高台内を蛇の目釉剥ぎする。73と74はやや蓮弁の幅が狭く、鎬蓮弁の名残りと思われる。66・67・70はいずれも外面無文である。66は直口椀、70は端反り椀、67は玉縁状の口縁になっている。78・79は皿である。78は鎌倉時代に通有の罌皿



第34図 出土遺物実測図1 (平安・鎌倉時代 S=1/4)
 S K 85(1~26)、S K 10(29)、S K 60(27・30・34)、S E 90(31~33)、表土(28)



第35図 出土遺物実測図2(土坑S K60 ① S=1/4)

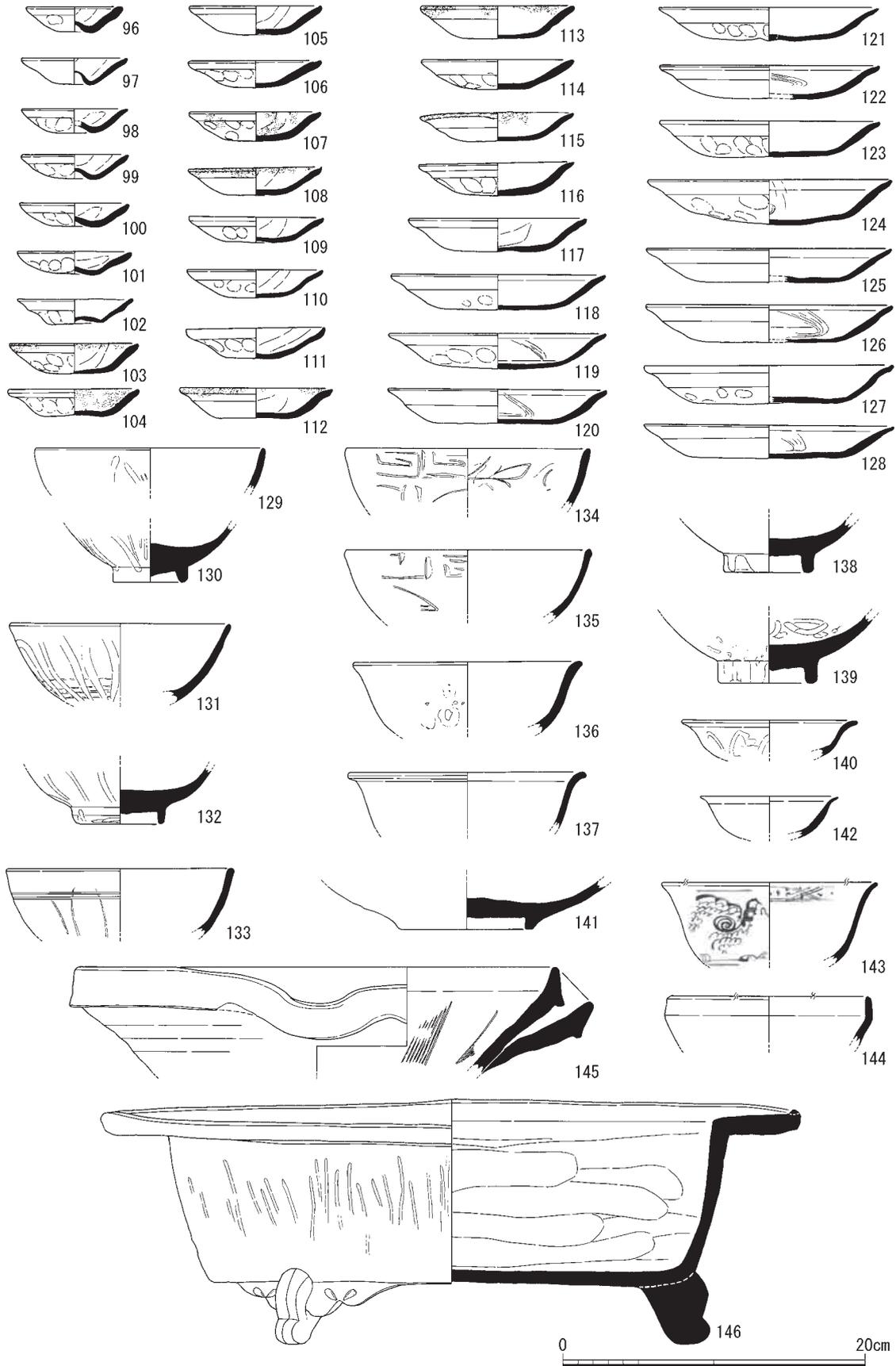


第36図 出土遺物実測図3(土坑SK60 ② S=1/4)

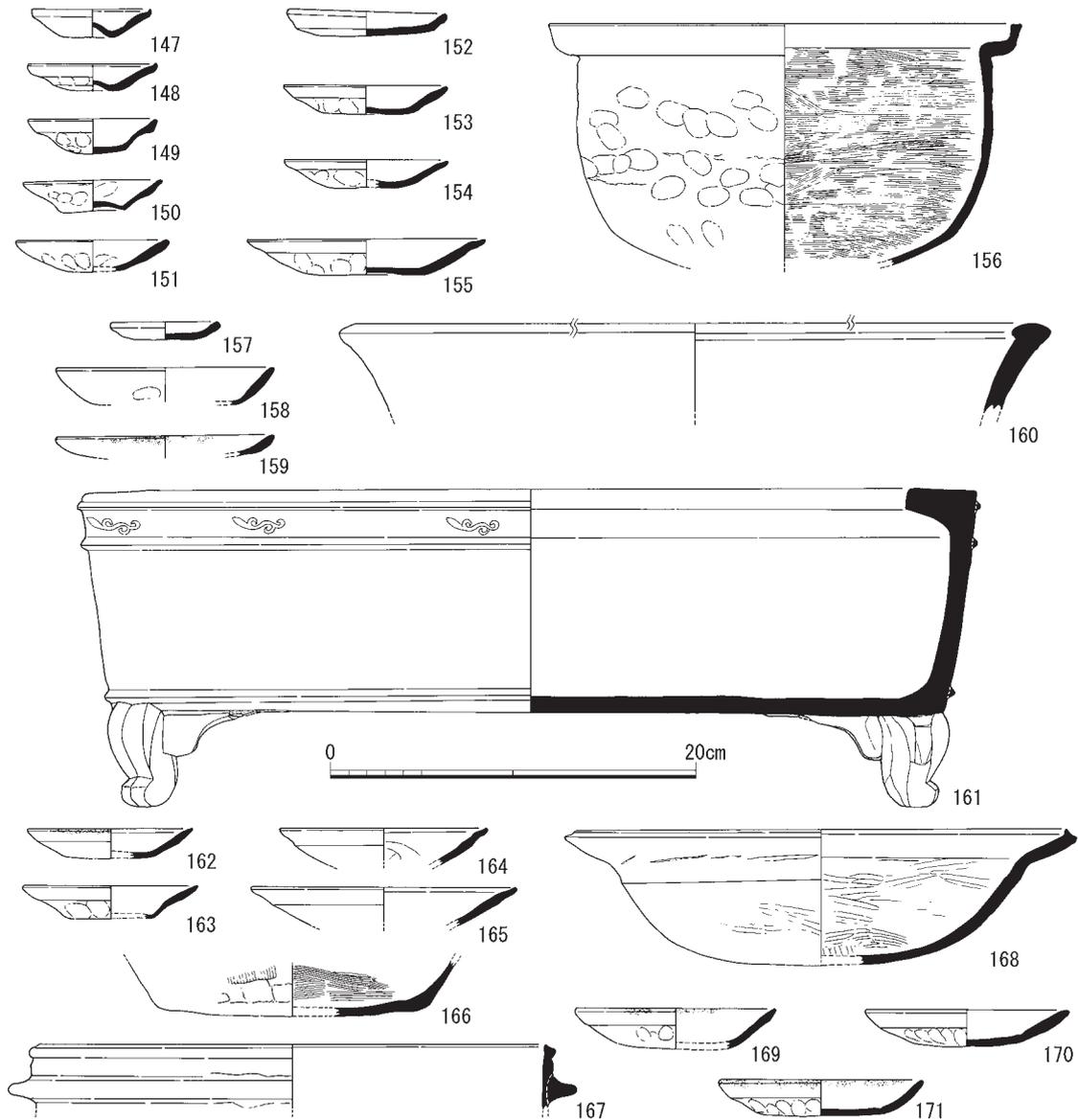
の末期的な形態で、14世紀後半から15世紀前半にかけてのもの^(注29)とされている。外面に蓮弁文を描き、見込みに印魚文を押す。高台内部は蛇の目釉剥ぎである(図版第39)。79は稜花皿である。口縁部内面に草花文は見られない。

80~83は白磁である。80は白磁椀で、高台内部と畳付は無釉である。皿はいずれも15世紀のもので、81・82は森田分類^(注30)のD群、83はE群とされるものである。81は割り高台である(図版第39)。D群の小皿は雷文帯の青磁椀(69参照)と共伴することが知られている。91は奈良火鉢^(注31)で浅鉢VIに分類されているものである。

井戸SE90 この井戸からも夥しい数の遺物が出土した。96~128は土師器皿である。伊野分類のIタイプが主体で、退化したへそ皿(Gタイプ)が残る。色調は上述のSK60と大差ない。土師器皿から見る歴年代は16世紀前半である。129~139は青磁椀である。130には幅広の蓮弁文が



第37図 出土遺物実測図4 (井戸 S E 90 S=1/4)



第38図 出土遺物実測図5(戦国・安土桃山時代 S=1/4)

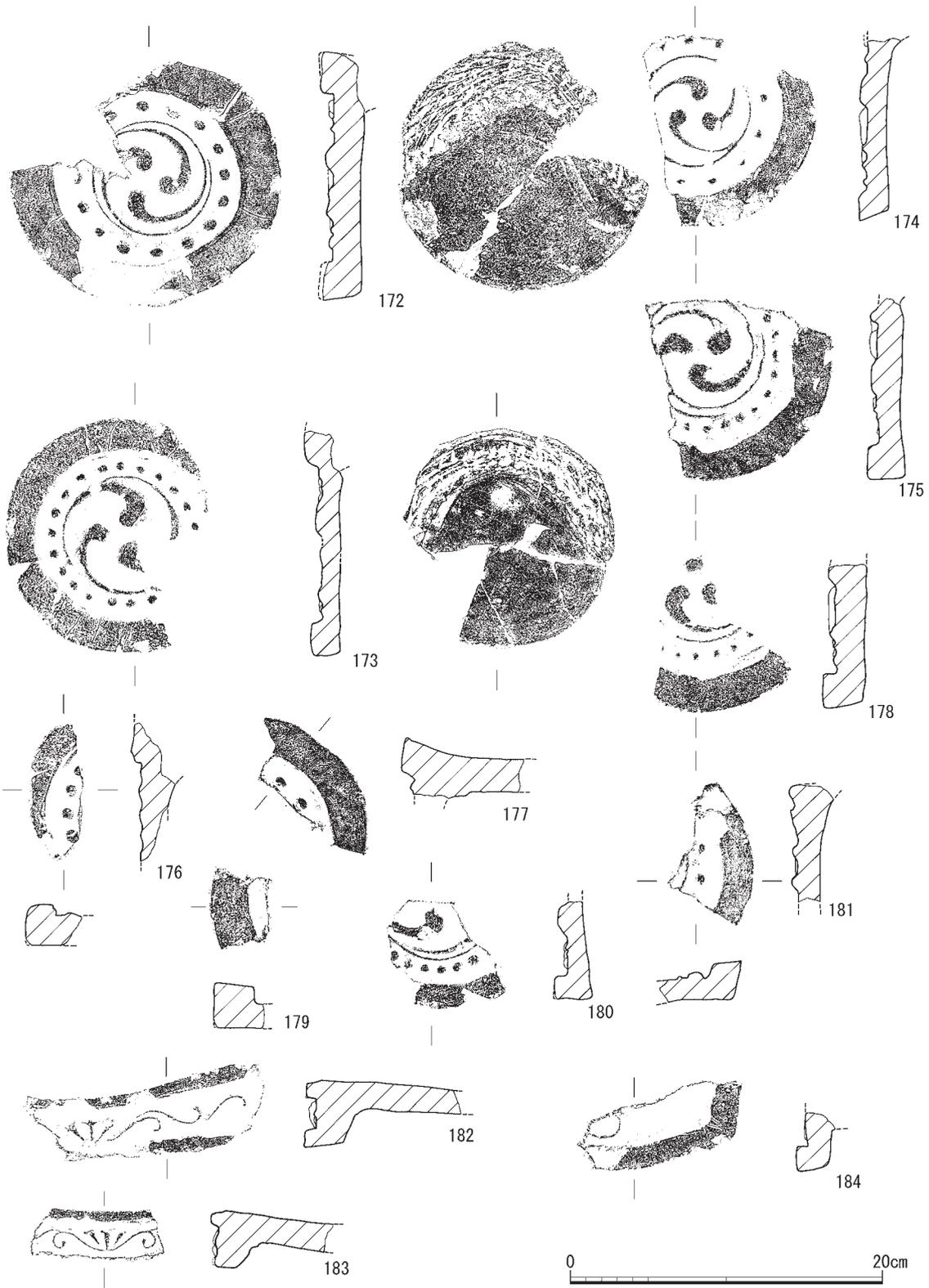
S K 80(147~156)、S K 70(157~160)、S K 30(161)、S X 55(162~167)、S K 38(168~170)、S K 26(171)

施され、高台の畳付まで施釉される。134・135は外面に雷文とラマ式蓮弁文を施す。134は内面にも草花文が見られる。136~139は無文の椀で、138・139の高台内に蛇の目釉剥ぎが見られ、136・137の口縁部は外反する。140はS K 60の78と同様の鍔皿である。142は白磁の皿である。143は15世紀明代の青花椀である。この井戸からも奈良火鉢(146)が出土した。浅鉢Vに分類されるが、口縁は内湾せず、鍔のように外方へ水平に伸びる。

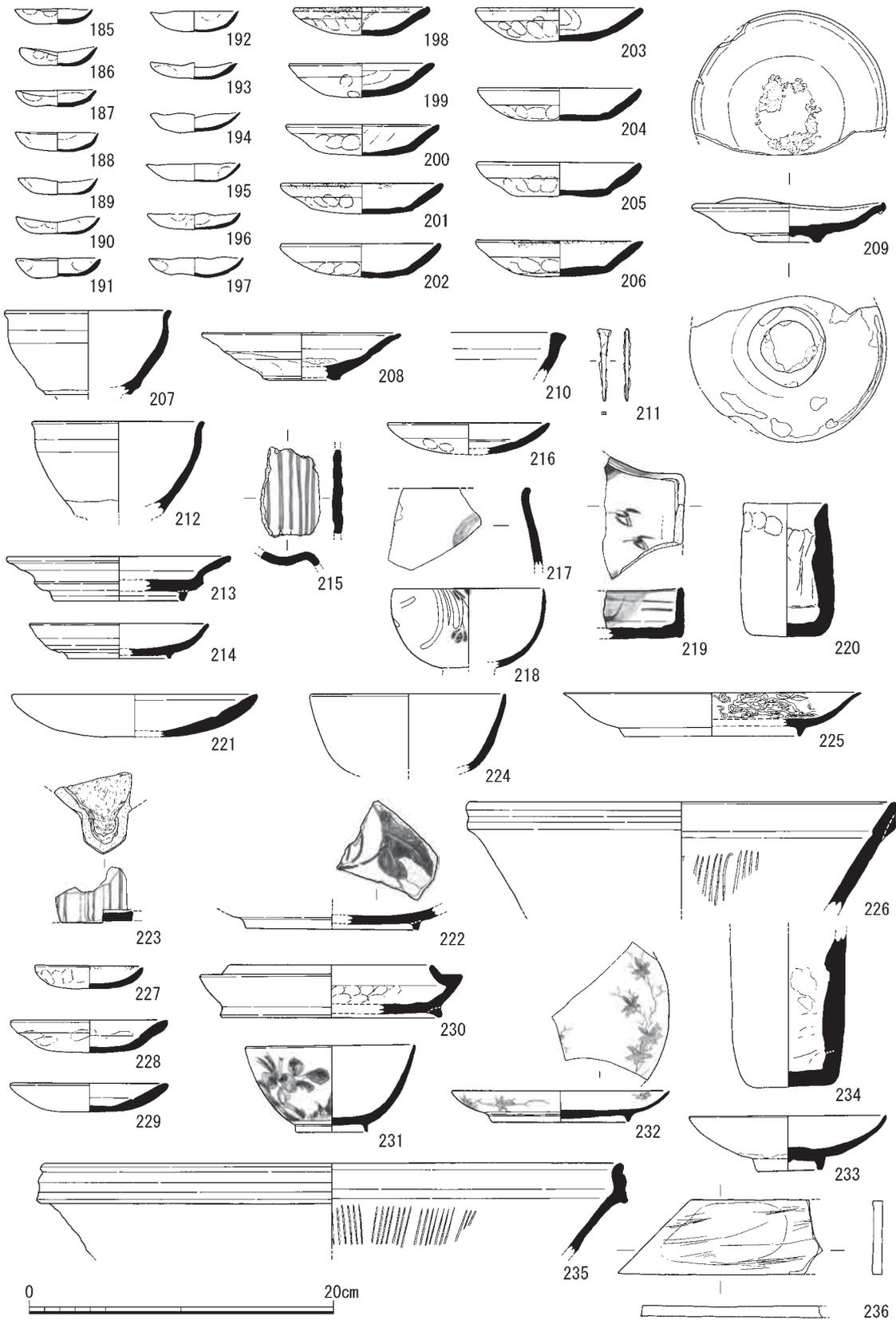
土坑S K 30 この遺構からも瓦質の火鉢(161)が出土した。約半分が残る。S K 60出土の91と同形であるがやや大きく、長辺48.8cmを測る(図版第39)。

土坑S K 80 土師器の皿がやまとまって出土した。

以上の遺構はいずれもほぼ同時期と見られる。土師器皿から埋没年代は15世紀末から16世紀前半に位置づけられるが、この時期に共伴する細弁文椀や稜花皿などの青磁はほとんど見られない。



第39図 出土遺物実測図6 (安土桃山時代 軒瓦 S=1/4)



第40図 出土遺物実測図7(江戸時代 ① S=1/4)

S K 25(185~211)、S K 42(212~215)、S K 44(216~220)、S X 101(221~226)、S E 01(227~236)

逆に15世紀前半～中頃の青磁や白磁が多い。

3) 安土桃山時代(聚楽第前後)(第38・39図)

聚楽第造営に伴う造成層 S X55から遺物の小片が若干出土しており、安土桃山時代(16世紀後半ないし第4四半期)と見られる。

瓦類 聚楽第本丸南濠 S X110からの出土遺物の大半は聚楽第に葺かれていたと見られる瓦類(軒丸瓦172~181、軒平瓦182~184)である。軒瓦13点のうち金箔が確認できたのは7点である。確認はできていないが、軒丸瓦172と173は東濠出土例のそれぞれ43と38に近似し、軒平瓦183は東濠^(注33)21類と同範と思われる。

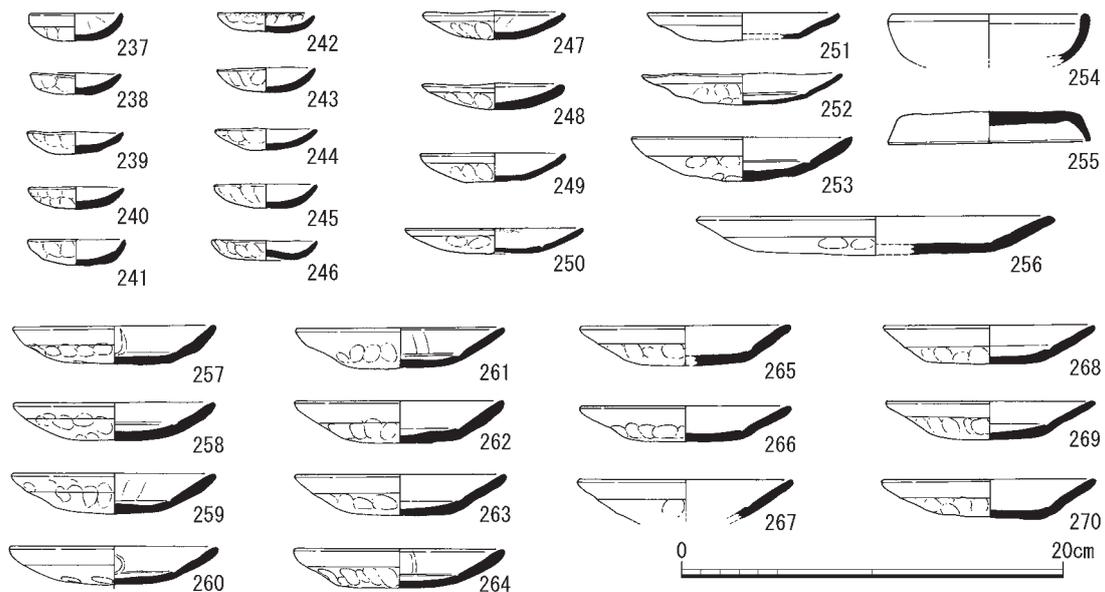
聚楽第の時期の土器としては、近世遺構から出土した土師器皿3点(169~171)が挙げられる。

4) 江戸時代(第40・41図)

ここでは聚楽第破却後の遺物として、17世紀の遺構から出土した遺物を報告する。S K79(18世紀後半)やS K86(19世紀前半、文化6(1809)年銘の遺物を含む)などの18世紀以降の遺構から夥しい土器・陶磁器類が出土したが、今回は割愛したい。宝暦から明和以降の時期の遺物である。

S K25 208と209は肥前陶器(唐津)の皿である。いずれも見込みに砂目が残る。185~206は土師器皿である。伊野分類のIタイプで、内面見込みの沈線が鋭いことから、17世紀第1四半期のものと考えられる。

S K42・S K44・S X101 いわゆる桃山陶磁が出土した。214は志野の丸皿、215は織部の筒向付、219は青織部の平向付の破片である。222は赤織部の皿である。鉄分の多い胎土が使われ赤褐色を呈し、鬼板と白泥で蕪文の絵付けをした後、全面に透明釉が施されている。223は平面形が扇形の筒向付と思われる。225は明代末期の白磁皿で、型押しの花文があしらわれている。これらの遺構はやや古い陶磁器も含むが、17世紀第2四半期～中頃に位置づけられ、今回の調査



第41図 出土遺物実測図8(江戸時代 ② S=1/4)
S K88(237~256)、S K75(257~270)

区北半に町屋ができたとされる寛永期と結びつけたところである。

S E01 染付の椀や皿がみられる。230は瓦質の燭台で、見込み中央に柱状脚をもつ受け皿が貼り付けられていたと見られる。

(小山雅人・伊野近富)

5. まとめ

1) 遺構・地形の変遷(第42～47図)

(1) 平安時代

調査地点は大内裏北東部に位置する「梨本院」の中央北よりの地点に相当する。後世の大規模な地形改変を被り平安時代の遺構は検出されなかったが、遺物が後世の遺構に混入している。特に土坑 S K60、濠 S X110からは軒平・軒丸瓦を含む平安時代の瓦が複数出土し、瓦葺の建物が近隣に存在したことを示唆する。

本調査トレンチは北部と南部で2m以上の高低差があり、I5地区では急激な段差を検出している。この段差は安土桃山時代の造成土 S X55が直上に堆積することから、形成時期は中世以前である。段差の位置は梨本院を南北に二分する地点にあたる。調査地を含む平安宮跡の所在地は数十万年前に形成された万池谷累層で構成される安定した地盤の丘陵で、これまでの発掘調査成果および現地表面の起伏から平安宮は南から北へひな壇状に、何段かの段差を経て標高が上がって行く地形であることが判明している。当地点の段差もこの一部の可能性がある。



第42図 遺構変遷図(鎌倉～室町時代 S=1/500)

(2) 鎌倉～室町時代(第42図)

文献・都市史学の研究成果を参照すると、鎌倉時代前半に大内裏が焼亡して以降の調査地点は、大宿直跡から梨本院跡にかけて展開した都市民の集住域に含まれるようである。今回の調査で検出したこの時期の遺構は、13世紀後半の土坑 S K33、14世紀代の土坑 S K85、15世紀代の土坑 S K104である。各土坑からは土師器、陶磁器、瓦質土器、須恵器、鉄釘等の雑多な遺物が出土しており、遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。S K85・104は、調査地点の東に隣接する櫛笥通(現在の日暮通にほぼ相当)から40m西、北に隣接する土御門大路(現在の土上長者町通)から約30m南の地点で、重複して検出した。各遺構の位置が櫛笥小路および土御門大

路に対して間口を向ける町屋の裏手にあたることから、数世代にわたって営まれた都市空間の居住域に伴う廃棄土坑の可能性がある。

(3) 戦国時代(第43図)

応仁・文明の乱によって住民が離散するため、調査地点は戦国時代の上京・下京といった都市域から外れるが、土御門通(現在の長町通)をはさんだ調査地点の北側に「戒浄院」が面する等、この時期の調査地点の周辺は主殿寮領として複数の寺庵が営まれている。

調査トレンチでは15世紀末から16世紀前半の遺構が数多く、土坑 S K 30・60・70・80および井戸 S E 90を検出した。土坑 S K 60・井戸 S E 90からは大量の遺物が出土し、特に井戸 S E 90からは大量の土師器皿が出土した。土坑 S K 60、井戸 S E 90の出土陶磁器類には優品が含まれ、また S K 40・60、S E 90からは、スタンプ文をもつ大型の大和産瓦質火鉢が数点出土した。この種の瓦質土器は、消費地の検討から領主居館や寺社で用いられたことが知られ、本調査地点周辺の土地利用のあり方を示す可能性がある。調査地点の位置は当時の京都の都市域から離れること、S E 90に土師器皿の大量廃棄が見られ出土遺物の組成がやや特殊なことから、調査地周辺は一般的な都市民の居住域とは想定しがたい。遺構の性格を明確に示す遺物は出土しなかったが、隣接する「戒浄院」等の寺院に関連する施設が存在した可能性がある。

(4) 安土桃山時代(第44図)

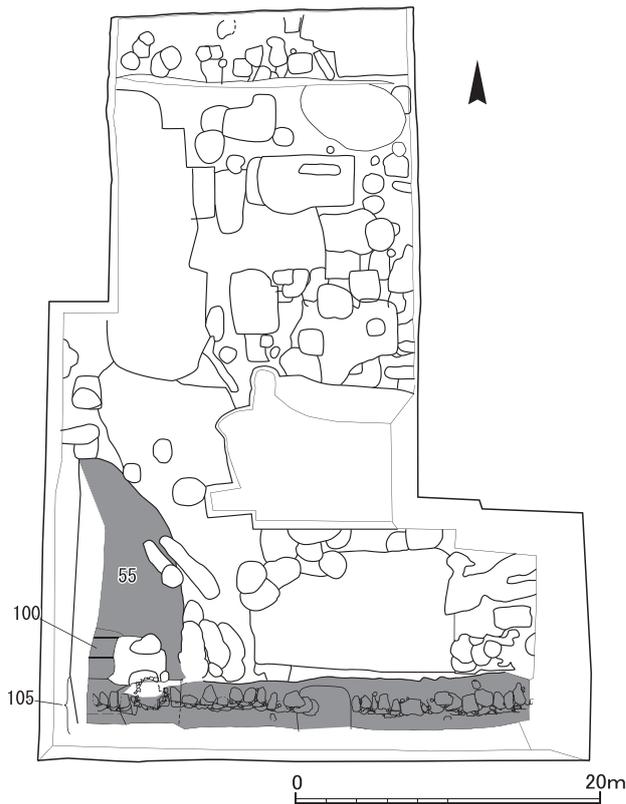
豊臣秀吉によって造営された聚楽第の存続期間は極めて短い、この間になされた造成工事、破却は極めて大規模と想定される。

本調査地点は聚楽第本丸南端の、本丸中心軸からやや西側に位置する。この時期の遺構は、造成層 S X 55、盛土 S X 100、石垣 S W 105、本丸南濠 S X 110で、本丸南濠・南辺石垣の関連遺構に限られる。遺構は標高の低いトレンチ南部に集中し、本丸内部にあたるトレンチ北部では全く確認できなかった。

本丸南濠に接する石垣 S W 105の北側には、石垣 S W 105と対をなす石垣の存在が推定されるが、痕跡さえも確認されなかった。また、前後の時期と比べると聚楽第の時期の遺物は極めて少なく、ほとんどが濠 S X 110の埋土内から出土している。ちなみにトレンチ内には聚楽第破却直後の時期の遺構が良好に遺存することから、江戸時代以降の大規模な削平は想定しがたい。



第43図 遺構変遷図(戦国時代 S=1/500)



第44図 遺構変遷図(安土桃山時代 S=1/500)



第45図 遺構変遷図(江戸時代前半 S=1/500)

以上の状況から、聚楽第の地表面の標高は前後の時期よりもかなり高かったが、文禄4(1595)年の聚楽第破却に伴って大規模に削平されたと推定される。『日本西教史』には、聚楽第の破却について「一字も残さず、基礎に至るまで悉く毀たしめ^(注35)」と記述されている。本調査地点の状況はこの記述内容を示すものと考えられる。

(5) 江戸時代前半(第45図 ただし中期の遺構は省略)

聚楽第破却後、寛永年間に至るまで聚楽第跡地は芸能の場として活用されたことが知られている。^(注36)江戸時代前期の洛中洛外図屏風には聚楽第跡地で歌舞伎が演じられる様が描写され、また、僧梵舜の記した『梵舜日記(旧舜記)』には慶長年間に「聚楽屋敷」で能を見物した記事が見られる。

調査地点では柱穴S P 22、土坑S K 25を検出した。S P 22、S K 25は埋土の特徴から一連の遺構の可能性が高い。特に、S K 25には土師器皿が集中して廃棄され、何らかの儀礼に伴う遺構と考えられ、この時期の調査地周辺が、上記の文献や絵画資料に記される特殊な空間であったことを示唆する遺構である。

調査区南端の聚楽第本丸南濠S X 110は聚楽第破却時に埋め戻され、調査区南西部では石垣S W 105および造成層S X 55の直上にグライ化した青灰色土層が堆積している。特に最も標高の低い調査区南西端には青灰色粘土層が堆積している。濠の埋没に伴い、もともと旧地形の標高が低かった南西部は湿地帯と化したようである。

寛永年間以降、江戸幕府は聚楽第跡地への町人の居住を許可し、調査地点も町屋域

に含まれるようになる。

当該期の遺構は、トレンチ全域にわたって分布し、特に中期の遺構が突出して多い。トレンチ北部(D11・12～H11・12地区)では大型の遺構は少なく柱穴が点在するだけである。調査地点北側の上立売通に面する町屋に伴うものであろう。本来地表面の標高が高かったことと相まって大規模な攪乱が少ないため、遺構は比較的良好に遺存している。トレンチ中央部から北部の東より(D～F6～12地区)では、この時期の廃棄土坑、井戸等が密に重複して検出される。町屋の裏手にあたるためであろう。

トレンチ中央部南よりの一帯では様相が異なる。東部(D～F4～6地区)では大規模な攪乱によって遺構が完全に削平されている。中部～西部(G・H4～6地区)は東部よりも自然堆積層の残りが良いが、戦国時代の井戸S E90を含め数基の井戸しか検出していない。自然堆積層の残りが最も良い西端部(I5～7)では、比較的浅い土坑が良好に遺存している。したがって、西端部の遺構検出面が本来の自然地形上面と考えられる。

トレンチ南部(B1～I3地区)では、聚楽土採掘土坑や井戸が集中する。土坑の重複状況から、最も古い粘土採掘坑は土坑S K10である。17世紀後葉に比定されるS K10は、他の聚楽土採掘坑より突出して規模が大きく形態も異なり、組織的な聚楽土の採掘を示唆する遺構である。S K10の掘削を契機とし、その後、繰り返し聚楽土の掘削が為されたようである。水がたまり居住に適さないこの一帯は、粘土採掘には適した空間だったのであろう。

(6)江戸時代後半(第46図)

大和郡山藩の柳沢家京屋敷が調査地点を含む一帯に新たに造成される。京屋敷の遺構の可能性があるのは、E10地区で検出した礎石S P45、礫が充填される溝S D50である。両遺構は、江戸時代中期の廃棄土坑S K83を切り込んで形成されることから町屋域廃絶後と考えられ、京屋敷の建物跡および雨落ち溝と推定される。また、トレンチ南部は聚楽第廃絶後、長期にわたり低地であったが、大規模な造成作業によって埋められ、平坦な地形に整地される。この上面から掘削されるH1地区の井戸S E111は出土遺物から江戸時代中期以降と考えられる。埋め立てに想定される大量の人力から、この造成も柳沢家京屋敷に伴う可能性が高い。

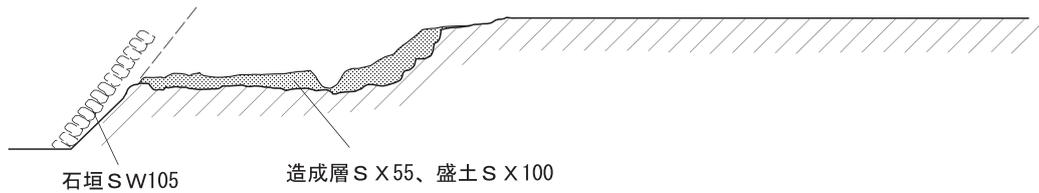


第46図 遺構変遷図(江戸時代後半 S=1/500)

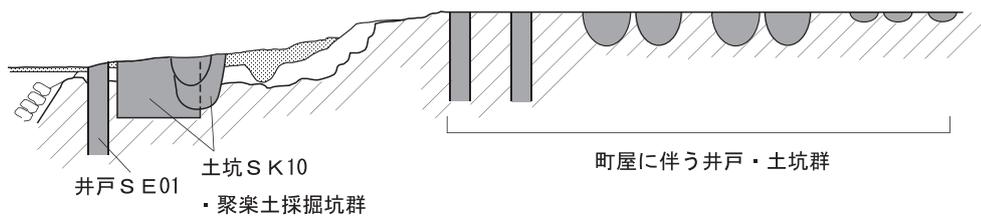
〔平安～戦国時代〕



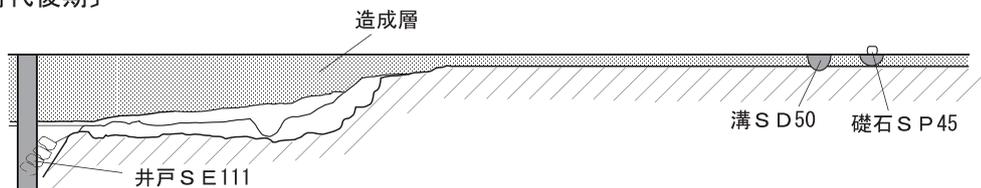
〔安土桃山時代（聚楽第）〕



〔安土桃山（聚楽第破却後）～江戸時代中期〕



〔江戸時代後期〕



第47図 地形変遷復原図(平安～江戸時代)

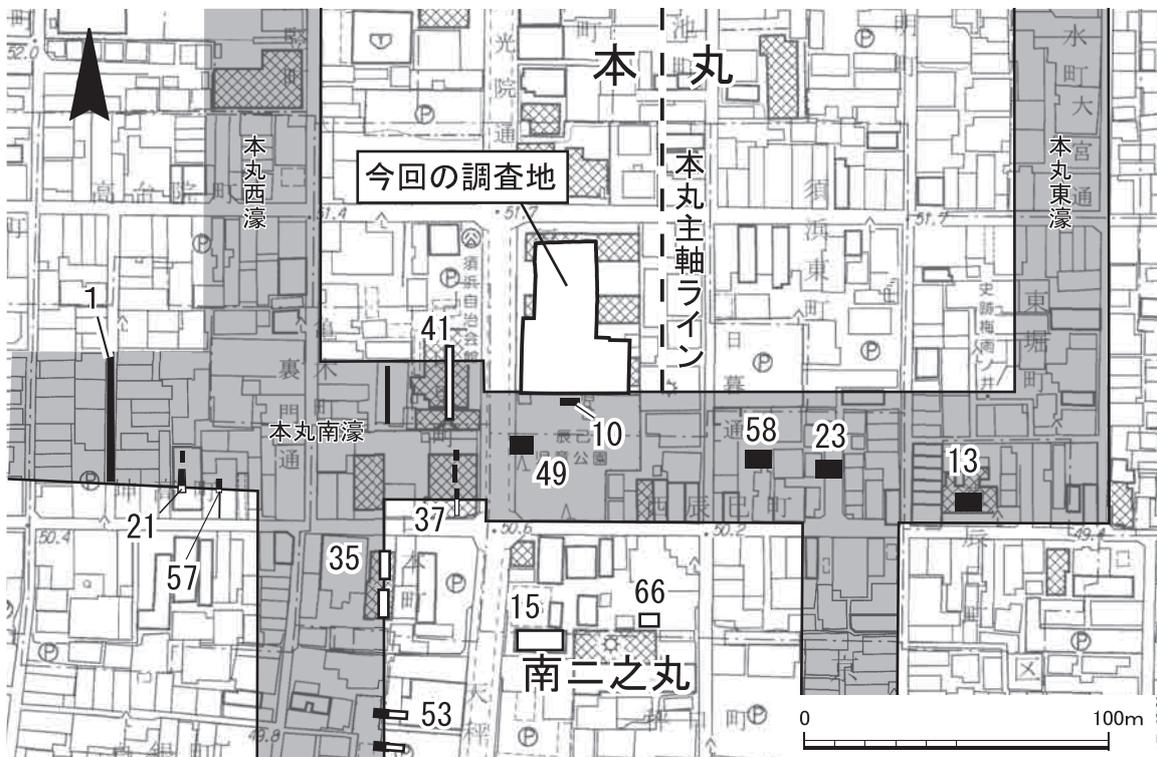
2) 聚楽第と石垣 S W105 について

石垣 S W105 の使用石材は、築石・間詰石・裏込石といった種別を問わず、一切転用石材が確認されなかった。石垣の転用石材利用は永禄年間から天正年間にかけて通有に行われるが、聚楽第の石垣 S W105 は、外面から見えないはずの裏込石にも転用石材を使用していない。聚楽第の所在する「内野」は平安宮跡で、また平安宮跡北方は都市・京都の墓域であったことから、再利用可能な礎石・墓石は当時多数存在した、と推測される。織田信長が足利義昭の居城として建造した旧二条城の調査では大量の五輪塔・石仏の再利用が確認され、秀吉の本拠地であった大坂城詰めの丸では礎石および古墳石棺が再利用されている^(注37)。このような時代背景にも関わらず、今回検出した聚楽第本丸石垣 S W105 は転用石材を用いず、全ての石材を産地から直接調達・運搬して構築されている。同時代の記録には聚楽第の造営に大量の人足が動員され、秀吉自身が工事の

進捗を頻繁に視察したことが記されている。石垣S W105は、聚楽第の築城にかけた秀吉の並々ならぬ熱意を端的に示している。

聚楽第本丸における石垣S W105の位置を参照すると、石垣S W105は本丸主軸線上の西隣りに位置する(第48図)。また、石垣S W105の築石が東へ向かうにつれて大型化することは、今回の調査地の東側に重要な施設が存在したことを示す。大手口付近の石垣の築石に大型の石材を選別し、城主の権威を示すことは織豊系城郭ではよく見られる。したがって、石垣S W105のすぐ東に本丸虎口が存在した可能性がある。ここで豊臣秀次の近臣が記した『駒井日記』^(注39)を参照すると、本丸には南、北、西の3つの門の存在が記され、調査地の位置する聚楽第本丸南辺に門があったことが分かる。また、江戸時代前期までに聚楽第を描写した絵図を参照すると、上越市総合博物館蔵「御所参内・聚楽第行幸図屏風」、堺市博物館蔵「洛中洛外図屏風」には天正16(1588)年の後陽成天皇行幸が描かれているが、参内行列、行幸行列は聚楽第の南を通過しており、御所側の東から直接入城していないことが窺える。とりわけ堺市博物館蔵「洛中洛外図屏風」では、後陽成天皇の行幸行列の前方に聚楽第本丸南虎口の懸け橋が描かれている。これまで聚楽第研究で最も多く参照されてきた三井記念美術館蔵「聚楽第図屏風」(第3図)にも、左端付近で同様の懸け橋の一部が描写されている。

文献・絵画資料と発掘調査成果の照合には慎重さが必要であるが、以上の検討から調査地点の位置が聚楽第本丸南虎口の近隣である可能性は十分にあると考えられる。石垣S W105に転用石材を使用せず大型の自然石を用いて整美な石垣を築いていることは、本丸への入城者に対し秀吉



第48図 調査地周辺の聚楽第関連遺構
(S=1/2,500 京都市都市計画図 聚楽廻)

の威信を誇示する目的があったのであろう。聚楽第跡の大規模な遺構が検出されたのは本調査が初めての事例であるため、現段階では断片的な事象から推論せざるを得ないが、この当否は今後の発掘調査に委ねたい。

石垣S W105の現存高はボーリング調査の結果を参考にしても最大4 mにすぎないが、文禄4(1595)年の破却によって石垣上部が破壊され、現存する石垣はその残存部である。この時期は、城郭の破却にあたって虎口と隅角部が最も大きな破壊の対象となることが判明している^(注40)。本丸南虎口付近と推定される本調査地点の周辺は特に大規模な破壊を受けたはずである。築石が大型で本丸中軸線に近いトレンチ東部の築石の段が、西部と比較すると低く、残存状況が悪いことも地点による破却の程度差を示す可能性がある。こうした大規模な破却によって、石垣S W105と対になって城壁石塁を構成したはずの北側石垣は痕跡さえも残存していない。また、聚楽第石垣の高さを数値として示した文献も存在しないことから、S W105の蓋然性の高い復元は不可能である。ただし、慶長期以前の石垣は矩勾配のみで反りが無いこと、S W105の石積みの傾斜角度が約55°であることを考慮し、4案を提示する^(注41)(第49図)。

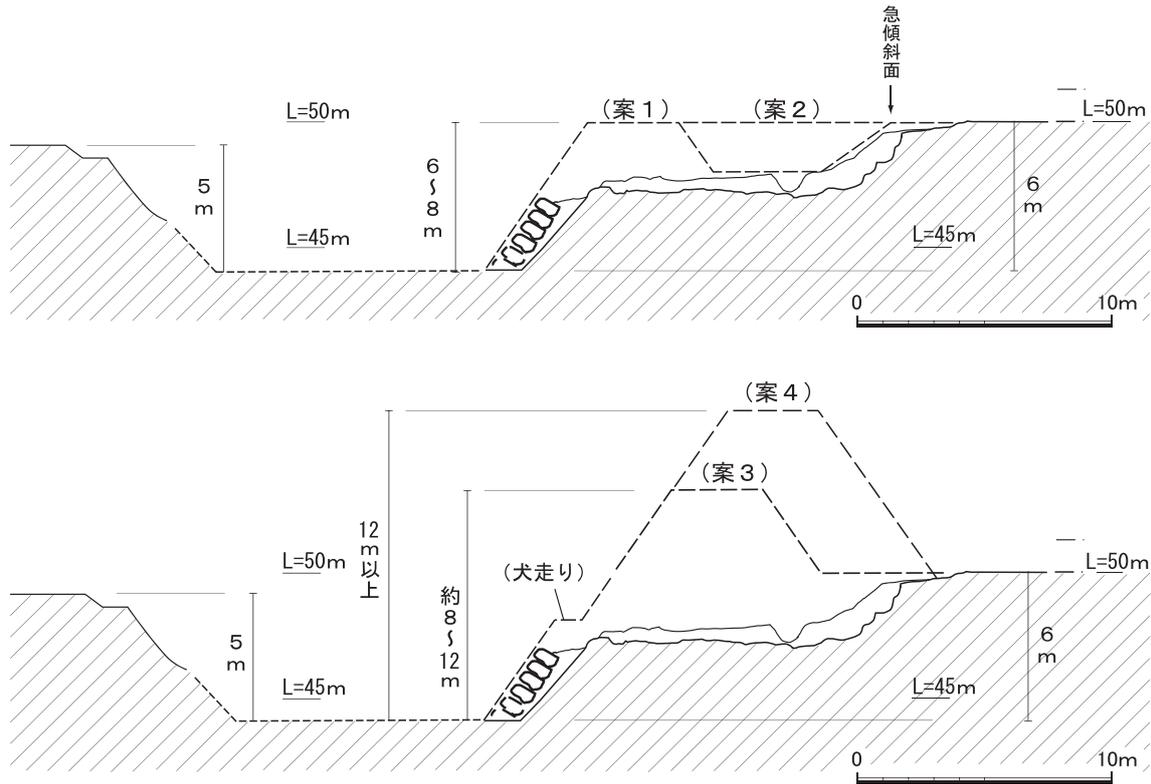
案1は、盛土S X100を本丸南石塁の構成層、造成層S X55の上面を当時の地表面と捉える案である。石塁天端部の標高は約50～52m、濠底から天端までの高さは約6～8 mとなる。城壁の北側(裏側)には幅約2.5～4 mの帯状の平坦面がつき、この平坦面から高低差2 m以上の急斜面が立ち上がり、本丸内部に至る。案1では、この2 m以上の高低差、急斜面と平坦面の存在を聚楽第の構造上の特徴と位置づけるものである。斜面以北では標高50m付近で自然堆積層が水平に堆積し、本丸内部の旧地表面は標高50m以上となるため、石塁の天端は本丸内部旧地表面とほとんど高低差が無いことになる。

案2は、石垣の高さを案1と同じ高さとするが、石垣S W105を本丸南辺護岸施設の構成層と捉える案である。石垣の天端はそのまま本丸内平坦面と一致し、本丸内にはS W105と対になる石垣が存在しない。

案3は、造成層S X55の一部と盛土S X100を石塁の構成層として、案1より高い石塁の存在を想定する案である。石塁の北側石垣の根石は案1より北に位置することとなるので、案1のような帯状の平坦面は設定できなくなる。造成層S X55は石塁以北の段差を完全に埋めたものとなる。すなわち、石塁基部と本丸内部との高低差は、聚楽第築城以前の旧地形を示すものとなる。石塁天端部は標高52～56m、濠底から石塁天端部までの高さは約8～12mである。本丸内の平坦面からは数mの高低差がある。

案4は、造成層S X55と盛土S X100を全て本丸南石塁の構成層と想定し、石塁の高さを最大に見積もる復原案である。城内側の石垣の根石の位置は案3よりさらに北に位置し、自然堆積層の段の上に到達する。この案では、天端部の標高が56m以上、濠底から天端部までの高低差は12m以上となる。本丸内旧地表面からの高低差は6 m以上になる可能性がある。

案1～4はあくまで推論の域を出ないが、案1・2は成り立ちがたいと考える。理由の第一は、案1では石塁の北側に想定される平坦面は幅が2.5～4 mとかなり狭く、通路の可能性は認めら

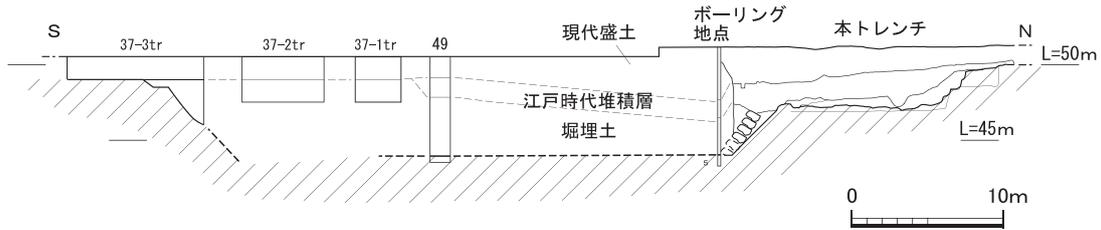


第49図 石垣 S W105の復原案(S=1/300)

れるものの用をなさないと考えられるためである。理由の第二は、案1・2では石垣および護岸施設としての石垣天端部標高が低すぎるためである。これまでの聚楽第の調査履歴を参照すると、第37地点の調査で本丸南濠対岸の自然堆積層上面が標高49.0m付近で検出されており(第50図)、聚楽第存続時の旧地表面の標高は当然この面より高くなる。案1・2の石垣天端部の標高は、第37地点の自然堆積層上面とあまり変わらない。聚楽第は、豊臣秀吉が平安宮跡地の「内野」に溝を持して造営した関白公邸兼城郭で、御土居で外郭を囲った豊臣期京都の中心でもある^(注42)。案1・2では南濠対岸から石垣、護岸施設の天端部を見渡すことができるため、当時の人々の耳目を驚かせた石垣とは考えがたい^(注43)。

以上の検討から、案3・4のいずれかと考えられる。今回の調査結果からはこれ以上の検討が不可能であるが、聚楽第の前後に築造された城郭石垣の高さを比較すると、後藤家文書に記される天正11(1583)年の豊臣期大坂城の石垣は3段築造で、下の段が4間5尺(9.5m)、中の段、上の段が6間(12m)とされ、文禄元(1592)年の金沢城東ノ丸東面が全高15.07m、丑寅櫓下北面が12.22m^(注45)、文禄年間から慶長初期に比定される岡山城中の段石垣が全高10~15.6m^(注46)である。聚楽第以前では永禄6(1563)年の小牧城、永禄10(1567)年の岐阜城で上下二段の石垣が用いられ、聚楽第の近隣では永禄11(1568)年の旧二条城でも堀に面した上下二段の石垣が発掘調査で検出されている^(注47)。

天正14(1586)年に築城された聚楽第は本格的な平城の嚆矢となる城郭であるが、この時期の石垣は反りを有する高石垣への過渡期でもある。自然堆積層に石垣を持たせることの可能な、山地・



第50図 聚楽第跡本丸南濠と本トレンチの位置関係(S=1/500)

丘陵に立地する城郭は別として、この段階で平地における高さ10m前後の石垣構築が可能であったのか、または技術がそこまで発展しておらず従来工法の二段造りの石垣であったのか、が問題となるだろう。改めて今回調査した石垣SW105の位置する地形を見ると、石垣SW105がもたれる自然堆積層の上端の標高は約48mで、濠底からの高低差は約4mである。この上端から約12m北で自然堆積層はさらに急角度で立ち上がり、上端は標高約50mに達する。案3・4のように、2mの高低差を埋めて造成・地盤強化することで石垣の重量が最終的に造成土の后背の自然堆積層にかかるようになり、結果的に自然堆積層に直接石垣を持たせるのと近い効果が期待できる。この段階で濠底からの高低差は約6mに達し、さらに石垣を高く積む段階で平地に石垣を構築することとなる。

ところで、石垣SW105の北に堆積する盛土SX100は報文に記したとおり多量の礫を含む堅固な層であるが、これらの礫は石垣裏込に含まれる栗石と近似している。すなわち、SX100は石垣裏込層の一部と推測される。そして、SX100の検出地点はSW105から約2m北に位置することから、この地点で石垣に段(「犬走り」)が造られた可能性がある(第49図)。以上の現場における堆積状況の観察と合わせ、仮に聚楽第の時期に平城で10m近い石垣を構築する技術が未発達であったとしても、上下二段の石垣を構築することによって上に例示した諸城と同規模の石垣を構築することは必ずしも不可能ではなかったであろう。

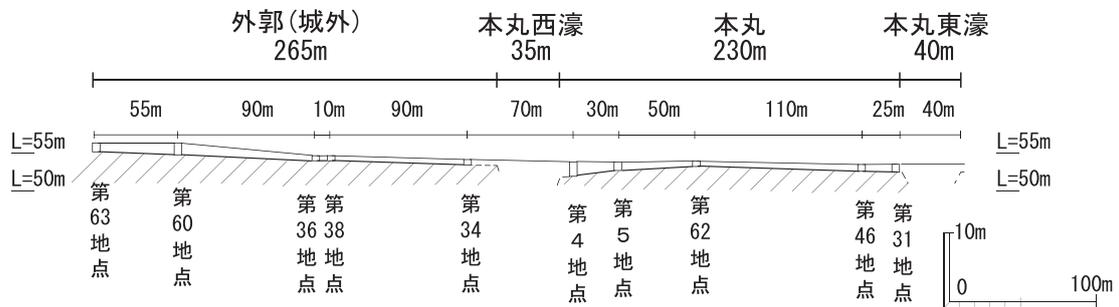
以上の検討は石垣の構築手法を示すだけでなく、聚楽第が旧地形の高低差を巧みに活かして構築された可能性を示す。平安宮跡・聚楽第跡周辺の旧地形を分析した八賀晋によると、^(注48)聚楽第跡の旧地形は基本的には北西から南東に向かって傾斜が下がる丘陵地形で、平安宮の内裏・大極殿など主要施設の所在地が一段高く広い平坦面に造成されたことが判明している。発掘調査事例から聚楽第跡の東西、南北軸上の自然堆積層上面の高低差を推定すると、第51図のようになる。なお、地表面の標高については、京都市都市計画図(1/2,500)(船岡山・聚楽廻)を参照して各調査地点直近の現地表面標高と仮定した。そしてその数値を基に各調査地点における掘削深度から、自然堆積層上面の標高を算出した。

東西軸断面は、本丸北寄りの各地点でデータを収集した。聚楽第西外郭の自然堆積層上面は第63地点から第34地点まで緩やかに下り、約1.5mの高低差がある。本丸内は、西端の第4地点が標高約51.5mと低いが、全体的には標高52.5～53.0mの範囲に収まり、平坦な地形である。聚楽第の破却と後世の地形改変を考慮しても、聚楽第当時の旧地形を反映する可能性が高い。

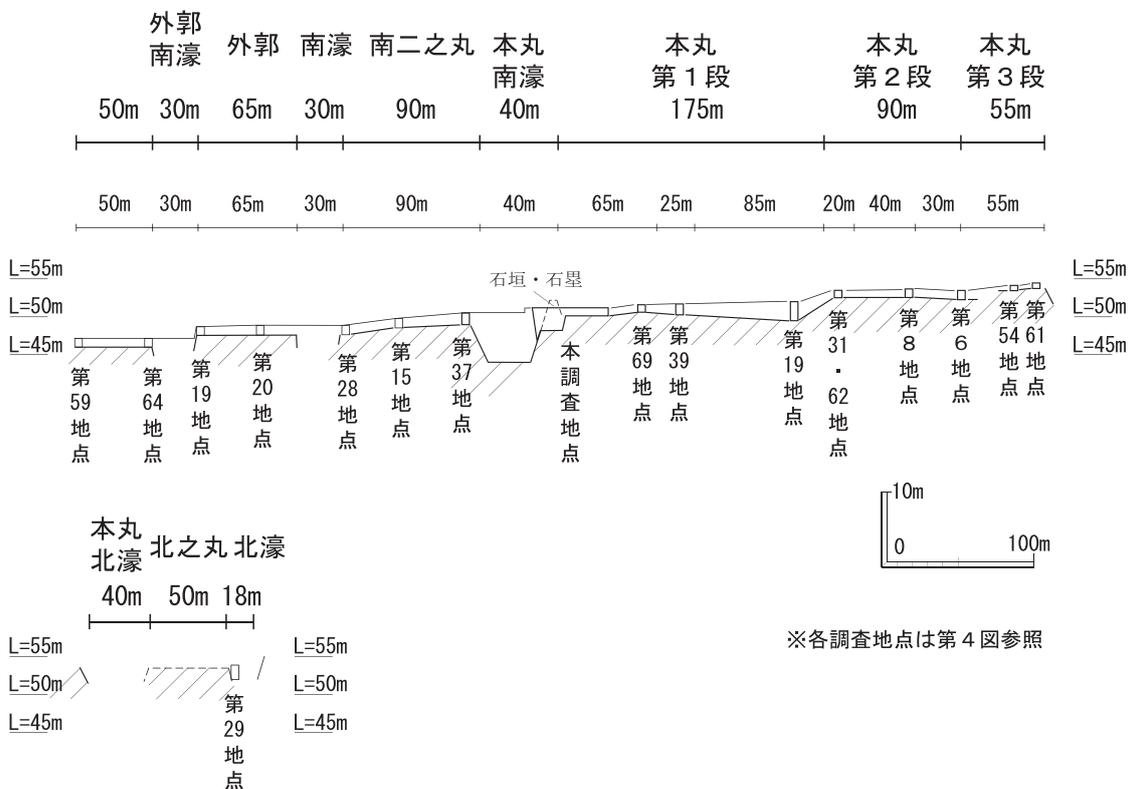
南北軸断面は、主に本丸中央西よりでデータを収集した。南から北に向かって顕著に傾斜が上

昇し高低差は最大8mあるが、各地点の自然堆積層上面の標高を比較するとひな壇状に段差が存在すること、段差の位置が聚楽第の構造と密接に関わっていることは明らかである。外郭南濠、南二之丸南濠、本丸南濠の両肩口の標高を比較すると、北側の標高は明らかに高くなり、聚楽第の構造上、北に向かうにつれて各郭の重要性が増すことと呼応している。高低差は本丸内でも顕著で、第39、62地点の自然堆積層上面の標高差は約3.5mである。両地点には約105mの距離があるため、設定した軸上の検討のみでは段差の所在地点が判明しないが、本丸東端の第19・31地点の標高を参照すると、約3mの高低差がある。両地点の距離は約30mで、第31地点は第62地点とほぼ同じ緯度に位置する。第31・62地点から北へ70mは平坦面が続くが、第6地点以北は標高がさらに上昇する。現段階では明確な段差の位置は確定できないが、第6地点から本丸北端にかけて

〔聚楽第本丸東西軸断面〕



〔聚楽第本丸南北軸断面〕



第51図 石垣 S W105・濠 S X110の構造模式図 (S=1/1,000・1/5,000)

て、最大幅55mの平坦面が造成された可能性がある。

以上の検討から、本丸には3段の平坦面が造成され、南から北に向かって段々状に標高が高くなっていったことが判明した。特に南端の第1段から中央部の第2段にかけての段差は急激で、本丸内部での機能差を端的に示している、と判断される。三井記念美術館の聚楽第図屏風(第3図)を見ると、本丸南部に檜皮葺の建物群と庭園が描かれ、北部には瓦葺きの建物や井戸が描写されている。美術史、建築史の視点からも本丸北部、南部の性格については複数の見解が出されており、今回指摘した、旧地形の段差が本丸内における機能の違い、例えば「表」、「中奥」、「奥」空間といった区別を示す可能性がある。また、本丸北西部の最も標高の高い地点には天守が描かれているが、今回の検討からも本丸北端部は最も標高が高く、この地点にも段造成がなされていたと想定される。聚楽第跡内部は破却と後世の活発な土地利用によって遺構がほとんど残っていないが、自然堆積面の検出標高を比較するだけでも、城内の構造に迫り得る可能性がある。

3)おわりに

これまで積み重ねられてきた聚楽第跡の発掘調査では濠肩の位置確定や濠内の構造解明が主な成果であったが、今回の調査では初めて本丸南辺石垣を検出し、聚楽第の構造に迫れる成果を得た。約32mにわたる石垣は、現段階で聚楽第跡における最大規模の遺構である。また石垣の検出から、地点によっては地下深くに聚楽第の遺構が遺存していることが判明したことも、今回の大きな成果である。

聚楽第跡以前の遺構としては、鎌倉時代以降の平安宮跡の居住域化、戦国時代の応仁・文明の乱後の寺院造営を示唆する遺構を検出した。これまでの都市史研究の成果とも符合する内容である。聚楽第以降の時期では、江戸時代初期に芸能の場となった時期の儀礼を示す土師器の廃棄土坑や寛永年間以降の町屋域化と聚楽土の採掘を示す稠密な遺構分布を確認し、江戸時代後期の大和郡山藩柳沢家京屋敷を示す礎石建物跡も検出した。今回の調査では、聚楽第跡だけでなく、その他の時代の遺構の調査からも、この地域の重層的な歴史を考古学的に示す成果が得られた。^(注50)

(古川 匠)

注1 高橋昌明「大内裏の変貌－平安末から鎌倉中期まで－」(『院政期の内裏・大内裏と院御所』 文理閣) 2006

注2 高橋康夫『京都中世都市史研究』 思文閣 1983

注3 ジアン・クラセ『日本西教史』 太政官翻訳 1878

注4 西田直二郎「聚楽第址」(『京都府史蹟勝地調査會報告』 第1冊 京都府) 1919

注5 内藤昌・大野耕嗣・中村利則「聚楽第－武家地の建築(近世都市図屏風の建築的研究－洛中洛外図・その2－)」(『日本建築学会論文報告集』 第180号 日本建築学会) 1971

注6 櫻井成広『豊臣秀吉の居城』 聚楽第 伏見城編(日本城郭資料館出版会) 1971

注7 足利健亮「聚楽第内城について」(『長岡京古文化論叢』 2 中山修一先生喜寿記念事業会) 1992

注8 百瀬正恒「聚楽第の築城と都市の発展」(『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』 日本史研究会) 2001

注9 森島康雄「聚楽第内郭の復元」(『近世近代の地域と権力』 大阪大学文学部日本史研究室創立50周年

- 記念論文集 下巻 大阪大学文学部日本史研究室)1998
- 森島康雄「聚楽第と城下町」(『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』日本史研究会) 2001
- 注10 梶川敏夫・馬瀬智光「聚楽第の復元と平安宮」(『地図と歴史空間』－足利健亮先生追悼論文集－足利健亮先生追悼論文集編纂委員会) 2000
- 注11 馬瀬智光「聚楽第跡の復元－考古学的考察－」(『古代文化』57-2 財団法人古代学協会) 2005
- 注12 同志社大学歴史資料館『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書－室町殿と近世西立売町の調査－』(同志社大学歴史資料館調査研究報告 第4集) 2005
- 注13 吉崎 伸「上京遺跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004-9』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2004、木下保明、本弥八郎、平田泰「平安京左京一条三坊」(『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1989
- 注14 近藤知子「平安京左京七条二坊・本國寺跡」(『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1996
- 注15 『本能寺跡発掘調査報告』関西文化財調査会 2008
- 注16 同志社大学歴史資料館・(財)京都市埋蔵文化財研究所『相国寺旧境内・上京遺跡の発掘調査－同志社大学烏丸キャンパス建設に伴う発掘調査－』2011
同志社大学歴史資料館『現地説明会資料 相国寺旧境内の発掘調査2』－同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査－(今出川キャンパス整備に伴う発掘調査委員会・歴史資料館) 2011
- 注17 森島康雄「4. 平安京跡・旧二条城跡」(『京都府遺跡調査概報』第59冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ～Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980～1982
- 注18 「平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2008
- 注19 「平安京跡・御土居跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2007
- 注20 「法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-8』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2010
- 注21 「史跡旧二条離宮(二条城)」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2001-15』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2003
「史跡旧二条離宮(二条城)」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-14』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2010
- 注22 小森俊寛「伏見城々下町」(『昭和62年度 京都市埋蔵文化財概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1991
山本雅和「伏見城跡(09FD133)」(『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』京都市文化市民局) 2010
- 注23 前掲注3文献
- 注24 報文については、諸般の事情により田結庄氏の助言と私信を元に古川が代筆した
- 注25 前掲注18文献
- 注26 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市考古資料館開館30周年記念 京都 秀吉の時代 つちの中から』2010
- 注27 『甫庵太閤記』や『当代記』には天正13年春から聚楽第造営着手とされるが、『多聞院日記』による

と天正14年2月21日に本格的に工事が開始されたとする。また、『宇野主水日記』には「京都内野辺に、関白殿の御殿たてらるべきに付而、二月下旬より諸大名在京して大普請始まるなり。大坂には中国之大名のほりて普請あり。人足七八万、または十万ばかりあるべしと云々京都の普請その常なる事にてはなし。猶以大篇之事と云々」と記されている

- 注28 伊野近富「[かわらけ]考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注29 吉岡康暢「14・15世紀中国陶磁編年の論点-琉球出土陶磁を中心に-」(『中近世土器の基礎研究』24 日本中世土器研究会) 2012
- 注30 森田勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」(『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会) 1982
- 注31 立石堅志「奈良火鉢」(『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社) 1995
- 注32 森島康雄「平安京跡(聚楽第跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注33 森島康雄「聚楽第跡出土の軒平瓦」(『京都府埋蔵文化財情報』第49号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993、なお、注32文献第84図90・91も参照
- 注34 佐藤重聖「瓦質土器の需要-大和における出土傾向とその背景-」(『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会 桂書房) 2006
- 注35 前掲注3文献
- 注36 狩野元幸『秀吉の御所参内・聚楽第行幸図屏風』青幻社 2010
- 注37 前掲注17文献
- 注38 財団法人大阪市文化財協会『大坂城跡』6 2002
- 注39 文禄4年4月10日の駒井日記には
聚楽本丸石垣之上壁之廻間数 一 南之門より北之門迄百八十間 一 北之門より西之門迄二百二十間 一 西之門より南之門まで八十六間 一 合四百八十六間 但八町一反切(以下略)と記述されている。
- 注40 藤木久志・伊藤正義『城破りの考古学』吉川弘文館 2001
- 注41 ここで本節での用語法を整理すると、「石垣」は、前面から見て石材を左右、上下に築いた広義の石垣を指す。「石塁」は両側壁に石垣を有する構造物で、城内より一段高く、堤防状に立ち上がる。「石垣」は「石塁」構成要素である。なお、上記の分類は通常の考古学的用法とは異なるが、本節でのみ便宜的に用いる。
「石塁」の用法は三浦正幸『城のつくり方図典』小学館 2005による。なお、田中琢・佐原真『日本考古学事典』(三省堂)2003では、「石塁」は近世城郭以前の石を積み上げた防塁、と定義されているが、管見では適当な用語が他に存在しないため、前掲三浦2005に従う
- 注42 仁木宏『空間・公・共同体』青木書店 1997
- 注43 秀吉の御伽衆の大村由己は、『聚楽第行幸記』に「…四方三千歩の石のついがき山の如し…」と記している。また、ルイス・フロイスは聚楽第の石垣について、「石壁の石は密接していないが、漆喰で接合されており、技術が優れ、壁が厚いために遠方からは石造建築と見誤るほどであった。石の多くは稀有の大きさで、遠くからはるばる肩に担いで運ばれてきたのであるが、時には一個の石を運搬するのに三、四千人を必要とした。」(松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』中央公論社 1977)と記述している
- 注44 中村博司「信長・秀吉の築いた城郭石垣について」(『考古学論究 小笠原好彦先生退任記念論集』

小笠原好彦先生退任記念論集刊行会編) 2007

- 注45 滝川重徳・富田和気夫(「諸大名家の石垣 前田家(加賀)」(『金沢城史料叢書16 城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所) 2012
- 注46 出宮徳尚・乗岡実・仲井光代・岡嶋隆司(『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会) 1997
- 注47 前掲注17文献
- 注48 八賀晋「古代都城の占地について-その地形的環境」(『学叢』創刊号 京都国立博物館) 1979
- 注49 聚楽第跡は文禄4(1595)年の破却後も後世の土地利用によって破壊を受けているが、慶長8(1603)年の二条城築城も影響した可能性がある。前掲(注17)文献の発掘調査で検出された慶長期二条城の石垣は、写真で見ると、今回の聚楽第本丸南石垣と使用石材の形態と岩石的な特徴がよく似ている。二条城築城にあたって、近傍の聚楽第跡石垣石材の一部を抜取り、再利用したことが考え得る。なお、聚楽第跡石垣と慶長期二条城石垣の相似については、山本雅和氏からご教示を得た。
- 注50 平安宮跡・聚楽第跡の発掘調査にあたっては、下記の方々から指導、ご教示を賜った(順不同・敬称略)。鋤柄俊夫(同志社大学)、若林邦彦・浜中邦弘(同志社大学歴史資料館)、釜井俊孝(京都大学防災研究所)、田結庄良昭(放送大学)、和田晴吾・木立雅明・高正龍(立命館大学)、北垣聰一郎・木越隆三・滝川重徳(金沢城調査研究所)、尼崎博正(京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター)、中村博司(前大阪城天守閣博物館)、森岡秀人(日本考古学協会)、増田富士雄(前京都大学)、村田修三(前大阪大学)、木戸雅寿(滋賀県教育委員会)、宮武正登(佐賀県教育委員会)、下高大輔(彦根市教育委員会)、早川圭(高槻市教育委員会)、建部恭宣(日本城郭研究センター)、高田徹(城館資料学会)、市川創(公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所)、樂吉左衛門(公益財団法人樂美術館)、西川禎亮(中村石材工業株式会社)、西村金造・西村大造(株式会社西村石灯呂店)、坂本俊(奈良大学大学院)、中尾芳治・井上満郎・高橋誠一・中谷雅治・上原真人(当調査研究センター理事)

また、公益財団法人三井記念美術館から「聚楽第図屏風」の写真提供を受けた。

付表3 石垣S W105石材一覧

番号	石材	種別	傾斜	幅	高	奥行(控え)	奥行/幅	奥行/高	重量	備考
b 1	細粒花崗岩	築石	50	0.8	0.6	1.15	1.44	1.92	1	
b 2	砂岩	詰石	44	0.45	0.25	-			-	
b 3	チャート	築石	49	0.6	0.6	1.2	2	2	-	
b 4	チャート	築石	61	0.75	0.5	1.45	1.93	2.9	-	
b 5	花崗岩	間石	-	0.35	0.2	-			-	
b 6	花崗岩	築石	-	1.1	-0.3				-	
b 7	花崗岩	間石	49	1.05	0.55	1.15	1.1	2.09	1.2	チャートとの接触部
b 8	細粒花崗岩	不明	47	-0.45	-0.4				-	
b 9	花崗岩	不明	50	-0.5	0.3				-	
c 1	層状チャート	築石	48	1.05	0.5	0.9	0.86	1.8	-	
c 2	細粒花崗岩	築石	52	1.1	0.4	-0.95			-	
c 3	チャート	間石	-	0.4	0.2	-			-	
c 4	花崗岩	築石	51	1.1	0.45	1.15			-	
c 5	花崗岩	間石	-	0.4	0.2	-			-	
c 6	チャート	間石	-	0.3	0.2	0.35			-	
c 7	層状チャート	築石	45	1.05	0.55	1.15	1.1	2.09	-	
c 8	花崗岩	築石	42	1.15	0.55	1.25	1.09	2.27	1.43	
c 9	花崗岩	築石	56	0.95	0.55	-			-	
d 1	花崗岩	築石	67	0.7	0.2	0.9	1.29	4.5	0.23	
d 2	花崗岩	築石	57	0.8	0.4	1	1.25	2.5	0.58	
d 3	花崗岩	築石	59	0.85	0.4	-	-		-	
d 4	花崗岩	築石	40	0.6	0.35	0.9	1.5	2.57	0.34	
d 5	花崗岩	間石	47	0.7	0.4	-	-		-	
d 6	花崗岩	築石	-	0.65	-0.2	-	-		-	
d 7	花崗岩	築石	35	0.5	0.2	-	-		-	
d 8	花崗岩	築石	57	1.65	1.1	0.55	0.37	0.5	2.06	
d 9	砂岩	間石	52	0.35	0.35	0.6	1.71	1.71	-	
e 1	花崗岩	築石	57	0.6	0.45	1.05	1.75	2.33	0.51	
e 2	花崗岩	不明	-	0.3	0.15	-	-		-	
e 3	花崗岩	築石	49	0.7	0.2	0.9	1.29	4.5	0.23	
e 4	花崗岩	築石	45	0.6	0.3	-	-		-	
f 1	花崗岩	築石	59	0.75	0.45	1	1.33	2.22	0.61	
f 2	花崗岩	築石	63	0.7	0.35	-	-		-	
f 3	細粒花崗岩	築石	43	0.55	0.2	1.05	1.91	5.25	0.21	
f 4	花崗岩	築石	57	0.75	0.45	-	-		-	
f 5	石英斑岩	築石	59	0.6	-0.3	-	-		-	
f 6	花崗岩	築石	51	0.7	0.4	-	-		-	
f 7	花崗岩	築石	67	0.6	0.25	1	1.67	4	0.27	
f 8	花崗岩	築石	57	1.4	0.75	1.1	0.79	1.47	1.79	
f 9	ひん岩	築石	45	1.05	-0.4	-0.75	-		-	
f 10	花崗岩	築石	47	1.25	0.55	1.05	0.84	1.91	1.3	
f 11	花崗岩	根石	-	1	0.5	1.1	1.1	2.2	0.99	

番号	石材	種別	傾斜	幅	高	奥行(控え)	奥行/幅	奥行/高	重量	備考
g 1	花崗岩	築石	67	1.05	0.4	-	-		-	
g 2	花崗岩	間石	65	0.4	0.25	-	-		-	
g 3	花崗岩	築石	61	0.9	0.5	1.15	1.28	2.3	0.93	
g 4	花崗岩	築石	59	0.8	0.5	-0.55	-		-	
g 5	花崗岩	築石	60	0.95	0.45	0.9	0.95	2	0.69	
g 6	花崗岩	築石	64	0.85	0.4	-	-		-	
g 7	花崗岩	築石	49	0.6	0.25	-	-		-	
g 8	花崗岩	築石	54	0.6	-0.15	-	-		-	
g 9	花崗岩	間石	67	0.2	-0.15	-	-		-	
g 10	花崗岩	築石	59	0.9	0.3	-	-		-	
g 11	花崗岩	築石	69	0.3	0.3	-	-		-	
g 12	石英斑岩	築石	57	0.8	0.45	-	-		-	
g 13	花崗岩	築石	63	0.85	0.3	-	-		-	
g 14	石英斑岩	築石	57	0.75	0.3	-	-		-	
g 15	花崗岩	築石	57	0.6	0.4	-	-		-	
g 16	斑状花崗岩	築石	43	-0.7	-0.25	-	-		-	
h 1	花崗岩	築石	63	0.7	0.35	0.9	1.29	2.57	0.4	
h 2	花崗岩	築石	58	0.7	0.35	1.3	1.86	3.71	0.58	
h 3	花崗岩	築石	-	0.75	0.4	1.1	1.47	2.75	0.6	
h 4	花崗岩	築石	-	-0.4	0.25	-0.7	-		-	
h 5	花崗岩	築石	41	1.05	0.45	0.65	0.62	1.44	0.55	
h 6	花崗岩	築石	70	0.9	0.5	-	-		-	
h 7	花崗岩	築石	50	0.85	0.5	0.7	0.82	1.4	0.54	
h 8	花崗岩	築石	-	-0.2	0.5				-	
h 9	花崗岩	築石	-	-0.3	-0.2				-	
i 1	花崗岩	築石	68	-0.3	-0.45	-			-	
i 2	文象斑岩	築石	51	0.6	0.4	0.8	1.33	2	-	流紋岩の可能性
i 3	花崗岩	築石	61	0.55	0.55	1.1	2	2	0.6	
i 4	花崗岩	築石	45	-0.8	-0.5	-			-	
i 5	花崗岩	築石	54	0.6	0.2	-			-	

※ 幅、高、奥行き(控え)の単位はm、重量の単位はtである。

※ 重量は、石材の幅、高、奥行きを乗じた数値に、さらに石材の形態と風化度に応じた比率計数および、国立天文台編『理科年表』記載の領家帯花崗岩の密度2.58(t/m³)を乗じて算出した。なお、比率計数は石材 f 8が0.6、石材 d 8が0.8、その他の石材は全て0.7とした。

付表4 石垣 S W105蛍光X線分析結果(奈良教育大学) 単位：重量%

SiO2	Al2O3	Fe2O3	K2O	Na2O	CaO	MgO	TiO2	MnO	P2O5	SrO	Rb2O	F	合計
71.9	15.5	2.85	3.63	4.06	2.62	2.49	0.38	0.05	0.07	0.04	0.02	-	103.56

測定には奈良大学が所有するエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDAX Japan EAGLE XXLを使用した。この装置のX線ターゲットはCrである。測定条件は、真空環境下で印加電圧を10～40kVとし、電流を380～500μAの範囲でカウント毎秒(cps)が1,000程度となるように調節した。測定時間は32分間である。本試料は岩石であるため鉱物効果(不均一効果)を避けるため粉碎し、

塩ビリングを用いた加圧成形法によりディスク状のブリケットを作成して測定に用いた。定量分析は、元素濃度が既知である独立行政法人産業技術総合研究所の提供する岩石標準試料JG-1、JG-1a、JA-3、JB-2、JB-3、JR-1を用いて、Na(ナトリウム)、Mg(マグネシウム)、P(リン)、Si(珪素)、Al(アルミニウム)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Fe(鉄)、Mn(マンガン)、Ti(チタン)の主要10元素および微量元素Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、F(フッ素)についての検量線を作成し、試料に含まれる元素含有量評価を行った。なお、F(フッ素)に関しては、基本的に本研究で使用したようなエネルギー分散型蛍光X線分析装置ではF以下の軽元素の測定は困難とされており、本分析でも可能な限り検討を行ったが、定性分析においてピークは検出されるものの、定量分析では再現的な結果を得ることはできなかった。よって、F(フッ素)については含有量を評価していない。

(奈良教育大学 青木智史)

付表5 石垣SW105蛍光X線分析結果(京都市産業技術研究所)

(1) 試料名：聚楽第本丸石垣材 単位：重量%

	SiO2	Al2O3	Fe2O3	K2O	Na2O	CaO	MgO	TiO2	MnO	P2O5	SrO	Rb2O	F	Ig-loss	合計
検量線法	71.2	14.95	2.84	3.51	3.71	2.3	0.84	0.36	0.07	-	-	-	-	0.61	100.39
FP法(※)	69.7	15.1	2.84	3.74	3.28	2.6	0.73	0.37	0.08	0.12	0.03	0.02	-	0.61	99.21

(2) 試料名：JRRM102(比較資料) 単位：重量%

	SiO2	Al2O3	Fe2O3	K2O	Na2O	CaO	MgO	TiO2	MnO	P2O5	SrO	Rb2O	F	Ig-loss	合計
規格値	80.47	13.79	3.97	0.14	0.3	0.04	0.67	0.45	0.01	-	-	-	-	-	99.84
検量線法	80.43	13.77	4.42	0.12	0.32	0.01	0.7	0.45	0.01					0.13	100.36
FP法(※)	78.9	13.9	3.97	0.19	0.31	0.05	0.62	0.46	0.02	0.08	0.01	-	-	0.13	98.63

被検試料は、岩石であるため鉱物効果(不均一効果)を避けるため微粉碎し、東京科学(株)製ガラスビードサンプラーTK-4200型を用い、融剤の四ほう酸リチウムと混ぜ合わせ、ガラス板に成形したものを測定試料として作製した。

配合は、Ig-loss(強熱減量)測定を行った被検試料0.5gに対し、四ほう酸リチウムを正確に精秤し、被検試料と融剤が1:10になるようにした。酸化剤は硝酸リチウム、剥離剤は、臭化リチウムを使用した。

測定は、京都市産業技術研究所が所有する(株)リガク製波長分散型蛍光X線分析装置 ZSX Primus II により行った。この装置のX線ターゲットはRh(ロジウム)である。

測定条件は、測定元素によって異なるが、真空環境下で印加電圧が30~50kV、電流が60~100mAの範囲であった。

分析方法は、二つの手法を用いた。

一つは、各酸化物濃度が既知の標準物質(耐火物技術協会の提供するJRRM101・106・110、公

益社団法人日本セラミックス協会の提供するJCRM-R701、地質調査所(現独立行政法人産業技術研究所)の提供するJB-2、試薬のFe₂O₃(99.9%)を用い、被検試料と同じ方法で測定試料を作製し、蛍光X線装置にかけ、SiO₂、Al₂O₃、Fe₂O₃、CaO、MgO、Na₂O、K₂O、MnO、TiO₂の主要9成分について検量線を作成した後、被検試料に含まれる各酸化物含有量の定量分析を行った(検量線法)。

他方は、FP法(ファンダメンタル・パラメータ法)により半定量測定を行った後、Ig-loss及び測定試料作製時における融剤と試料の配合割合を組み込んだSQX(Scan Quant X)計算処理を行い、定量値を求めた(FP法によるSQX半定量分析法)。

分析値の信頼性を確認するため、耐火物技術協会の提供する標準試料JRRM102を同様の手法で測定し、得られた被検試料の分析結果に対する評価を行った。

(京都市産業技術研究所 田口 肇・横山 直範)

付表6 出土遺物法量表

土器・陶磁器

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調	備考
1	土師器	皿	D7	SK85	7.3	1.5弱		口径40	灰黄褐色 10YR6/2	
2	土師器	皿	D7	SK85	7.5	1.55		口径70	にぶい黄橙色 10YR7/3～橙色 5YR6/6	
3	土師器	皿	D7	SK85	7.8	(1.2)		全体20 口径15	にぶい橙色 7.5YR7/4	
4	土師器	皿	D7	SK85	8.4	(1.1)		全体50	浅黄褐色 10YR8/3と、にぶい黄褐色 10YR8/4の間	
5	土師器	皿	D7	SK85	8.8	(1.6)		全体50	にぶい橙色 7.5YR7/4	
6	土師器	皿	D7	SK85	8.4	1.45		口径20	灰黄色 2.5Y7/2	コースター型
7	土師器	皿	D7	SK85	10	(1.2)		全体20 口径15	にぶい黄橙色 10YR7/3～6/3の間	
8	土師器	皿	D7	SK85	10.3	1.6		全体90	にぶい橙色 7.5YR7/4	
9	土師器	皿	D7	SK85	13.1	2.75		口径25	にぶい橙色 7.5YR6/4	
10	土師器	皿	D7	SK85	13.4	1.9		口径75	にぶい橙色 7.5YR7/4	
11	土師器	皿	D7	SK85	13.7	2.6		口径20	にぶい黄橙色 10YR7/4	
12	瓦器	椀	D7	SK85	(14.6)	(3.1)		口径25	灰色 N5/	
13	陶器	椀	D7	SK85	-	(1.3)	3.8	底部25	素地 灰黄色 2.5Y7/2 釉 黒色 2.5Y2/1	
14	白磁	椀	D7	SK85	-	(2.5)	5.0	底部10	釉内外 灰白色 10Y7/2 素地 灰白色 10Y7/1	中国南部
15	青磁	椀	D7	SK85	-	(2.5)	5.0	底部10	釉内外 灰白色 10Y7/2 素地 灰白色 10Y7/1	龍泉窯系
16	青磁	椀	D7	SK85	15.0	(5.9)		口径25	釉内外 灰オリーブ色 7.5Y5/3 素地 灰白色 7.5Y7/1	龍泉窯系
17	瓦質	羽釜	D7	SK85	(14.0)	(3.6)		口径10	灰色 N5/	
18	瓦質	羽釜	D7	SK85	(18.4)	(3.65)		口径10	オリーブ黒色 5Y3/1	
19	瓦質	鍋	D7	SK85	(25.2)	(2.65)		口径10	黒色 N1.5/	
20	陶器	甕	D7	SK85	29.6	(1.85)		口径10	灰白色 N5/	常滑
29	土師器	高杯	E2	SK10	(5.1)	(20.5)		全体40	橙色 5YR6/6	脚部
30	緑釉陶器	椀	D8	SK60	-	(2.0)		小片	素地 灰色 釉 暗緑色	
31	緑釉陶器	皿	G4	SE90	11.6	(2.15)		口径10	釉 洗緑色 素地 にぶい橙色 7.5YR7/4	
32	緑釉陶器	椀	H4	SE90	-	(1.9)	5.8	底部50	釉 灰白色 10Y7/2 素地 にぶい橙色 7.5YR6/4	京都系
33	緑釉陶器	椀?	G4	SE90	8.0	(13.5)		底部10	釉 明オリーブ灰色 5GY7/1 素地 灰色 N6/1	京都系
34	青磁	皿	D8	SK60	-	(1.3)		小片	素地 灰白色 釉 明緑灰色	龍泉窯系
35	土師器	皿	D8	SK60	6.7	1.9		完形	にぶい橙色 7.5YR7/4	へそ皿

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
36	土師器	皿	D8	SK60	6.8	1.7		完形	浅黄橙色 7.5YR8/4 橙色 7.5YR7/6	へそ皿
37	土師器	皿	D8	SK60	6.8	1.7		完形	浅黄橙色 7.5YR8/3	へそ皿
38	土師器	皿	D8	SK60	7	1.7		ほぼ完形	にぶい黄橙色 10YR7/2	
39	土師器	皿	D8	SK60	7.4	1.7		全体 75 口径 65	浅黄橙色 10YR8/3	
40	土師器	皿	D8	SK60	7.5	1.8		完形	にぶい橙色 5YR6/3	
41	土師器	皿	D8	SK60	7.6	1.9		完形	にぶい黄橙色 10YR7/4	灯明皿
42	土師器	皿	D8	SK60	8.4	1.9		完形	浅黄橙色 10YR8/4	
43	土師器	皿	D8	SK60	8.6	2.0		完形	浅黄橙色 10YR8/4	灯明皿
44	土師器	皿	D8	SK60	8.4	1.9		完形	浅黄橙色 7.5YR8/6 ~ 橙色 7.5YR7/6	灯明皿
45	土師器	皿	D8	SK60	8.9	1.9		ほぼ完形	浅黄橙色 10YR8/4	灯明皿
46	土師器	皿	D8	SK60	8.4	1.85		完形	浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
47	土師器	皿	D8	SK60	8.5	2.1		完形	浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
48	土師器	皿	D8	SK60	8.5	2.05		ほぼ完形	橙色 7.5YR7/6 内外 一部灰白色 10YR8/2	灯明皿
49	土師器	皿	D8	SK60	8.7	1.98		完形	浅黄橙色 10YR8/4	
50	土師器	皿	D8	SK60	8.9	1.85		完形	浅黄橙色 10YR8/4	
51	土師器	皿	D8	SK60	8.9	2.0		ほぼ完形	にぶい橙色 7.5YR7/4	
52	土師器	皿	D8	SK60	9.0	2.0		完形	浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
53	土師器	皿	D8	SK60	10.0	2.0		口径 75 全体 75	浅黄色 2.5Y8/3	灯明皿
54	土師器	皿	D8	SK60	10.4	(2.2)		ほぼ完形	にぶい黄橙色 10YR7/4	灯明皿
55	土師器	皿	D8	SK60	11.0	2.55		ほぼ完形	浅黄色 2.5Y8/3	灯明皿
56	土師器	皿	D8	SK60	11.3	2.3		ほぼ完形	浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
57	土師器	皿	D8	SK60	11.4	2.2		完形	淡黄色 2.5Y8/3	
58	土師器	皿	D8	SK60	11.5	2.3		完形	淡黄色 2.5Y8/3	灯明皿
59	土師器	皿	D8	SK60	11.4	2.1		ほぼ完形	にぶい黄橙色 10YR7/4	
60	土師器	皿	D8	SK60	11.8	2.3		ほぼ完形	浅黄橙色 10YR8/4	灯明皿
61	土師器	皿	D8	SK60	12.0	2.25		完形	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
62	土師器	皿	D8	SK60	14.0	2.6		ほぼ完形	にぶい黄橙色 10YR7/4	
63	土師器	皿	D8	SK60	14.3	2.3		口径 60	浅黄橙色 10YR8/3	
64	土師器	皿	D8	SK60	14.5	2.4		口径 90 全体 95	浅黄橙色 10YR8/4	
65	土師器	皿	D8	SK60	14.6	3.0		口径 90 全体 90	にぶい橙色 7.5YR7/4	灯明皿
66	青磁	椀	D8	SK60	14.0	(4.8)		口径 15	素地 灰白色 10Y7/1	龍泉窯系
67	青磁	椀	D8	SK60	14.6	(4.3)		口径 10	オリーブ灰色 5GY6/1	龍泉窯系
68	青磁	椀	D8	SK60	13.9	(4.55)		口径 25	明オリーブ灰色 5GY7/1	龍泉窯系
69	青磁	椀	D8	SK60	15.4	(4.8)		口径 10	素地 灰白色 N8/0 釉 オリーブ灰色 2.5GY5/1	龍泉窯系
70	青磁	椀	D8	SK60	15.0	7.1		口径 25 全体 50	素地 オリーブ黄色 2.5Y7/4 釉 浅黄色 5Y6/4	龍泉窯系
71	青磁	椀	D8	SK60	14.7	(4.9)		口径 15	釉内外 淡青灰色 素地 灰色 5Y7/1	龍泉窯系
72	青磁	椀	D8	SK60	14.8	(4.45)		口径 20	釉内外 青緑灰色 素地 灰白色 10Y9/1	龍泉窯系
73	青磁	椀	D8	SK60	-	(5.35)	5.4	底部		龍泉窯系
74	青磁	椀	D8	SK60	-	(4.7)		底部	明オリーブ灰色 5GY7/1	龍泉窯系
75	青磁	椀	D8	SK60	-	(5.1)	5.8	底部		龍泉窯系
76	青磁	椀	D8	SK60	-	(3.6)	5.6	底部		龍泉窯系
77	青磁	椀	D8	SK60	-	(2.0)	6.8	底部	素地 灰白色 10Y7/1	龍泉窯系
78	青磁	皿	D8	SK60	10.8	3.4	5.1	ほぼ完形	明オリーブ灰色 5GY	龍泉窯系

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
79	青磁	皿	D8	SK60	11.0	(2.5)		口径 15	素地 灰白色 10Y7/1 釉 明緑灰色	龍泉窯系
80	白磁	椀	D8	SK60	-	(4.2)	5.6	底部 55	釉 灰白色 5GY8/1	中国南部
81	白磁	皿	D8	SK60	9.85	2.5	3.8	底部 50 口径 35	素地 灰白色 5Y8/2 釉 灰白色 10Y8/1	中国
82	白磁	皿	D8	SK60	10.0	(1.8)		口径 15	外 (釉) 灰白色 10YR8/1 ~ 8/3 内 (釉) 灰白色 2.5YR8/2 外 (素地) におい黄橙色 10YR7/3	中国南部
83	白磁	皿	D8	SK60	12.8	2.55		口径 10	素地 灰白色 10Y8/1 釉 灰白色 10Y7/1	中国南部
84	陶器	椀	D8	SK60	-	(3.7)		小片	素地 灰白色 10YR8/2 釉 黒色 (茶色まじり)	天目茶椀
85	陶器	鉢	D8	SK60	24.2	(5.1)		口径 10	釉 浅黄色 7.5Y7/3 ~ オリーブ黄色 6/3	瀬戸灰釉
86	陶器	鉢	D8	SK60	-	(4.0)		小片	素地 淡黄色 2.5Y8/3 釉 オリーブ色 5Y6/6	瀬戸片口
87	陶器	鉢	D8	SK60	-	(1.4)	15.6	底部 25	外 灰白色 7.5Y7/1 内 灰白色 7.5Y7/2 ~ 灰オリーブ色 7.5Y6/2	瀬戸灰釉
88	瓦質	羽釜	D8	SK60	16.2	(8.75)		口径 20	灰色 10Y6/1	
89	瓦質	羽釜	D8	SK60	22.0	(11.4)		口径 25	釉内 灰白色 2.5GY8/1 外 暗灰色 N3/ 素地 灰白色 2.5GY8/1	
90	瓦質	羽釜	D8	SK60	24.6	(13.2)		口径 12.5	内 灰白色 2.5Y8/1 外 灰~暗灰色 N4/0N3/0	
91	瓦質	火鉢	D8	SK60	46.6	48.5	16.2	70	内外 暗灰色 N3/ 素地 灰白色 N8/	方形
92	瓦質	鉢	D8	SK60	30.3	7.9		口径 10 底部 35	内 灰黄色 2.5Y7/2 外 暗褐色 10YR3/3	
93	陶器	すり鉢	D8	SK60	26.2	9.5		口径 10	釉内 赤色 10R5/6 釉外 におい赤褐色 7.5R4/3 素地 一部灰色 N4/0	備前
94	陶器	すり鉢	D9	SK60	27.9	(9.8)		口径 25	釉内外 褐灰色 10YR5/1 ~ におい褐色 5YR4/3 素地 灰色 N4/0	備前
96	土師器	皿	H4	SE90	6.2	1.71		完形	黄橙色 10YR8/6 ~ 浅黄橙色 10YR8/4	へそ皿
97	土師器	皿	H4	SE90	6.9	1.8		ほぼ完形	黄橙色 10YR8/6	へそ皿
98	土師器	皿	G4	SE90	7.0	1.6		口径 55 全体 60	橙色 7.5YR7/6	へそ皿
99	土師器	皿	H4	SE90	7.0	1.7		ほぼ完形	内 浅黄橙色 7.5YR8/6 外 橙色 7.5YR7/6	へそ皿
100	土師器	皿	G4	SE90	7.2	1.7		完形	橙色 7.5YR7/6	
101	土師器	皿	G4	SE90	7.5	1.7		完形	橙色 5YR7/6	へそ皿
102	土師器	皿	G4	SE90	7.6	1.7		ほぼ完形	橙色 7.5YR7/6	
103	土師器	皿	G4	SE90	8.4	2.1		ほぼ完形	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
104	土師器	皿	G4	SE90	8.5	1.85		ほぼ完形	浅黄橙色 10YR8/3	灯明皿
105	土師器	皿	G4	SE90	8.6	1.95		完形	橙色 7.5YR7/6	
106	土師器	皿	H4	SE90	8.6	1.8		完形	浅黄橙色 10YR8/3	
107	土師器	皿	G4	SE90	8.6	2.0		完形	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
108	土師器	皿	G4	SE90	8.7	1.85		完形	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
109	土師器	皿	G4	SE90	8.8	1.71		完形	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
110	土師器	皿	H4	SE90	8.8	1.92		完形	浅黄橙色 10YR8/3	
111	土師器	皿	G4	SE90	9.0	2.1		完形	橙色 7.5YR7/6	
112	土師器	皿	G4	SE90	10.0	2.1		口径 75	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
113	土師器	皿	G4	SE90	10.0	2.2		完形	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
114	土師器	皿	G4	SE90	10.0	2.0		全体 85	浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
115	土師器	皿	G4	SE90	10.1	2.0		口径 75 全体 75	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
116	土師器	皿	G4	SE90	10.2	2.2		口径 80 全体 90	橙色 7.5YR7/6	灯明皿
117	土師器	皿	G4	SE90	11.6	2.3		口径 90 全体 95	浅黄橙色 10YR8/4	
118	土師器	皿	G4	SE90	14.0	2.4		口径 30	内 橙色 2.5YR7/6 口縁外 橙色 2.5YR7/6 底外 浅黄橙色 7.5YR8/3	

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
119	土師器	皿	G4	SE90	14.2	2.4		口径 55	浅黄橙色 7.5YR8/6	灯明皿
120	土師器	皿	G4	SE90	14.3	2.3		全体 55	淡赤橙色 2.5YR7/4 ~ 明褐色 7.5YR7/2	
121	土師器	皿	H4	SE90	14.4	1.2		口径 30	浅黄橙色 10YR8/4	
122	土師器	皿	G4	SE90	14.4	2.25		口径 40	にぶい黄橙色 10YR7/3 素地 淡橙色 5YR8/4 の部分あり	
123	土師器	皿	H4	SE90	14.4	2.5		口径 70	内 橙色 7.5YR7/6 ~ 灰白色 10YR8/2 外 橙色 7.5YR7/6 橙色	
124	土師器	皿	G4	SE90	15.9	3.1		口径 60	浅黄橙色 7.5YR8/4	
125	土師器	皿	G4	SE90	16.0	2.3		口径 25 全体 40	内 橙色 2.5YR7/6 口縁外 橙色 2.5YR7/6 底外 浅黄橙色 7.5YR8/3	
126	土師器	皿	G4	SE90	16.2	2.55		全体 50	橙色 5YR7/6 ~ 灰白色 10YR8/2(底部外)	
127	土師器	皿	H4	SE90	16.3	2.6		口径 30	内外 橙色 7.5YR7/6 ~ 浅黄橙色 10YR8/3	
128	土師器	皿	G4	SE90	16.4	2.25		全体 50	内外 橙色 5YR7/6 ~ 灰白色 7.5YR8/1 素地 褐色 7.5YR6/1 の部分もあり	
129	青磁	椀	H4	SE90	15.0	(2.8)		口径 10	にぶい黄色 2.5Y6/4	龍泉窯系
130	青磁	椀	G4	SE90	-	(3.8)	4.6	底部	にぶい黄色 2.5Y6/4	龍泉窯系
131	青磁	椀	H4	SE90	14.4	(5.3)		口径 60	明オリーブ灰色 5GY7/1	龍泉窯系
132	青磁	椀	H4	SE90	-	(3.8)	5.4	底部	釉 明緑灰色 7.5GY7/1 素地 灰白色 N7/0 底部 にぶい赤褐色 5YR5/3	龍泉窯系
133	青磁	椀	G4	SE90	14.6	(4.5)		口径 10	釉 オリーブ灰色 10Y6/2 素地 灰白色 N8/0	龍泉窯系
134	青磁	椀	H4	SE90	16.0	(4.0)		口径 20	オリーブ灰色 10Y6/2	龍泉窯系
135	青磁	椀	G4	SE90	16.0	(4.7)		口径 15	オリーブ灰色 GY6/1 ~ 5/1	龍泉窯系
136	青磁	椀	H4	SE90	15.0	(4.8)		口径 15	灰白色 10Y7/2	龍泉窯系
137	青磁	椀	G4	SE90	15.4	(3.8)		口径 15	黄褐色 2.5Y5/3 ~ にぶい黄褐色 10YR5/4	龍泉窯系
138	青磁	椀	H4	SE90	-	(3.6)	5.6	底部	明オリーブ灰色 5YG7/1	龍泉窯系
139	青磁	椀	G4	SE90	-	(4.6)	5.6	底部	素地 明赤褐色 5YR5/6 釉 明オリーブ灰色 5GY7/1	龍泉窯系
140	青磁	皿	H4	SE90	11.6	(2.6)		口径 20	オリーブ灰色 7.5GY6/1 ~ 暗緑灰色 7.5GY4/1	龍泉窯系
141	青磁	皿	G4	SE90	-	(3.3)	8.3	底部	素地 にぶい赤褐色 5YR5/4 釉 オリーブ灰色 2.5GY6/1	龍泉窯系
142	白磁	椀	G4	SE90	9.0	(2.8)		口径 15	外 灰色 2.5Y8/1 ~ 8/2 内 灰色 2.5Y8/1	中国南部小椀
143	青花	椀	H4	SE90	14.3	(5.5)		口径 10	染付 暗青灰色 5B4/1 素地 灰白色 5GY8/1	中国南部
144	陶器	椀	G4	SE90	13.0	(3.3)		口径 810	黒色 N15/0 ~ 2/1 黒褐色 10YR3/2 ~ 暗褐色 10YR3/3	天目茶椀
145	陶器	すり鉢	G4	SE90	31.7	(5.1)		口径 45	釉内外 赤色 10R5/6 ~ 赤褐色 10R4/4 素地 灰色 N6/0 にぶい褐色 7.5YR5/3	備前
146	瓦質	鉢	G4	SE90	45.4	17.3 ~ 15.4	32.1	全体 80	灰色 N5/0 ~ N4/0 内 一部 橙色 7.5YR7/6	奈良浅鉢 V
147	土師器	皿	D7	SK80	6.4	1.6		口径 70	浅黄橙色 10YR8/4	へそ皿
148	土師器	皿	D7	SK80	7.0	1.5		口径 30 全体 40	浅黄橙色 10YR8/4	へそ皿
149	土師器	皿	D7	SK80	7.0	2.0		全体 80	にぶい橙色 7.5YR7/3	
150	土師器	皿	D7	SK80	7.6	1.8		ほぼ完形	橙色 7.5YR7/6	
151	土師器	皿	D7	SK80	8.2	1.8		全体 30	灰白色 10YR8/2 褐色 10YR5/1	
152	土師器	皿	D7	SK80	8.6	1.2 ~ 1.6		口径 80	にぶい橙色 7.5YR7/4	
153	土師器	皿	D7	SK80	8.9	1.6		口径 30 全体 35	浅黄橙色 7.5YR	
154	土師器	皿	D7	SK80	9.0	1.6		全体 25	外 にぶい黄橙色 10YR7/3 褐色 10YR6/1 内 褐色 10YR5/1 ~ 4/1	
155	土師器	皿	D7	SK80	13.0	(2.0)		口径 15 全体 30	浅黄橙色 7.5YR	
156	瓦質	鍋	D7	SK80	25.9	(13.4)		口径 20	内 灰黄色 2.5Y7/2 一部暗灰黄色 2.5Y4/2 外 灰色 N4/0	
157	土師器	皿	F8	SK70	5.6	(1)		口径 15	にぶい橙色 7.5YR7/4	
158	土師器	皿	F8	SK70	11.8	(2.1)		口径 15	浅黄橙色 7.5YR8/4 ~ にぶい橙色 7.5YR7/4	
159	土師器	皿	F8	SK70	11.8	(1.2)		全体 10	にぶい黄橙色 10YR7/3	灯明皿
160	瓦質	鉢	F8	SK70	37.4	(5)		口径 5	黄灰色 2.5Y5/1	火鉢

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
161	瓦質	火鉢	H11 H12	SK30	48.8	48.8	17.65	40	内外 灰色 N4/ 素地 明褐色 5YR7/2	方形
162	土師器	皿	I3	SX55	9.0	(1.65)		口径 20	内 におい 橙色 7.5YR7/4 外 素地 浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
163	土師器	皿	I3	SX55	9.5	1.85		口径 15	橙色 5YR7/6	
164	土師器	皿	I4	SX55	11.2	(2.1)		口径 15	浅黄橙色 7.5YR8/4 ~ 灰白色 10YR8/1	
165	土師器	皿	I3	SX55	14.4	(2.2)		口径 10	浅黄橙色 7.5YR8/4	
166	瓦質	鍋	I3	SX55	15.2	(3.0)		全体 15	内 黄灰色 (少し茶色を帯びる) 2.5Y6/1 外 黒色 N1.5/0 ~ 灰白色 N8/0 素地 灰白色 2.5Y8/1	
167	瓦質	羽釜	I3	SX55	27.8	(3.05)		口径 10	内 黒色 N2/0 外 暗灰色 N3/0 素地 灰白色 5Y8/1	
168	土師器	鍋	H12	SK38	26.8	(7.5)		口径 85 全体 70	におい 橙色 7.5YR6/4	
169	土師器	皿	H12	SK38	10.8	2.3		口径 60 全体 50	橙色 5YR7/6	灯明皿
170	土師器	皿	H12	SK38	11	(2.1)		口径 50 全体 40	黒色 N2/0 黒褐色 10YR3/1	灯明皿
171	土師器	皿	F11 F12	SK26	11	2.1		口径 75 全体 80	浅黄橙色 7.5YR8/4	灯明皿
185	土師器	皿	G11	SK25	5.2	1.0		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
186	土師器	皿	G11	SK25	5.2	1.2		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
187	土師器	皿	G11	SK25	5.3	1.1		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
188	土師器	皿	G11	SK25	5.4	1.35		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
189	土師器	皿	G11	SK25	5.4	1.15		ほぼ完形	におい 黄橙色 10YR7/3	
190	土師器	皿	G11	SK25	5.5	1.15		ほぼ完形	内 におい 橙色 7.5YR7/4 外 におい 橙色 7.5YR7/3	
191	土師器	皿	G11	SK25	5.6	1.3		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
192	土師器	皿	G11	SK25	5.8	1.4		ほぼ完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
193	土師器	皿	G11	SK25	5.8	1.1		完形	内 におい 黄橙色 10YR7/4 ~ 橙 7.5YR6/5 外 橙色 7.5YR7/6	
194	土師器	皿	G11	SK25	5.9	1.4		ほぼ完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
195	土師器	皿	G11	SK25	6.1	1.2		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
196	土師器	皿	G11	SK25	6.1	1.1		ほぼ完形	浅黄橙色 7.5YR8/4	
197	土師器	皿	G11	SK25	6.25	1.25		全体 85	内 橙色 7.5YR7/6 外 におい 橙色 7.5YR7/4	
198	土師器	皿	G11	SK25	8.8	1.9		全体 90	橙色 5YR7/6 すず付着	灯明皿
199	土師器	皿	G11	SK25	9.4	2.3		完形	外 におい 橙色 7.5YR7/4 ~ 橙色 7.5YR7/6 内 橙色 7.5YR7/6	灯明皿
200	土師器	皿	G11	SK25	10.0	2.1		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
201	土師器	皿	G11	SK25	10.4	2.1		全体 75	外 におい 橙色 7.5YR7/4 ~ 橙色 7.5YR7/6 内 浅黄橙色 7.5YR8/3 ~ におい 橙色 7.5Y7/4	灯明皿
202	土師器	皿	G11	SK25	10.4	2.3		口径 70 全体 80	褐色 10YR6/1	
203	土師器	皿	G11	SK25	10.4 ~ 10.6	2.3		完形	外 におい 橙色 7.5YR6/4 内 橙色 7.5YR7/6	灯明皿
204	土師器	皿	G11	SK25	10.55	2.2		完形	におい 橙色 7.5YR7/4	
205	土師器	皿	G11	SK25	10.8	2.3		全体 50	外 橙色 7.5YR7/6 ~ 6/6 内 におい 橙色 7.5YR7/4	
206	土師器	皿	G11	SK25	10.9	2.45		口径 40 全体 55	浅黄橙色 10YR8/4	灯明皿
207	陶器	椀	G11	SK25	10.8	(5.6)	-	口径 10	釉 黒褐色 2.5Y3/2 素地 灰白色 2.5Y8/2	天目茶椀
208	陶器	皿	G11	SK25	12.9	3.15	4.3	口径 35 全体 40	釉 灰色 5Y6/1 素地 橙色 2.5YR6/6	肥前
209	陶器	皿	G11	SK25	12.4	2.9	3.7	口径 60	釉 灰色 10Y6/1 素地 灰白色 2.5Y7/1	肥前
210	陶器	鉢	G11	SK25	-	-	-	小片	釉 灰オリーブ 素地 灰褐色	
212	陶器	椀	D10	SK42	11.1	(6.15)		口径 15	灰白色 2.5Y8/2	天目茶椀
213	陶器	皿	D10	SK42	14.6	3.0	(8.5)	口径 40	灰白色 2.5Y8/2	瀬戸灰釉

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
214	陶器	皿	D10	SK42	11.6	2.35	(6.7)	口径 35	灰白色 5Y8/1	志野
215	陶器	向付	D10	SK42	-	-		全体 5	灰白色 2.5Y8/2	織部
216	土師器	皿	D9	SK44	10.6	2.1		口径 25	内 灰黄色 2.5Y6/2 外 におい黄橙色 10YR6/3	
217	陶器	鉢	D9	SK44	-	(5.3)		全体 15	灰白色 10Y7/1	絵唐津
218	陶器	椀	D9	SK44	9.8	(5.35)		全体 20	無色透明釉	京焼
219	陶器	向付	D9	SK44	-	3.4		全体 25	素地 灰黄色 2.5Y7/2	青織部
220	焼塩壺		D9	SK44	-	(8.9)		ほぼ完形	明赤褐色 5YR5/6	
221	土師器	皿	D8	SX101	(16.0)	2.85		全体 25	におい黄橙色 10YR7/3	
222	陶器	皿	D8	SX101	(11.2)	(1.55)		底部 25	淡黄色 2.5Y8/3	赤織部
223	陶器	向付	D8	SX101	-	-		全体 5	灰白色 10Y7/1	織部
224	磁器	椀	D8	SX101	(12.7)	(5.15)		口径 15	明緑灰色 7.5GY7/1	肥前青磁
225	白磁	皿	D8	SX101	(19.4)	2.9	(11.4)	口径 15	白色 N9/	中国南部
226	陶器	すり鉢	D8	SX101	(28.0)	(7.2)		小破片	におい黄褐色 10YR5/3	丹波
227	土師器	皿	B2	SE01	7.0	1.6		完形	におい橙色～橙色 7.5YR6/4～6/6	灯明皿
228	土師器	皿	B2	SE01	10.3	2.2		全体 30	におい橙色 7.5YR7/4 におい黄橙色 10YR7/4	
229	土師器	皿	B2	SE01	10.2	1.9		口径 40 全体 50	におい黄橙色 10YR7/4	
230	瓦質	燭台	B2	SE01	13.3	(3.5)		口径 20	黒褐色 10YR3/1～灰黄褐色 10YR4/2	
231	磁器	椀	B2	SE01	11.1	5.8		口径 65 全体 60 底部 100	灰白色 10YR9/1	肥前染付
232	磁器	皿	B2	SE01	14.3	(2.1)		口径 20 全体 25	釉 灰白色 N8/0	肥前染付
233	磁器	皿	B2	SE01	12.8	3.65	4.2	口径 60 底部 100	明緑灰色 10GY8/1	肥前
234	焼塩壺		B2	SE01	7.6	(10.3)	5.1	ほぼ完形	内 橙色～明赤褐色 5YR6/6～5/6 外 橙色 7.5YR6/6	刻印あり
235	陶器	すり鉢	B2	SE01	37.9	(6.0)		口径 10	内外 におい赤褐色 5YR4/4 素地 灰白色 N7/0	信楽
237	土師器	皿	E6F6	SK88	4.8	1.5		完形	橙色 5YR6/6	
238	土師器	皿	E6F6	SK88	4.8	1.15		完形	におい黄橙色 10YR7/4	
239	土師器	皿	E6F6	SK88	5.0	1.2		完形	におい黄橙色 10YR7/4	
240	土師器	皿	E6F6	SK88	5.0	1.2		完形	浅黄橙色 7.5YR8/4	
241	土師器	皿	E6F6	SK88	5.0	1.4		完形	におい黄橙色 10YR7/3	
242	土師器	皿	E6F6	SK88	5.1	1.1		完形	におい黄橙色 10YR7/4	灯明皿
243	土師器	皿	E6F6	SK88	5.1	1.4		完形	におい黄橙色 10YR7/4	
244	土師器	皿	E6F6	SK88	5.3	1.15		完形	におい黄橙色 10YR7/4	
245	土師器	皿	E6F6	SK88	5.3	1.25		完形	におい黄橙色 10YR	
246	土師器	皿	E6F6	SK88	5.4	1.15		完形	橙色 5YR7/6	
247	土師器	皿	E6F6	SK88	7.3	1.45		完形	浅黄橙色 10YR8/4	
248	土師器	皿	E6F6	SK88	7.4	1.4		完形	浅黄橙色 10YR8/4	
249	土師器	皿	E6F6	SK88	7.5	1.6		完形	浅黄橙色 10YR8/3	灯明皿
250	土師器	皿	E6F6	SK88	9.2	1.4		全体 30	浅黄橙色 10YR8/3	灯明皿
251	土師器	皿	E6F6	SK88	9.9	1.5		全体 60	浅黄橙色 10YR8/3 橙色 7.5YR7/6	
252	土師器	皿	E6F6	SK88	10.4	1.7		全体 50	浅黄橙色 10YR8/3	
253	土師器	皿	E6F6	SK88	11.5	2.4		口径 30 全体 50	橙色 5YR7/6	
254	土師器	皿	E6F6	SK88	10.2	2.7		口径 20	灰白色 10YR8/2	
255	焼塩壺		E6F6	SK88	10.4	1.7		全体 35	外 におい橙色 2.5YR6/4 におい赤褐色 2.5YR5/3 暗灰色 N3/3 内 におい橙色 2.5YR6/4 赤灰色 2.5YR5/1 暗灰色 N3/3	蓋
256	土師器	皿	E6F6	SK88	20.4	2.1		口径 40 全体 20	浅黄橙色 10YR8/4	
257	土師器	皿	D9	SK75	10.4	2.1		口径 60	浅黄橙色 10YR8/4	
258	土師器	皿	D9	SK75	10.4	2.0		ほぼ完形	口縁 におい橙色 7.5YR7/4 中心 赤褐色 10R6/6	

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調	備考
259	土師器	皿	D9	SK75	10.6	2.2		ほぼ完形	口縁 にぶい橙色 7.5YR7/4 中心 赤橙色 10YR6/6	
260	土師器	皿	D9	SK75	10.7	2.1		口径 75	灰白色 2.5Y7/1	
261	土師器	皿	D9	SK75	10.8	2.2		ほぼ完形	口縁 にぶい橙色 7.5YR7/4 中心 赤橙色 10R6/6	
262	土師器	皿	D9	SK75	10.8	2.3		ほぼ完形	灰白色 2.5Y8/2	
263	土師器	皿	D9	SK75	10.9	2.2		口径 65 全体 70	にぶい黄橙色 10YR7/2	
264	土師器	皿	D9	SK75	10.9	2.1		口径 75	にぶい黄橙色 10YR7/4	
265	土師器	皿	D9	SK75	11.0	2.2		口径 55 全体 55	灰黄色 2.5Y7/2	
266	土師器	皿	D9	SK75	11.0	1.9		口径 45 全体 50	灰白色 2.5Y8/2	
267	土師器	皿	D9	SK75	11.1	(2.1)		口径 25	灰白色 2.5Y8/2	
268	土師器	皿	D9	SK75	11.0	2.1		完形	にぶい黄橙色 10YR7/3	
269	土師器	皿	D9	SK75	11.0	2.1		口径 60 全体 70	灰黄色 2.5Y7/2	
270	土師器	皿	D9	SK75	11.2	2.15		完形	にぶい黄橙色 10YR7/3	

瓦類

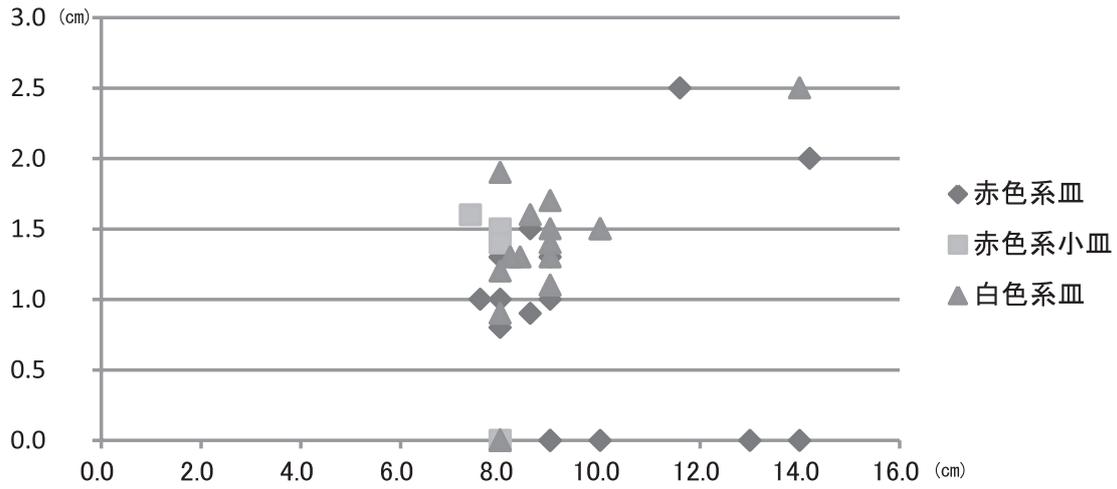
軒丸瓦	地区	遺構名	外径 (cm)	厚さ (cm)	胎土	焼成	色調	金箔痕跡
172	E 3	断ち割り	16	2.7 ~ 1.8	やや粗	良好	灰色、断面：灰白色	なし
173	D 10	S K 42	14	2 ~ 1.1	密	良好	灰～暗灰色と緑黒灰色	なし
174	G 11	S X 20	-15	2 ~ 1.3	密	良好	灰色	なし
175	G 1	S X 110	16.2	2.4 ~ 1.4	密	良好		僅かにあり
176	E 8	S K 79	小片	2.1 ~ 1.6	密	良好	灰色	なし
177	I 1	S X 110	-14	2.3 ~ 1.3	良	良	緑黒灰色	あり
178	C 1	S X 110	-16	2.8 ~ 1.9	良	良	暗灰色	僅かにあり
179	I 1	S X 110	小片	2.9 ~ 1.7	密	良好	暗灰色	あり
180	D 8	S X 110	小片	2.4 ~ 1.0	良	良	灰色、断面：灰白色	なし
181	I 1	S X 110	-14	2.6 ~ 1.4	密	良好	暗灰色	なし
軒平瓦	地区	遺構名	高さ (cm)	顎長さ (cm)	胎土	焼成	色調	金箔痕跡
27	D 8	S K 60	7.4	2.1	密	良好	灰色、断面：灰白色	(平安時代)
28	南東部	表土	4.5	1.3	密	良好	灰色～暗灰色	(平安時代)
182	G 1	S X 110	4.1	2.6	密	良好	灰色～暗灰色	あり
183	I 1	S X 110	3.3	1.4	やや粗	良好	灰色～暗灰色	あり
184	B 2	S E 01	小片	2.1	密	良好	暗灰色	あり
丸・平瓦	地区	遺構名	幅×長さ×厚さ (cm)		胎土	焼成	色調	凸面
23	D 7	S K 85	7.45 × 6.8 × 1.55		密	良好	灰色	ナデ
24	D 7	S K 85	10.55 × 9.5 × 1.55		密	良好	灰色	縄タタキ
25	D 7	S K 85	9.5 × 11.3 × 1.45		密	良好	灰黄褐色	格子タタキ
26	D 7	S K 85	9.2 × 8.1 × 1.8		密	良好	青灰色	格子タタキ

石製品

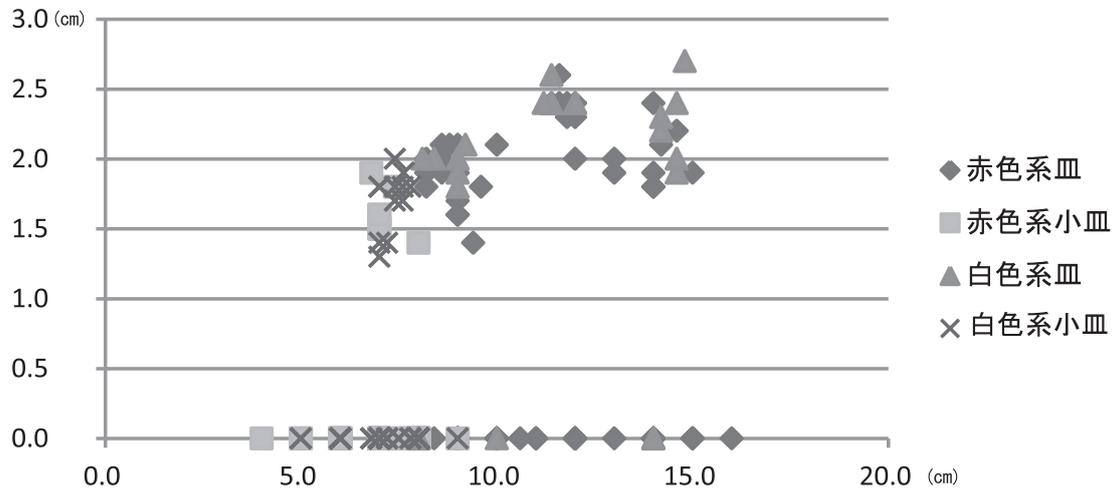
報告番号	種類	地区	遺構名	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	残存 (%)	色調	備考
95	砥石	D8	SK60	3.05	5.2	1.85	ほぼ完形	灰白色 7.5Y6/1	
236	砥石	B2	SE01	4.9	(13.3)	6.5 ~ 8	小破片	灰白色 7.5Y7/2	

鉄製品

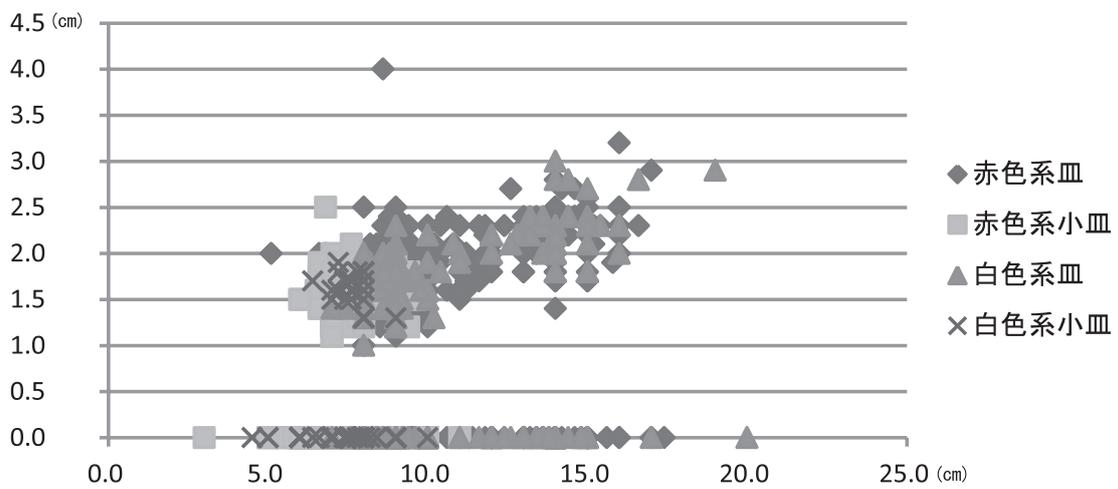
報告番号	遺物名	地区	遺構名	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	残存 (%)	備考
21	鉄釘	D7	SK85	0.7	8.4	0.55	ほぼ完形	
22	鉄釘	D7	SK85	0.45	8.3	0.4	完形	
211	鉄釘	G11	SK25	0.3	4.9	0.2	ほぼ完形	



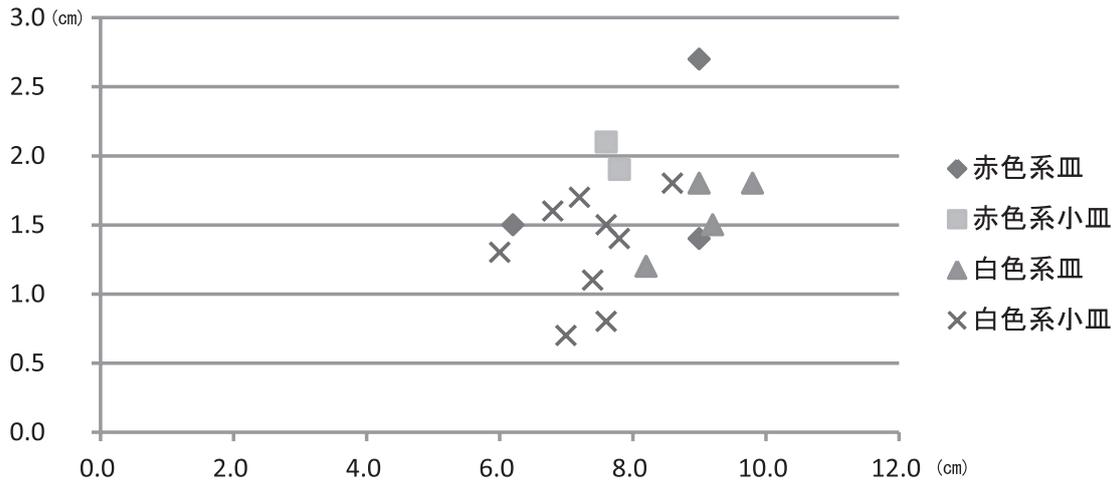
第52図 土坑 S K 85出土遺物法量グラフ



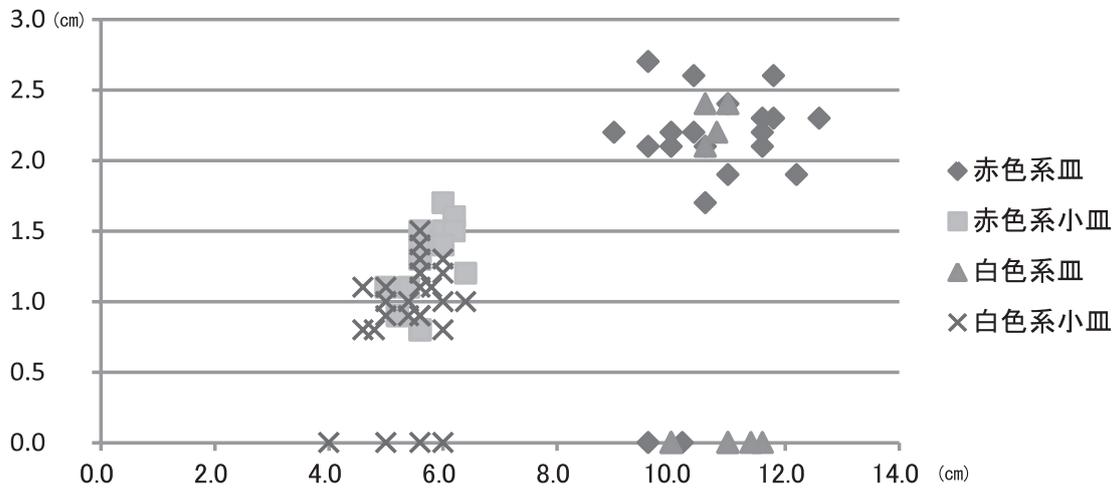
第53図 土坑 S K 60出土遺物法量グラフ



第54図 井戸 S E 90出土遺物法量グラフ



第55図 土坑 S K 80出土遺物法量グラフ



第56図 土坑 S K 25出土遺物法量グラフ

付表7 主要遺構出土遺物計量表

S K 85	破片数	比率	個体数	比率	備考
赤色系皿	534	47.09%	5 3/4	46.11%	
赤色系小皿	51	4.50%	1 1/2	12.03%	
白色系皿	476	41.98%	4 1/2	36.08%	
白色系小皿	50	4.41%	-	-	
瓦質土器	12	1.06%	21/95	1.77%	
瓦器椀	3	0.26%	1/4	2.00%	
青磁	1	0.09%	1/4	2.00%	
白磁	3	0.26%	-	-	
陶器	4	0.35%	-	-	
総数	1134	100.00%	12 4/9	100.00%	

S K 60	破片数	比率	個体数	比率	備 考
赤色系皿	745	48.76%	31 11/12	39.40%	9 3/4 個体スス付着
赤色系小皿	219	14.33%	13 5/12	16.56%	
白色系皿	249	16.75%	15 1/6	18.72%	4 1/12 個体スス付着
白色系小皿	215	14.07%	17 1/2	21.60%	
瓦質土器	59	3.86%	1	1.23%	
青 磁	33	2.16%	1 7/12	1.95%	
白 磁	8	0.52%	5/12	0.51%	
総 数	1,528	100.00%	81	100.00%	

S E 90	破片数	比率	個体数	比率	備 考
赤色系皿	5,525	62.13%	424 7/12	60.84%	43 5/12 個体スス付着
赤色系小皿	1,477	16.61%	135	19.34%	
白色系皿	879	9.88%	84 1/4	12.07%	1 5/12 個体スス付着
白色系小皿	709	7.97%	50 2/3	7.26%	
瓦質土器	234	2.63%	1 7/12	0.23%	
青 磁	34	0.38%	1 7/12	0.23%	
白 磁	4	0.04%	1/6	0.02%	
青 花	1	0.01%	1/12	0.01%	
陶 器	30	0.34%	5/6	0.12%	
総 数	8,893	100.00%	697 11/12	100.00%	

S K 80	破片数	比率	個体数	比率	備 考
赤色系皿	34	10.79%	2 2/3	31.37%	
赤色系小皿	64	20.32%	1 11/12	22.55%	
白色系皿	155	49.21%	2/3	7.84%	
白色系小皿	44	13.97%	3 1/12	36.27%	
瓦質土器	10	3.17%	1/6	1.96%	
青 花	3	0.95%	-	-	
陶 器	5	1.59%	-	-	
総 数	315	100.00%	8 1/2	100.00%	

S K 25	破片数	比率	個体数	比率	備 考
赤色系皿	210	33.39%	8 3/4	22.29%	
赤色系小皿	87	13.83%	11 1/2	29.30%	
白色系皿	155	24.64%	3 1/2	8.92%	
白色系小皿	165	26.23%	14 7/12	37.15%	
瓦質土器	1	0.16%	-	-	
青 磁	1	0.16%	-	-	
白 磁	1	0.16%	-	-	
陶 器	9	1.43%	-	2.34%	
総 数	629	100.00%	39 1/4	100.00%	

※ S K 85・60、S E 90、S K 80・25 から出土した土師器の口径（口縁部残存率1／6以上）を計測し、グラフ化した（第52～56図）。また、上記遺構出土遺物の破片数を計数し、口縁部残存率1／6以上の土師器、瓦質土器、陶磁器の数量から個体数を算出した（付表7）。